エジプト神イシスとオシリスの伝説について

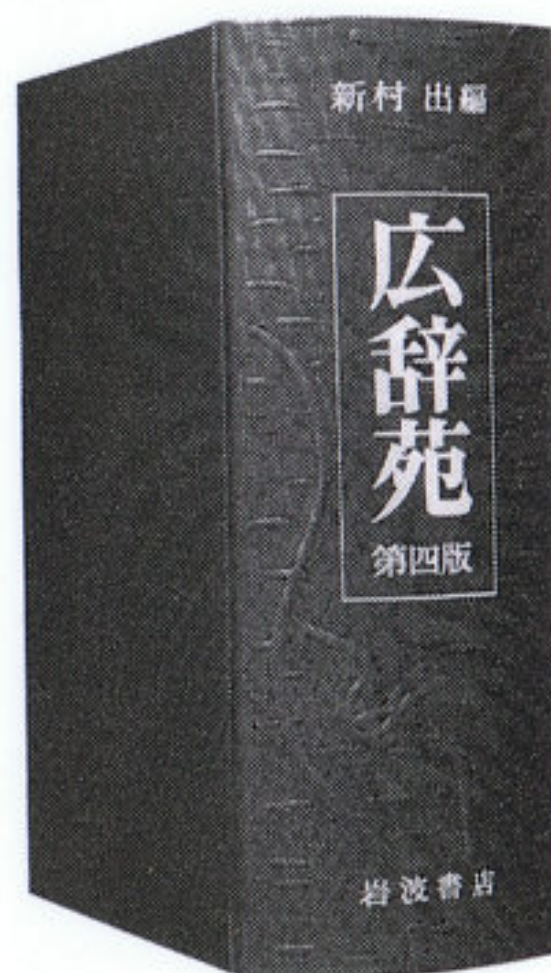
プルタルコス著

柳沼重剛訳

モンテーニュ，ベーコン，ルソー……。エラスムスが「最も学識深き」と呼んだプルタルコス（46－125頃）の浩瀚な著作『モラリア』は，『英雄伝』とともに数多くの熱烈な愛読者をうんだ。その中の１篇，エジプトの理知の女神イシスと太陽神オシリスについての伝説を記した本書は，古代エジプトの宗教・風土を伝えて極めて興味深い。

青 664-5
岩波文庫

エジプト神イシスとオシリスの伝説について プルタルコス著 柳沼重剛訳

青 六六四－五
岩波文庫
520

岩波文庫
33-664-5
エジプト神イシスと
オシリスの伝説について
プルタルコス著
柳沼重剛訳
岩波書店

岩 波 文 庫

33-664-5

エジプト神 イシスとオシリスの伝説について

プルタルコス著
柳 沼 重 剛 訳

岩 波 書 店

Πλούταρχος

ΠΕΡΙ ΙΣΙΔΟΣ ΚΑΙ ΟΣΙΡΙΔΟΣ

凡　例

一、本書はプルタルコスの「倫理論集（モラリア）」と呼ばれているエッセイ集の中の一篇である。

一、底本としては W. Nachstädt-W. Sieveking, I. B. Titschner (edd.), *Plutarchi Moralia*, Vol. II^2 (Leipzig, 1935) を用い、新しい Christien Froidefond (ed.), Plutarque, *Œuvres morales*, Tome V. 2^e partie (Paris, 1988) を随時参照した。

一、文中太文字で記された漢数字は節番号であり、本文下の算用数字は一五九九年に刊行された Cruserius, Xylander 両名によるラテン語対訳つきの二つ折本の頁数であり、ＡＢＣＤＥＦはその版の各頁がこのように区分されていることを示す。「倫理論集」からの引用は通例この頁づけと区分とを使って行なわれるので、本書でもそれを記した。

一、行間の＊印は巻末に訳注があることを示す。

一、訳注はなるべく少なくした。そのために、簡単な説明を本文中に訳しこんだ箇所がかなり多い。

一、文中の小字の（　）は訳者による注記を示す。

一、読みやすさをたすけるために小見出しを加えた。

目次

エジプト神　イシスとオシリスの伝説について

序論―理知の尊さ

一　クレア様*、分別ある者なら、この世のあらゆるものはみな、神々にお願いをして頂戴するものと考えるべきであります。とくに、神々そのものについて知ることなどは、人間にできるかぎりの範囲でですが、どうか知識をお与え下さいとほかならぬ神様がたにお祈りをして頂戴するものなのです。人間が手に入れるものの中で真理ほど重要なものはなく、また神様が下さるものの中で真理ほど畏きものはないではありませんか。ほかのものは、人間がそれを必要とするだけ神様は与えて下さいますが、思慮分別に限っては決められた分け前を下さるのでして、人はめいめいの分け前を得、それだけを用いることができるのです。神は金銀ゆえに栄えたもうのではなく、雷電ゆえに強大にましますのでもなく、理知ゆえに栄えたもうのです。そしてホメロスが神々のことを語っている句の中でも、この点について彼が高らかに歌い上げている文句こそ最も美しいものです(『イリアス』一三、三五四)、

351C

D

「げにおふたりの神は*、氏も同じく父も同じながら、
ゼウスは先に生まれたまい、より多くを知りたもう。」

ホメロスは、ゼウスはポセイドンより知識と知恵において一日の長あるゆえにゼウスの威光の方がより畏いのだと申しているのです。思うに、神の所有したもう永遠の生*が幸せであるのは、必ず、事が起こる前に知りたもうということによります。もし真に在るものを知り、それを思慮する力を奪われたならば、不死とは単に時間の上のこととなり、永遠の生とは言えないものになるでしょう。二　それゆえ真実、なかんずく神々についての真実を知ろうとする欲求は、神聖なものに触れんとする欲求でして、と申しますのも、そのような努力の現われとしての学習と探求は、聖なるものについて知ることにほかならないからでして、これは、浄めの儀式を行なったり神殿に奉仕したりする以上に神の掟(おきて)に従うことであり、これはまた、あなたがお仕えなさっているイシス、他の神々にたちまさって賢くおわし知を愛したもう女神様の御意にかなうことでもあります。その御名がそれを示していると思えるのですが、知ること、理解することこそ、他のいずれの神よりもこの女神にふさわしいでありましょう。

理知の女神イシス

と申しますのは、イシスというのはギリシア語であり*、イシスの敵のテュポン(Typhon)というのもそうで、テュポンとは無知と欺瞞のために精神の正常さを失い(tetyphomenos)*、女神が集めて編んで入信を認められた者にお授けになる教義をずたずたに八つ裂き

E

F

エジプトの神々(1)　([ ]はプルタルコスの表記)

1　アモン[アメン]　2　アヌキス　3　アヌビス　4　バステート　5　シュウ　6　アラフテス　7　アルサペス　8　ハトホル　9　ホルス　10　ホルス(少年)　11　イシス　12　フヌム　13　ホンス　14　モントゥ　15　ムト

にしてしまう。この教義と申すのは、たえず賢明に自分を抑える生き方をし、多くの食物を断ち肉体の快楽を断つなどして身を浄め、気ままに快楽へ向かう心を矯め、よってもって固く厳しい神殿での奉仕に耐え抜く習慣をつけるという点にありますが、その目的は、第一のもの主なるもの、目ではなく心で見るべきものを知ることにあり、それはこの女神の傍らにある、共にある、一体になっている、それを求めよと、女神は呼びかけていらっしゃるのです。女神のお宮の名前も、真に在るものを知り理解するという意味をはっきり言い表わしているではありませんか。イシスのお社はイセイオン(Iseion)と申しますが、これは、もしわれわれがこの宮居に、理性をもって謹んで近づくならば、真に在るものを知ることができるであろう(eiso-menon)ということから名づけられたものでしょう。*

352A

三　さらにまた、イシスはヘルメスの娘*だと申す人も大勢いますし、プロメテウスの娘*だと言う人も少なからずいます。プロメテウスの娘だと言う人々は、彼が知恵と予見を発見したと信じてでしょうし、ヘルメスの娘だと言う人々は、彼が書く技術と音楽・詩の技術の発見者だと信じているからそう言うのです。*それゆえにまた、九人のミューズの筆頭の女神が、ヘルモポリス(「ヘルメスの町」の意)ではディカイオシュネ(「正義」)と呼ばれると同時にイシスとも呼ば

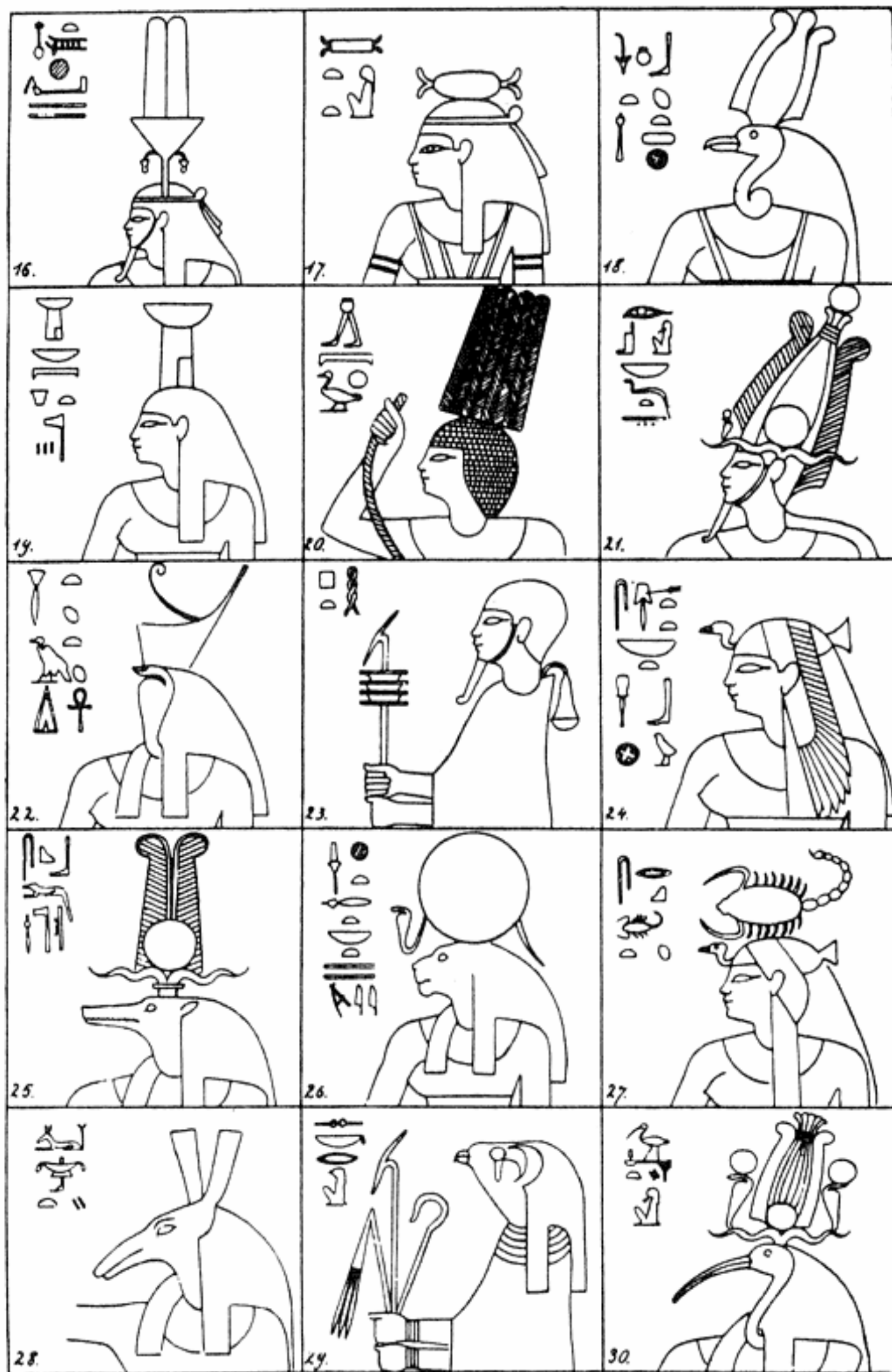
B

れているのです。先ほど申しましたように、イシスは賢明であるからで、イシスは真の意味で「聖器奉持者(ヒエラポロイ)」とか「聖衣保管者(ヒエロストロイ)」と呼ばれている人々*に聖儀を教え示すのです。こういう人々は、あらゆる迷信や、どうでもいい細かい点をああだこうだと詮議立てする悪癖を拭い去って、ただ神々についての聖なる知識だけを、さながら箱にでも納めて持ち歩くように、心に納めております。この人々はまた、黒いどんよりした衣装、あるいは明るく輝く衣装を用意しますが、これはこの人たちの神々についての考えを表明していて、神々を信仰する人々の着衣に関してそれが表われます。*ですから、イシス崇拝者が亡くなると、このような衣装でその遺体を飾ってやるというのは、その死者がイシスについての知識を身につけている、そしてそれよりほかの何も持たずにあの世へ旅立つのだ、ということのしるしなのです。いえ、髭を生やすから、ぼろをまとうから哲学者になれるわけではないように*、亜麻(あま)の着物を着、頭を丸め、髭を剃り落としたからとて*、イシスに仕えまつることにはなりません。正真正銘のイシス崇拝者は、これらの神々を心から崇めるとそれが人々にどう表われるか、またその人はどういうお勤めをするのか、それを知るや、そこにどういう真理があるのかを理性をもって探究する人のことです。

清浄と穢れ

四　もっとも、大方の人々は、祭司はなぜ剃髪(ていはつ)して亜麻

の衣をまとうのかというような、ごくありふれた些細なことを心にとめてはいません。このようなことを理解しようと思案することなどまったくしない人もあれば、祭司が亜麻の衣をまとうのは、彼らが羊の肉を食べないのと同様、羊の毛で織った衣を忌むからで、つまり羊を崇めているからだとの説をなす人もあります。あるいはまた、剃髪するのは嘆きのしるしとしてであり、亜麻の衣の方はその色ゆえだ、つまり、その花の色が、この世界を包んでいる上天の、D 澄んで輝く青色に似ているからだ、と申す人もおります。しかしこれらのことどもの真実の理由はただ一つです。プラトンが申しておりますように（『パイドン』六七B）、「清浄ならざる身が清浄なものに触れるのは神の許したまわぬこと」なのですから。そして、摂りすぎた食べ物だの糞便だのいうものは清浄でもなければ純粋でもないのですが、羊の毛とか人間の産毛（うぶげ）とか頭髪とか爪とかいうものは、その摂りすぎたものから生じて伸びるのです。ですから祭司たちが、もし、一方では清浄を求めて自分たちの頭髪を剃り落とし、体じゅうどこもかしこもすべすべにしながら、一方では羊の毛の衣をまとって歩いたりしては、笑うべきことになりましょう。E 実際、ヘシオドスが（『仕事と日』七四二）

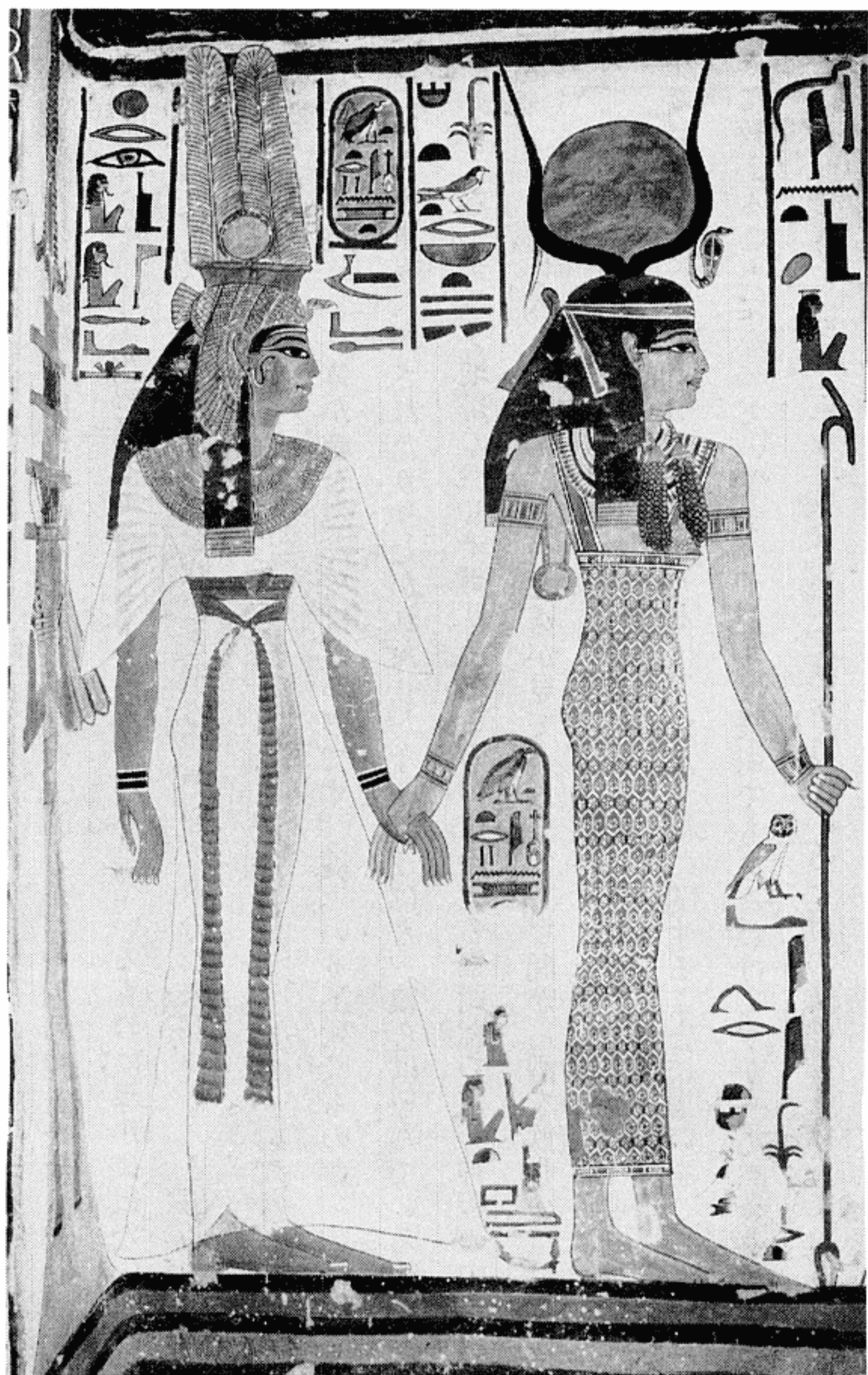
「神々を祀る華やいだ宴の折には、「五つ叉（いつまた）」の「生木（なまき）」＊から

エジプトの神々(2)　([　]はプルタルコスの表記)

16　ネフェルトゥム　17　ネト　18　ネフベト　19　ネプテュス　20　オヌリス　21　オシリス　22　ウト　23　プタフ　24　サティス[ソティス]　25　セベク　26　セフメト　27　セルキス　28　セト　29　ソカリス　30　トト

枯れたところを、輝く鉄(の鋏)で切り取ってはならぬ」(松平千秋訳)

と言っているのは、祭のために身を浄める期間には、こういう穢れは除かねばならぬ、またそういう祭を執り行なっている最中に、このような余分なものを浄めたり取り除いたりすることにとりかかってはならぬ、と教えているのだと思うべきでしょう。そこへいくと亜麻は不死なる大地から生じ、食べられる実をつけ、簡素にして清浄な衣服を提供し、軽やかに身を包んでくれ、一年を通してあらゆる時にむいていて、それに聞くところによればしらみを生ずること最も少ないということですが、こういうことは別の機会に申しましょう。*

穢れとしての過剰

五　祭司 F たちはこのように、余分なという性質をもったものを忌み嫌いますから、食べた後に余分なものをたくさん生じる(つまり便が多くなる)ので豆類のあらかた、羊の肉や豚の肉を拒むだけにとどまらず、浄めの期間には食物に塩を用いないようにもします。その理由はいろいろありますが、わけても、塩は食欲を刺激して、よけいに飲みたくさん食べたくさせるからです。* アリスタゴラス*が言っているような(断片七)、塩が結晶する時その中に小さな生物が取り込まれると、多くのものが死んでしまうのは塩が不純だからだ、などというのは愚かしい推論です。353A メンピス(今日のギザ)で人々がアピスと呼んで崇めている牡牛*に飲ませる水は、その信

ラムセス２世の后をみちびくイシス

者の家の井戸から汲むことになっていて、万難を排してナイル河の水を飲まないようにさせるのは、ナイルの水は鰐で穢れていると彼らが信じているからだとの説をなす人がいますが、そんなことはなく（ナイル河ほどエジプト人に大事にされているものはほかにはないではありませんか）、むしろ、ナイル河の水を飲むと肥る、そして余分な肉がつく、と思われているからです。アピスにしても自分たちにしても、そんなに肥ってほしくはないのです。肉が引き締まって軽やか、そういう体が魂を包んでほしいのです。魂という不死なものが、肉という死すべきものの力や重みに押されたりひしがれたりしないようにと、彼らは望んでいるのです。

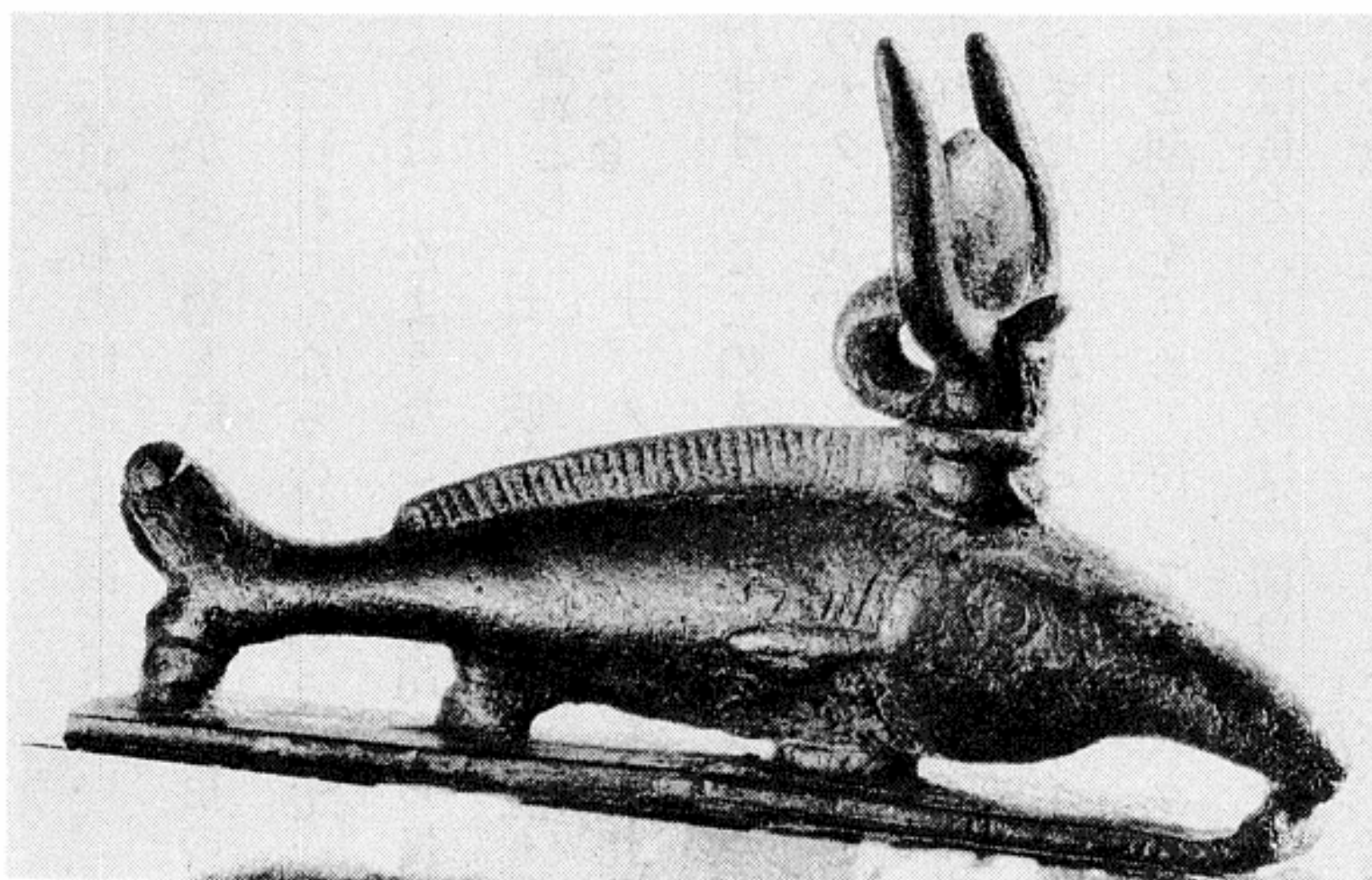
穢れとしての酒

六　デルタ地帯のヘリオポリスでこの神に仕える祭司たちは、神殿の中に決して酒を持ち込みません。王や殿様が見ている前で、昼間から酒を飲むのははばかられるからです。* ほかの神の祭司たちは飲みますが、ほんの少しです。酒を断って身を浄める期間と B いうのが何度もありますが、その間人々は、たえず神に関することに思いをこらし、人から学び人に教えることになっています。王たちは祭司でもあるわけですから、ヘカタイオス*が申しておりますように（断片一一）、聖文書に定められているだけの量の酒を飲んでおりました。王たちが酒を飲むようになったのはプサンメティコス*以後のことで、それ以前は、自分で飲むこ

とも、神様がお好みだとて献酒することもありませんでした。むしろ、かつて神々と戦って倒れた者たち*の血が土と混じり合い、その土からぶどうの木が生長すると信じていたのでした。ですから、酒を飲むと体内に先祖の血が充ちるわけで、酔うと心ここにあらずということになって狂おしくなるのだというのです。エウドクソス*の『世界周遊記』の第二巻（断片三〇〇）によれば、かようなことが祭司たちによって伝えられているということです。C

穢れとしての魚

七　彼らはみな海の魚も避けますが、全部ではなくいくつかのものを避けるのです。メンピスよりやや上流のオクシュリュンコス*の習わしでは、針で釣った魚を避けます。ここの人々はオクシュリュンコスという鼻先の尖った魚*を崇めていて、釣り針にはそのオクシュリュンコスがかかったことがあるかも知れず、それゆえ釣り針は不浄ではないかと恐れるからなのです。さらにナイルを溯ったシュエネの人々は鯛(たい)に似たパグロスという魚を食べません。それはこの魚が、ナイル河が水かさを増す頃現われるらしい、そこで、ナイルの増水を期待をこめて待っている人々におのずと増水を告げることになるからです。しかし祭司たちは魚というものは一切食べません。毎年第一の月の九日に*、一般の人々はめいめいの家の戸口で魚を焼いて食べるのですが、祭司たちは食べず、家の前で燃やしてしまいます。これには D

オクシュリュンコス魚

二つの理由があります。一つは宗教上の理由で一風変わっていますが、これについてはまた後で取り上げるつもりです(三六三D以下)。オシリスとテュポンについて伝えられている聖なる教えというのに従っているのです。もう一つの理由は誰にもよく分かる手近な理由で、魚は食物として必要不可欠でもなく贅沢品でないわけでもないというのです。このことはホメロスでも実証されていて、贅を尽くした暮らしをしていたパイアケス人も、オデュッセウスの故郷のイタカは島であったにもかかわらずその住民も、魚を食べていませんし、あれほど長い間海上の放浪をつづけたオデュッセウスと彼の部下の兵たちも、どうにも仕方のない事情にならない限りは魚を食べていません*(『オデュッセイア』一二、三二九以

下)。概して彼らは海というものを火から生成したと考えており、また海は世界からはみ出し E た部分であって、世界の一部、その構成要素ではなく、世界とは無縁の余分なもので、世界を侵食し害を与えるものと見なしているのです。

儀礼の合理的説明

八　宗教上の儀礼には、ある人々が信じているように、不合理な点とか作り話めいた点とか迷信的なものは織り込まれてはいません。むしろ道徳的な理由やそうせざるを得なかった必然の理由があり、歴史や自然による洗練に無縁でもないものです。例えば玉(たま)葱(ねぎ)の一件というのがあります。イシスの養い子のディクテュスが、手を伸ばして玉葱を取ろうとしたが取りそこなって、川へ落ちて死んだという話*があります。これはとうてい信じがたい話ですが、祭司たちはずいぶんと気をつけて、玉葱を避け、また嫌います。それはこの玉葱だけが、月がかけている時に元気よく育つように F 生まれついているからなのです。玉葱は断食する人にも祭を祝う人にもふさわしくありません。断食する人にとっては、玉葱はのどの渇きを感じさせますし、祭を祝う人にとっては、涙を流させる

エジプトの玉葱

からです。*同様に彼らは豚を不浄の動物だと信じております。豚は月がかけている時にことさら交わりたがるというのです。それに豚の乳を飲むと、かさぶたのできるかゆい発疹が出るからです。満月の夜に一度だけ、豚を犠牲に供し、その肉を食することがありますが、それに列 354A 席する人々はこんな話をいたします。テュポンが満月の夜に一頭の豚を追っていたところ、木の棺を見つけた。中にはオシリスの遺体が横たわっていた。*テュポンはそれを八つ裂きにした、というのです。ただし誰もがこの話を信じているわけではありません。話というものが得てしてそうであるように、これもまた何かが誤り伝えられたものだと人々は思っております。

しかし彼らは申します。昔のエジプト人は奢侈、浪費、甘え、そういうものをすっかり拒否していたので、これはナイル河のずっと上流のテバイでのことですが、そこの神殿に、メイニス王*に対する呪いの文句を刻んだ碑を置いたと言っているほどだというのです。このメイニス王というのは、エジプト人の財宝も無し金も無しの簡素な生活を駄目にした最初の王だったのです。ボッコリスの父親だったテクナクティス*がアラブ人と戦っていた時、荷駄の到着が遅れ B ると、手元にあった食糧で事足れりとし、麦藁（むぎわら）の褥（しとね）に伏して深い眠りを眠り、かくて安上がりの生活を歓迎した、そしてこのことから彼はメイニスを呪ったのだが、それを祭司たちが称賛

すると、彼はその呪いの言葉を碑に刻んだ、と彼らは伝えております。

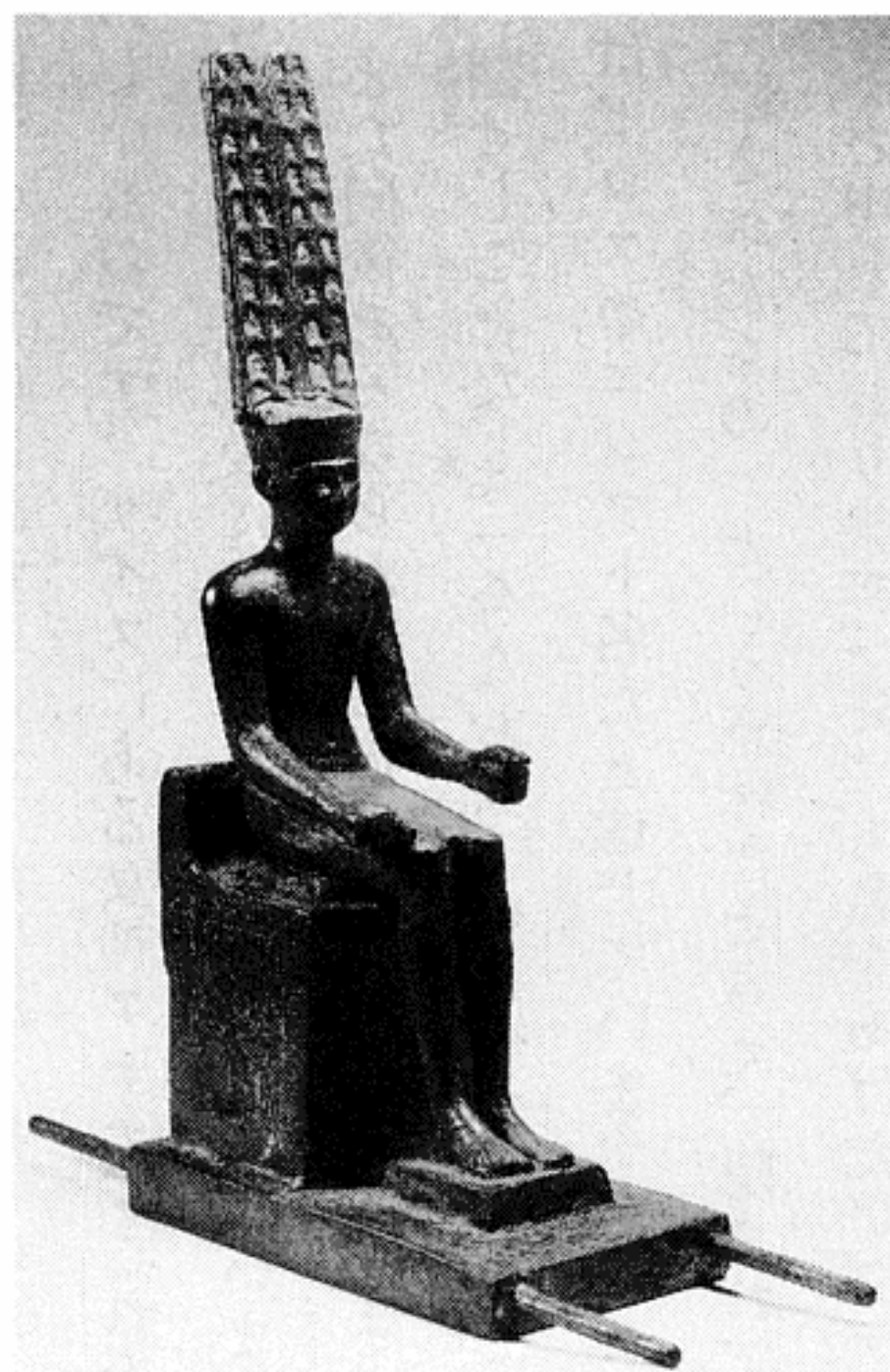
神に関する教えは隠されている――謎解き

九　王は祭司または武士階級から任命されます。後者は勇敢ゆえに、前者は知恵ゆえに尊敬と名誉を得ている人です。武士階級の者が王に指名されると、彼はただちに祭司の一員となり、祭司としての学問(ピロソピア)にあずかりますが、これは大部分、物語と言葉によって真理をぼんやりと反映している、あるいは覗かせるような、秘めやかなものです。例えば彼ら自身神殿の前にスピンクス像*を据えますが、これはもちろんのこと、彼らの神についての教えには謎かけのような知恵があるのだということを、間接的に示すものとしてふさわしいものです。サイスにある女神アテナ、これを人々はイシスだとも信じているのですが*、このアテナの座像にはこんな銘文が刻まれています、「われはかつてありしもの、今あるもの、また向後あるならんもののすべてなり。わがまとう外衣の裾を、死すべき人間のただ一人も、翻(ひるがえ)せしことなし。*」今なお多くの人々がアメン(これをわれわれはアンモンと訛(なま)っています)とはゼウスのエジプト名だと信じていますが、セベンニュトスのマネトは*(断片一九)、これは「隠されたもの」という意味だと考え、隠されているということがこの語によって示されていると申しております。先にも名をあげたアブデラのヘカタイオスは(断片*B*八)、

C

アメン

エジプト人はたがいに呼びかける時にこの語を使っているので、これは挨拶の言葉だと言っております。とするとエジプト人が森羅万象と一つだと信じている最高神をメンと呼んでいるのは、それが見えず、隠されているゆえに呼びかけて、どうかお姿をお現わし下さい拝ませて下さいとお願いしていることになりますね。

神にかかわることについてのエジプト人の知恵に見られる敬虔さは、かくのごときものなのです。一〇　以上のことについてはギリシア人にも多くの証人がおりまして、とくに中でも賢

い人々の名をあげることができます。ソロン、タレス、プラトン、エウドクソス、ピュタゴラス、それにある人々の言うところによればスパルタの立法家リュクルゴスもそうで、これらの人たちはエジプトを訪れて祭司たちと交わったといいます。エウドクソスはメンピスの人コヌピスの教えを受けたそうですし、ソロンはサイスのソンキスに、ピュタゴラスはヘリオポリスのオイヌピスに教えられたと申します。とくにピュタゴラスは、エジプト人を賛嘆しエジプト人から賛嘆され、彼らの、何かしるしに事寄せて言う物の言い方や秘儀めかした言い方を模倣して、自分の教説のあちこちに謎かけをちりばめたらしいのです。その証拠に、ピュタゴラスの諺（ことわざ）めいた言葉の多くは、エジプトの祭司文書（ヒエログリュピア）と呼ばれるものの性格とまったく同じようなものだからです。例えば、「戦車の上で物を食らうな*」、「一日の糧食に腰を下ろすな*」、「椰子（やし）の木を植えるな*」、「家の中で剣で火をかき起こすな*」など。私自身はどう思っているかと申せば、これらの人々が一をアポロン、二をアルテミス、七をアテナ、最初の立方数をポセイドンと呼んでいるのは*、エジプト人の宗教にしっかり根を下ろしていること、秘儀で演じられる身振り手振り、それどころか文書によく似ていると信じます。と申しますのは、エジプトの祭司は王やオシリス神の名を文書に書く時は、一つの目と笏杖とでそれを表わすからです*。もっと

E　F　355A

も、中にはオシリス(Osiris)という名は「多くの目を持つ」という意味だと説明する人もいます。エジプト語でos-というのは「多い」ということで、-iriとは「目」のことだというのです。* 天は永遠なものであるゆえに老いることがない、それを小さな毒蛇で表わしますし、人間の感情は心臓の下に炉を置いた形で表わします。テバイには手のない裁き人たちの像がありました。最高の裁き手の像は目をつぶっています。これは、正義というものは贈り物にも動かされない、情にも動かされないということなのです。* 武士階級の人々は黄金虫(こがねむし)の印形(いんぎょう)を持っていましたが、これはこの虫がみな雄ばかりで雌がいないからです。* この虫は糞(ふん)を丸めてその中に子を産みますが、こうして産む場所を作っているだけで、この糞が子の栄養になるわけではありません。

謎解きの実際例

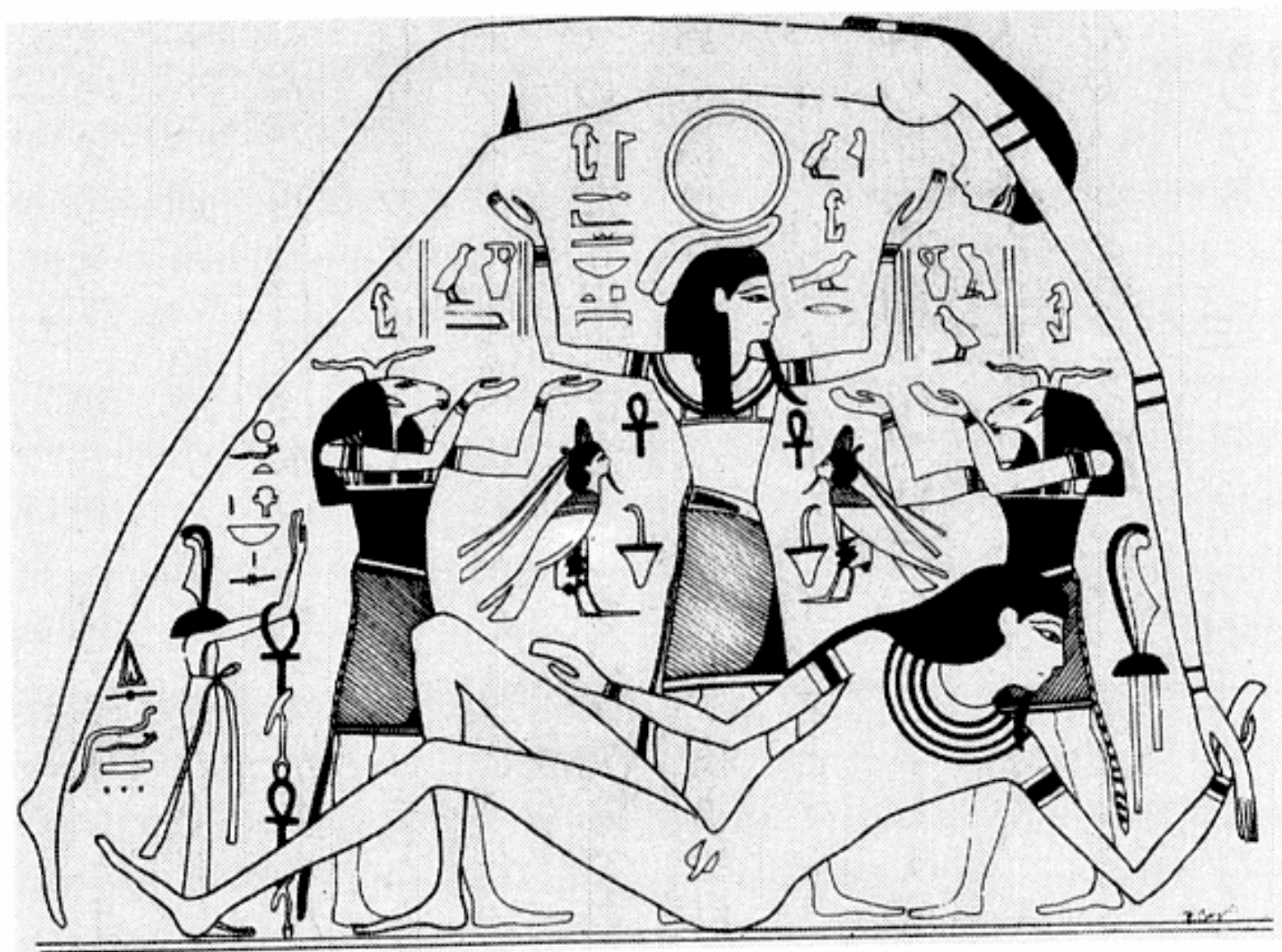
一一　こういう次第ですから、エジプト人が神々の話をする、例えば神々が放浪し B たとか八つ裂きにされたとか、そんな話をするのを聞く時はいつも、今述べたことを思い出して、本当にそういうことが起こった、そういうことが為されたと信じてはいけないのです。例えば彼らが犬をヘルメスと呼んでいても、* 文字通りヘルメスは犬だと思っているわけではないのでして、むしろ、犬の警戒心、夜も眠らぬこと、賢さ、あるいはプラトンが言っ

蓮の花

ているように（『国家』三七五Ｅ）、相手を知っていれば好意をもち、知らなければ敵意を抱くという性質を見て、神々の中で最も抜かりのないヘルメスを連想している、ということなのです。また彼らは、太陽神が蓮の花から赤ん坊として生まれたと信じているわけではなく、日の出の時太陽が蒸気の中からぱっと輝き出る、その様をこのように「蓮から生まれる」と象徴的に言い表わしているのです。これもまた同様なことで、ペルシアの王の中でもとりわけ狂暴で、彼の友人から「剣」と呼ばれている（王統の系図上では今なおその名で呼ばれている）オコス*が、多くの人々を殺し、つ C
いには聖牛アピスまで殺して、その肉を食らおうた、という話がありますが、この話はオコスの本

性をそのまま示しているというよりは、彼の性格の苛酷さ邪悪さを、人殺しの道具にたとえて言い表わしたものでしょう。神々に関することどもをこのようにお聞きになり、神話を敬虔に学問的(ピロソピコス)に解釈する人々から説明を受け入れられるなら、そして犠牲を捧げるにせよ祭を奉納するにせよ、神々についての本当の信念ほど神々のお気に召すことはないと思し召して、昔から受け入れられ伝えられてきたとおりを行ない、つねにそれを守るようになさるなら、迷信を追放することができるでありましょう。迷信と申すものは、まったく神を信心せぬことに劣らず悪しきものなのです。 D

オシリスとイシスの物語―オシリスと彼をめぐる神々の誕生

一二　以下に物語を紹介しますが、できるだけ手短に、とくにまったく無用な点よけいな事柄は割愛いたしましょう。さて話はこうです。レアはクロノスとひそかに契(ちぎ)りあいましたが、それが太陽神の知るところとなり、彼はレアに呪いをかけて、いかなる月にもいかなる年にも子を産むことなかるべし、と申しました。ところがこのレアをヘルメスが愛して交わり、*それから月と将棋をさして勝ち、*彼女の輝きから七〇分の一を取り上げ、その取り上げた七〇分の一を五日として集めて、三六〇日に付け足しました。この付け足された五日を、今日のエジプト人は閏日(うるうび)と呼び、神々の誕

初源の神々――ゲブ(大地), ヌゥト(天空), シュウ(空気)

生日として祝っています。[*] 第一日目にはオシリスが生まれ、その誕生と同時に声が響き、「万物の主なる神、光の中に進みたもう」、と言ったと申します。テバイで水汲みをしていたパミュレという女が、ゼウスの神殿からこの声が響いてくるのを聞いた、と言う人もあります。この言い伝えですと、その声は、「大いなる王にして恵みの施し手オシリス、今生まれたまいぬ」、と呼ばわったということです。[*] そこでパミュレは、クロノスが委ねてくれたことでもあるし、オシリスを育てました。人々はパミュレのために祭を祝いますが、それはディオニュソスに捧げる男根捧持の行列に似ています。[*] 閏日の第二日にはアル

E

エリスが生まれました。この神のことをアポロンと呼ぶ人もありますし、年長のホロスと呼ぶ人もあります。* 第三日にはテュポンが生まれたが、胎内に宿った日数も並ではありませんでしたし、通常の産道から生まれたのでもなく、轟音とともに母神の脇腹を突き破って跳び出しました。* 四日目には水辺でイシスが生まれ、五日目にはネプテュスが生まれました。ネプテュスはテレウテ(果て)ともアプロディテとも呼ばれ、ニケ(勝利)とも呼ばれます。* オシリスとアルエリスの父神はヘリオス(太陽)で、イシスの父はヘルメスで、テュポンとネプテュスはクロノスの子だと申します。こういう次第ですから、エジプトの王たちは閏日の三日目を忌み日と決め、執務もしませんでしたし、夜まで自分の体の世話も一切しませんでした。ネプテュスはテュポンと結婚しました。イシスとオシリスはたがいに愛しあいました。それも生まれる前、母神の胎内の闇の中で結ばれたと申します。またある人々の申しますには、アルエリスはこの二人の結婚から生まれたということで、エジプト人は年長のホロス、ギリシア人はアポロンと呼んでいるとのことです。

356A F

オシリスの功

一三　オシリスは王位に即くや直ちに、* エジプト人を無力で獣のような生活から解放したそうです。つまり栽培して実りを得る道を示し、法を定め、神々を敬うこと

を教えたのです。のちにエジプト全土をくまなく巡って平定しましたが、身に寸鉄を帯びず、言葉の力、そしてあらゆる種類の歌と音楽によって大勢の人々を惹きつけて従えました。ですからオシリスは、ギリシア人から見るとディオニュソスだということになるのです。オシリスの留守中は、イシスがたいへんよく警戒し目を光らせていましたので、テュポンは謀反の一つも起こしませんでしたが、戻って参りますと、テュポンは奸計(かんけい)をたくらみました。七二人の男たちを共謀者となし、またアソという名のエチオ　B

テュポンのたくらみ
―オシリスの受難

ピアの女王の力を借りました。* テュポンはひそかにオシリスの体の寸法を計り、その寸法にぴったりの、美しく、見事に装飾をほどこした箱を造らせると、それを広間の宴席に運び込みました。一同の者がそれを一目見てきれいだと言い、賛嘆措(お)くあたわずという風情でいますと、　C
テュポンはいかにも冗談めかして、どなたでもこの箱の中にお休みになって、お体が箱にぴったり合う方がいらっしゃいましたら、これを進呈いたしましょうと約束しました。そこで人々が代わる代わる試してみましたが、誰もうまく合いませんのでオシリスが箱の中に入って横になりました。すると共謀者どもが駆け寄って乱暴に蓋をかぶせるや、外からボルトを打ち込んで締め、熱く溶かした鉛をその上から注いで河へかついでゆき、その河に運ばせてタニスの河

口*から海へ流しました。このためにこの河は今でも「怨河」だの「忌河」だのと呼ばれていま す。この事件が起こったのは、オシリスの治世二八年目のアテュルの月の一七日で、太陽が蠍(さそり)座を通過する時でした。* けれども、二八年目というのはオシリスの年齢が二八歳の時ということで、治世の二八年目ではないと言う人もあります。 D

イシスのオシリス探索

一四　オシリス受難のことを、ナイル河口のケンミス辺りに住まいなすパンやサテュロスらが最初に知って、事件の知らせを広めました。そのために、今なお、大勢の人々が突然に混乱し興奮することをパニコス(パニック)と申します。* イシスはこれを聞くと、その場でひとつかみの髪を切って、喪服をまといました。そこからこの町は今に至るまでコプトスという名で呼ばれています。もっとも、この名前の意味は「喪失」ということだと考えている人もおります。「失う」という意味の動詞は Koptein というではないか、というわけです。* イシスは途方にくれて全土をさまよい、* 会う人ごとに声をかけ、相手が子供でも、会えば箱のことを知らないかと尋ねました。ところがその子供たちがたまたま箱を見ていて、テュポンの一味の者たちが箱を海へと押し出した河口の名を申しました。これ以来エジプト人は、子供には予言の能力があると考え、ことに、子供たちが神域で遊びながら偶然に口にした E

ことに、前兆めいた意味があると考えるようになったのでした。

アヌビス

　イシスはオシリスがつい気がつかずに、妹のネプテュスをイシスと取り違えて愛を交わしたことを知り、その証拠に、オシリスがネプテュスのもとに遺した、甘い蜜を含んだメリロトンなる草*を編んで輪にした冠を見つけました。そこで彼女は、オシリスがネプテュスに生ませた子を探しました（というのはネプテュスは、テュポンを恐れるあまり、この子が生まれ落ちるとすぐに捨ててしまったのです）。けれども、犬どもの手引きに従って、さんざん苦労を重ねたあげくにようやく見つけますと、この子を養育し、自分の衛士にして従者というものにして、アヌビスという名を与えました*。彼は、ちょうど犬が人間を見張るように、神々の見張りをしているそうです。

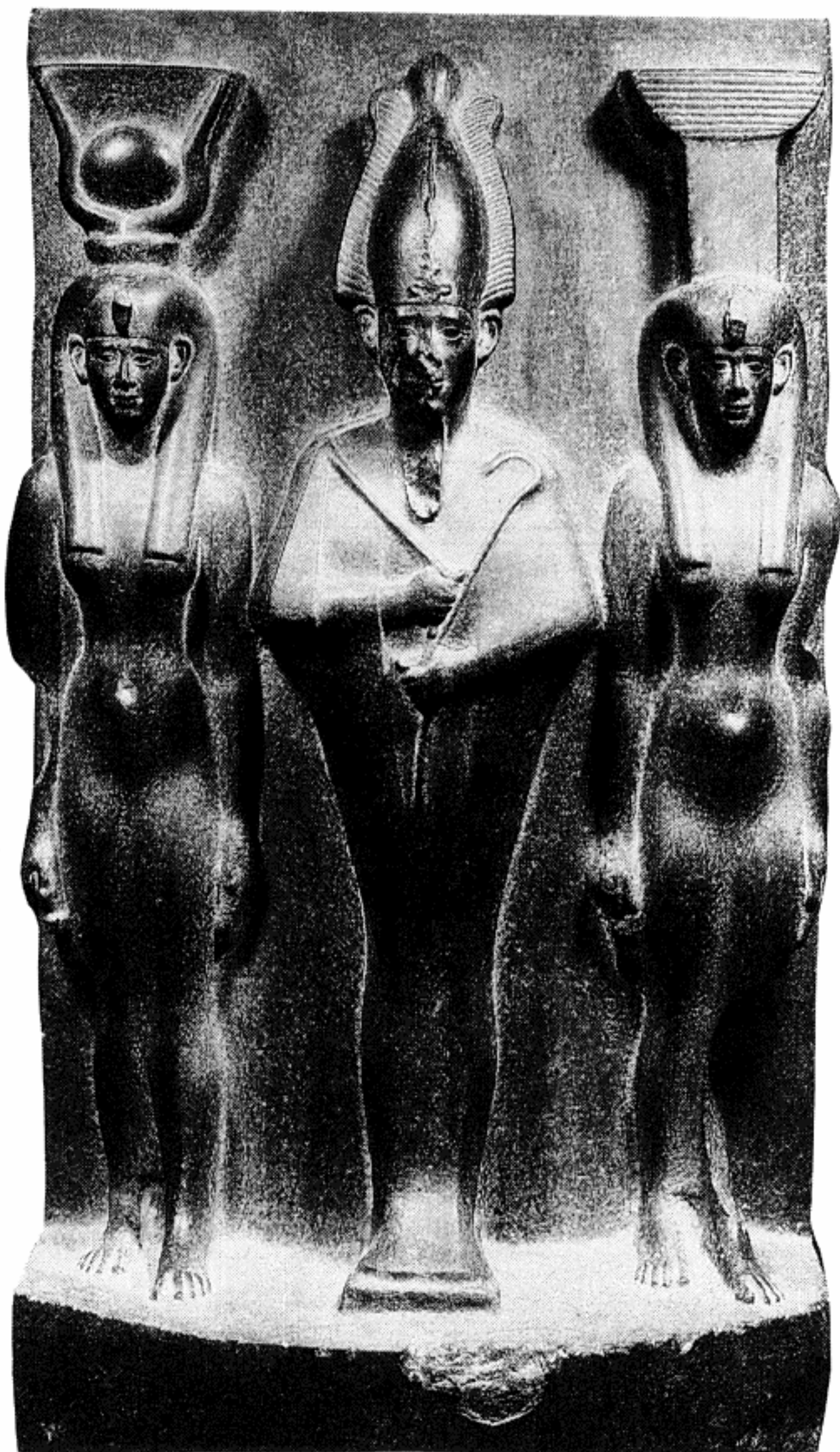
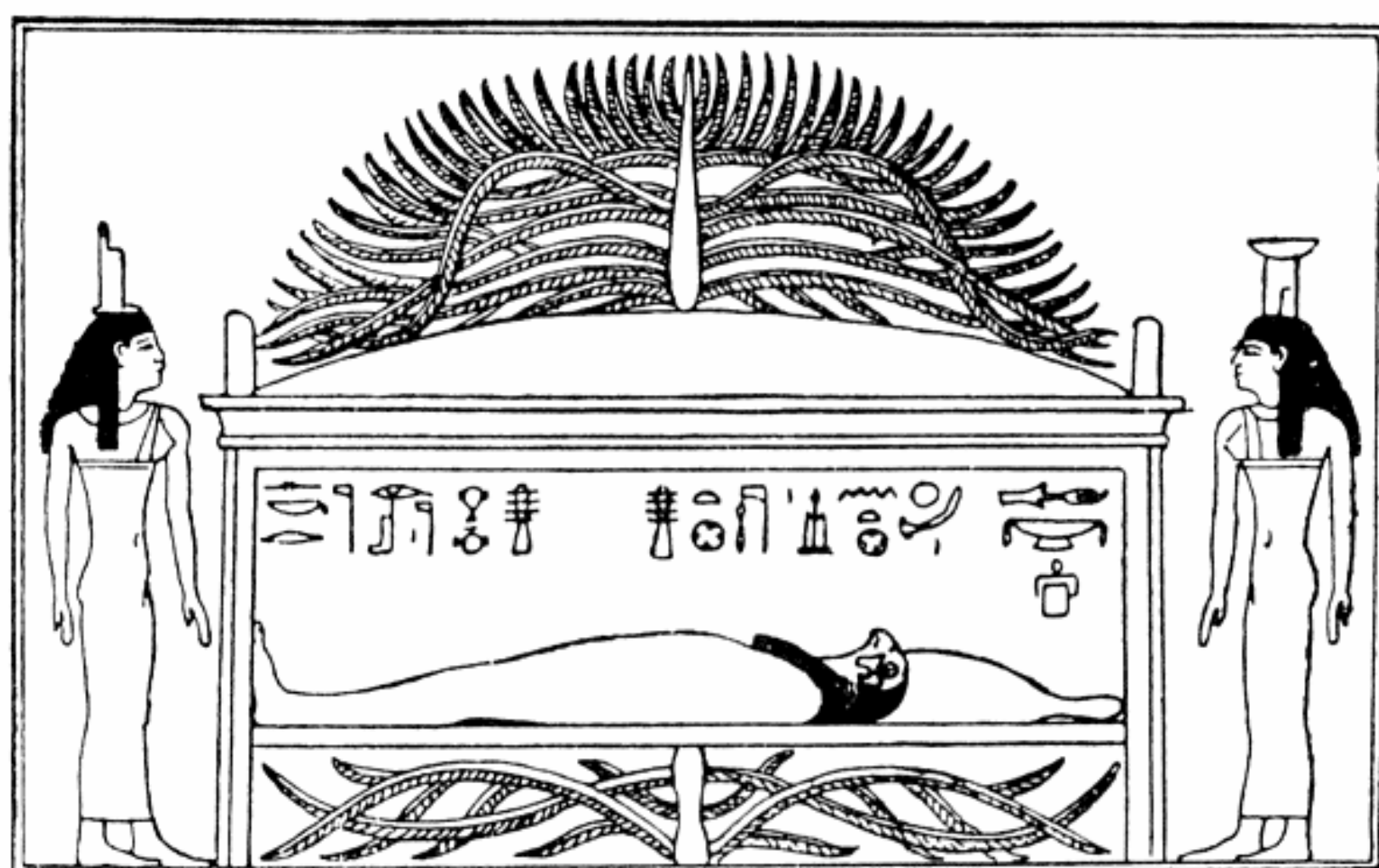
F

ビュブロスにて

一五　その後イシスは、例の箱がビュブロスの町の浜*に打ち上げられているが、波はこの箱をヒースの木立の中にそっと置いてくれた、ということを知りました。ヒースの木は、芽吹いてからまたたく間に伸びて、堂々とした若木になり、中に箱を包み込んで生い立ち、箱は木の中にかくされて見えなくなっていました。王がそのヒースの大きさに驚き、オシリスの棺をかくし込んでいる幹を切って、屋根を支える柱にしました。イシスは何か

357A

不思議な噂の息というようなものによってこのことを知り、ビュブロスにやって来たということです。泉のほとりに、気もそぞろに目に涙を浮かべて座り、ほかの誰にも声をかけず、王妃の侍女たちにやさしく挨拶をいたしました。そして彼女たちの髪を編んでやって、肌に、自分のかぐわしい芳香のただよう息を吹きかけてやりました。王妃は、侍女たちを見るや、このよそから訪れた婦人の髪とアンブロシア*を息づいている肌へのあこがれのとりこになりました。B そこで王妃はイシスを参内(さんだい)させ、彼女とうちとけ、子供の乳母にしました。この時の王の名はマルカトロスといったそうですが、王妃の名はアスタルテだったと言う人もあれば、サオシスだったと言う人もある、いやネマヌスだったと言う人もありますが、もしネマヌスというのならば、ギリシア人がアテナイスと呼んでいる女性のことです。*

一六　イシスは乳首でなく指を子供の口にくわえさせて養育したそうですが、夜になると、この子供の体の不死身でない部分 C を焼いてしまいました。そして自分は燕になって、例の柱のまわりを飛びまわって嘆きの声をあげました。* 王妃はこの有様を見、子供が火に焼かれて不死な体質を奪われた時絶叫しました。すると女神は本性をあらわし、屋根が下なる柱をわれに与えよ、と言いざま、いとも容易にその柱を下の方から引き抜き、ヒースの木を切りました。それからその木を薄い亜麻布で包

オシリス(中央)，イシス(左)，ネプテュス(右)

オシリスの墓

み、それに甘い香油をふりかけて、王と王妃に預けました。今でもビュブロスの人々は、イシスの神殿に安置してあるこの木を崇めているということです。女神は泣き伏して棺にとりすがりましたが、その泣き声のあまりの激しさに、年少の王子は死んでしまいました。イシスは年長の王子を伴い、棺を載せて舟で去りました。夜明けにパイドロス河で風がややつのってきますと、女神は怒りを発して河の水を干上がらせました。

マネロス

一七　やっと人気のない所まで来ると、彼女は自分一人になって棺を開き、オシリスの顔に自分の顔をすり寄せ、彼を愛撫して涙をこぼしました。ところが連れてきた王子が、黙って後ろから近寄ってきて、彼女の様子を知ったのに気

がつくと、彼女は振り向きざま恐ろしい目でにらみつけました。子供はその怖さに耐えられずに死にました。そうではないと言う人もあります。王子は、前にも申しましたように、*海中に落ちて死んだのであって、なればこそ彼はイシスのおかげで崇められているのだというのです。と申しますのは、その人々の考えでは、エジプト人が宴会の時に歌を捧げて称えるマネロスと同じ人物だからなのです。また別の人々によりますと、この王子の名はペルシオスといい、女神は都市を建設して、この王子の名をそのまま都市の名としたと申します。また人々が歌で称えているマネロスは、音楽の発見者だったということです。さらに別の所伝もありまして、それによりますと、マネロスというのは神の名でもなく人の名でもなく、宴会で飲んで楽しんでいる人々が、「運命はかくてこそあれ」と唱和する文句だということです。エジプト人は何かにつけて「マネロス」と唱えては、こういう意味を表明しているのだというのです。例えば、これは言うまでもないことで、死んだ人間の像を棺に納めて宴会の場にかつぎ込み、室内を一巡してそれを一同の者に見せる、などということをやるのも、ある人々が思いなしているように、オシリスの受難の思い出としてではなく、ほろ酔い加減の列席者たちに、ほどなく諸君もこうなるであろうゆえ、現在あるものを利用したまえ、今を楽しみ

E

F

たまえ、とすすめる、そこでこういう愉快でないものを歓楽の場に持ち込むのだというのです。*

テュポン、オシリスの遺骸を切断

一八　イシスは旅をつづけてブトに着くと、そこで育った息子のホロス*のもとに棺を置きました。だが、月の光の下で夜狩りをしていたテュポンがちょうどそこへ来ました。彼はオシリスの遺骸に気がつくと、それを一四に切断してばらまきました。* それを知るとイシスは、パピルスの舟に乗って沼地を渡って探し回りました。だからパピルスの舟で渡る人は、鰐(わに)も襲わないのだと言われています。鰐も女神様ゆえに、そんなことをするのは恐ろしい、あるいは女神様を崇めているのでしょう。しかしこのために、エジプト中にオシリスの墓というのがたくさんあることになりました。イシスは、切断された部分を見つけてはそこに葬ったので、ということです。しかし、それは違うと言う人もあります。その人たちの意見によりますと、イシスは、なるべく多くの町でオシリスが拝まれるようにと、彼の像を造って、さながら遺骸そのものを与えるかのように、各都市に配ったというのです。こうすれば、もしテュポンがホロスとの戦いに勝って、そこでオシリスの本当の墓を捜し出そうとしても、あまりたくさんのオシリスの墓のことを聞かされ、時には見せられなどし

358A

B

て、もうやめておこうという気になるだろうから、なのだそうです。オシリスの体の部分で最後まで見つけることができなかったのは、ただ一つ、彼の陰部でした。海中にほうり込まれたとたんに、レピドトスだのパグロスだのオクシュリュンコスだのいう魚どもがたかって、食べてしまったからです。ですからこれらの魚はエジプトではいちばん嫌われているのです。イシスはその陰部の似像を造って崇めました。エジプト人は今でもこれを祀るお祭をしております。*

ホロス

一九　その後オシリスは死者の国からホロスの所へ来て、戦いに備えての稽古に汗を流させました。* それから彼はホロスに問うたそうです、「最も立派な行ないとは何であると心得るか」。ホロスが、「父母が難儀に遭っておられるのをお助けして復讐することです」、と答えると、オシリスが再度尋ねて言うことに、「戦いに出て征く者にとって最も有用な動物は何だと思うか。」ホロスが、それは馬にございます、と答えると、オシリスは驚き、何ゆえにライオンにはあらずして馬と申すのか、と重ねて問います。するとホロス答えて曰く、「なるほどライオンは助けを必要とする者に助けを与えてくれます。しかし馬は、敗走する敵兵を孤立せしめ、敵軍を殲滅いたしますゆえ。」オシリスはこれを聞くと、ホロスはもう

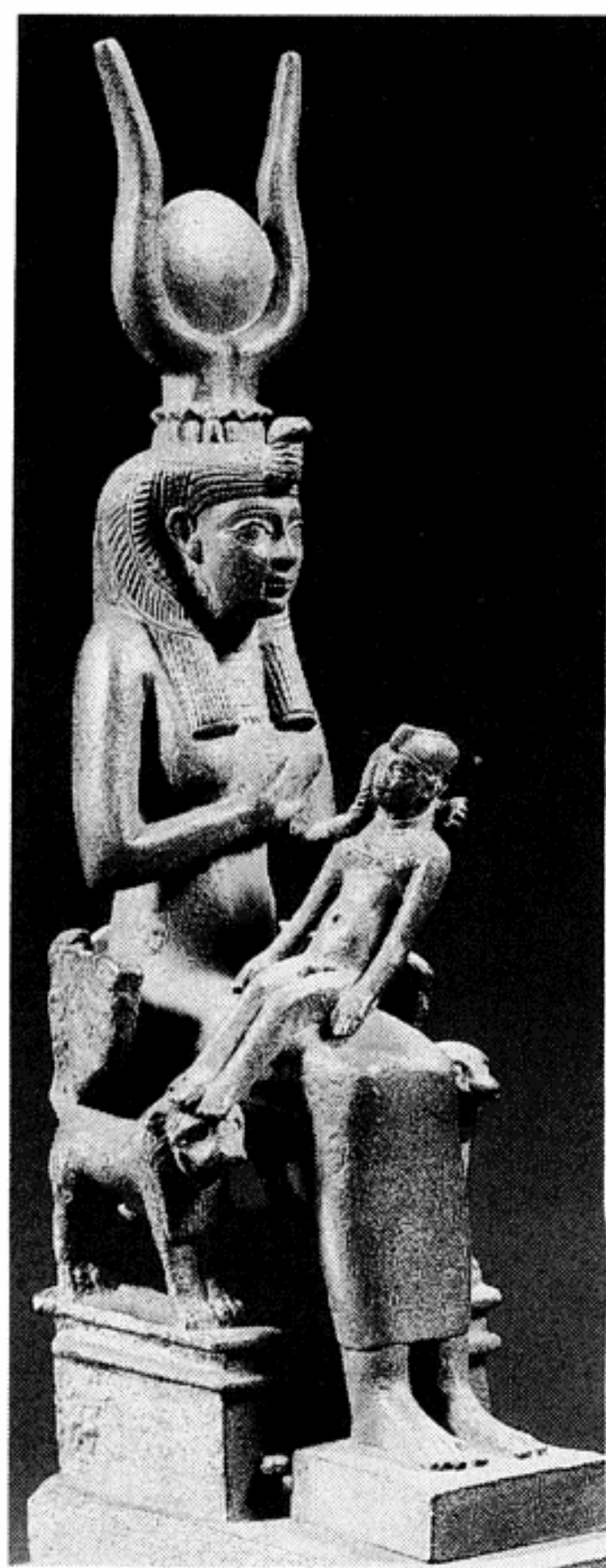
トゥエリス

すっかり覚悟も用意もできていると喜びました。大勢の人々がテュポンの所からホロスのもとへ馳せ参じましたが、テュポンの第二夫人のトゥエリスもホロスの側につきました。* 一匹の蛇が彼女を追ってきましたが、* ホロス軍の兵士たちがそれを切り刻みました。それを記念して今日でも人々は縄を一同の真ん中に投げ出してそれを切るなどという行事をやっています。さて戦(いくさ)が始まるとこれが何日も何日もつづきましたが、ホロス側が勝ちました。テュポンが縛られている所をイシスが通りかかりました。すると彼女はテュポンを殺さずに、いましめを解いて放してやりました。* しかしホロスはこれをじっとこらえることができず、母親に向かって手を

上げ、その頭から王冠を払い落としました。* が、ヘルメスがあらためて牛頭の兜（かぶと）を彼女に戴かせました。

テュポンはホロスが庶子であるとの訴えを起こしましたが、ヘルメスがホロスを助け、神々一同の判決により、彼は嫡子であると認められました。テュポンはこの後も二度にわたって戦を起こし、二度敗れました。* イシスは死後のオシリスと結ばれ、ハルポクラテスの母となりましたがこの子は早産で下半身が虚弱でした。*

神話の解きかた

二〇　以上でこの物語の主な点はほとんど尽くしました。ただし、あまりひどい話は省きました。例えばホロスの体をばらばらにしただの、イシスの首をはねただのいう話です。そうではありませんか。もし、幸（さき）わえる不死なる本性をおもちの神々（私たちはこの本性ゆえにこそ神様を神様と思うわけでしょう）に関して、まるで本当にこのようなことが為され、このようなことが起こったかのように信じたり語ったりしようものなら、アイスキュロスの申している（断片三五四）「穢れを吐き出して口を浄めねばならぬ」、という言葉など、ここで申し上げても致し方ありませんでしょう。あなた御自身、神々についてかように異常で野蛮なことを信じている者たちを嫌っておいでていらっしゃる。よくご存じのように、この種

イシス

の話は、世にも下らぬ物語、まったく空っぽの作り話、つまり詩人とか作家とかいう連中が、まるで蜘蛛(くも)さながらに、自分自身の身から、何の根拠もない話の糸を生んでは織り、織っては広める類(たぐい)の話とはまったく違う、そうではなくてむしろ、人が何とも打開の道の見えぬ難儀に陥った、何かそういう要素を含んでいる話なのです。学者たちは虹を説明して、あれは太陽の光が雲に反射していろいろな色になっているのが、雲に向かって行くわれわれの視線とぶつかったものだと申しますが、同様に、今私たちが見た話もまた、何か本当のことの反射で、その本当のことを見れば、私たちの心はこれとは別の考え方に引かれて行くことになるのです。エ

F

359A

ジプトの犠牲式にはどこか陰鬱なところがあることとか*、神殿の構えが、一方では開けっ広げの翼(よく)や柱廊に向かって開いているが、他方では、地下に墓室そっくりの祭司控室がある*、とかいうようなことからもそれがうかがえますが、そもそもオシリスを葬った場所と称される所がたくさんあるということ、ひいてはオシリス神殿についての信仰、そこからも分かります。例えば、ディオキテスという小さな町がありますが、この町にこういう名前がつけられたのは、この町だけに本物のオシリスの遺骸があるからだそうです*。また、エジプト人の中でもとくに裕福な人、あるいはとくに有力な人々はアビュドスに葬られていますが、これは、とくにオシリスが葬られているのと同じ所に葬られるという見栄を張りたいからだと申します*。そうかと思うと、アピスというのはオシリスの霊魂の似姿ですが、このアピスはメンピスで育てられたのであり*、そしてメンピスにはオシリスの遺骸も安置されている、とも言われています。メンピスという都市の名は、「善き人々の休息所」という意味だと解する人もいますが、いや、「オシリスの墓」という意味だと解する人もおります*。ピライ付近のナイル河の中洲*は、ふだんは上陸することを許されず、近づくこともならぬ、鳥でさえもこの島では羽を休めず、魚も近寄らない、そういう島ですが、ある特定の期間だけ、祭司がこの島に

オシリスの墓

渡って犠牲を捧げ、墓に花環を供えます。墓の周囲には、どんなオリーヴの木よりも背の高いメティデの木が蔭をなしています。二一　エジプトにはオシリスの墓と言われるものが多くあるが、遺体が葬ってあるのはナイル河口近くのブシリスの墓である、ここはオシリスの生誕の C 地なのだから、と、多方面な哲学者エウドクソス（前四世紀）は述べております*（断片六〇）が、タポシリス*については一言の注釈も要しないでしょう。この地名がTaphos＋Osiris→Taphosiris, つまり「オシリスの墓」という意味なのですから。こういう墓前で行なわれる祭祀のうち、木を切ること、亜麻布を裂くこと、神酒（みき）を注ぐことなどについては触れずにおきましょう。秘儀にからんだことが多いからです。* 祭司たちの申すところによりますと、オシリスばかりでなく、ほかの神々、つまり生まれるわけでもなく死ぬわけでもない神々の遺体も、死後に彼らの手で葬られているとのことです。* ただし霊魂は星となって空に輝いているといいます。* 例えばイシスの星はギリシア人が犬（セイリオス）（シリウス）、エジプト人がソティスとよんでいる星だし、ホロスの星はオリオンで、テュポンの星は熊だというのです。動物でも、もし尊ばれている動物な D らば、エジプト人は決められた埋葬の儀を執り行ないます。ただテバイの住民だけは例外で、死ぬ神などというものがあるはずがないと考え、彼らがクネプと呼んでいる、生まれもしなけ

れば死にもしない神*だけを信じるのです。

神は王や君主ではないこと

二二　このようなことがあっちでもこっちでも言い伝えられたり、これがそうだと見せられたりするものですから、これはみな王や君主の事蹟なのだと考える人々がいます。* 際立った資質や勢力ゆえに赫々たる成果を挙げたのが、神だという名声によっていっそう輝かしくされた、しかしやがては運命に従わねばならなかったが、その事蹟と経験はいつまでも驚くべき偉大なものとして記憶される、というように。ですが、このように説明する人々は、正しい説明をすり抜けて、具合の悪いことは神から人間に移しかえています。そういう例なら言い伝えからいくらでも助けが得られますね。現にエジプト人は、ヘルメスの体は腕が短かったと言っておりますし、テュポンは赤ら顔でホロスは色白、オシリスは黒かったなどと申しております。まるでこれらの神が本性人間だったかのごとくにです。それだけではありません。エジプト人はオシリスを将軍と呼び、*カノボスを舵取り、船長と呼んでいて、天の星にもこのカノボス（カノプス）という名がついている、そしてその船の方は、ギリシア人がアルゴ船と呼んでいるもので、これはオシリスの船の似像であり、*オリオンと犬星（シリウス）からさして遠くない空を航行しているのだと言っております。そして、オリオンはホロス

の、犬はイシスの聖なる星だとエジプト人は信じているのです。二三　しかしながらこれは、「動かすべからざるものを動かす*」ことではないかと恐れますし、シモニデスの言う（断片一九三）「古りにし時の間(ま)に挑む」ばかりでなく、多くの人間の種族、神々への敬虔な気持をしっ F かりと抱いている民族に対する挑戦ではないかと思います。これでは、人類誕生のはじめから、ほとんどすべての人々の胸に抱かれてきた、かくも古き尊き御名を天上から地上に引きずり下ろし、それへの尊崇の念、敬虔な気持を失わせ、または打ち壊すことになりましょうし、神を人間の平面に引き下げることによって、レオン（前四世紀）のような著述家*のために広々と

エウヘメロス

道を空けてやり、メッセネのエウヘメロス（ヤコビ『ギリシア歴史家断片集』六三T四 360A e）の徒のいかさまに、自由な発言を許すことにより、光輝を添えることになりましょう。このエウヘメロスこそ、自分の手で、およそ信ずるに足らぬ、ありもしない神話を作り上げてから、全世界に無神論をまき散らした人です。人々が信じてきたあらゆる神々をひとしなみに、昔活躍してパンコンの金の銘文*中に名を連ねている、将軍だの提督だの王だのの名に帰して、帳簿から削除したのであります。異邦人、ギリシア人を問わず、そんな所へ行ってそんな銘文を見た者は一人としてなく、ただエウヘメロスのみが船旅をして、およそ世に存在 B

しないパンコン人だのトリピュロイ人*だのの国へ行ったらしいのです。そうは言っても、たしかにアッシュリアではセミラミスの偉業が賛嘆され、エジプトではセソストリス*の大業が称賛されております。またプリュギア人は今なお、昔彼らの王であったマネス、人によってはマスネスと呼んでいる人物が、*善良にして強力であったからとて、輝かしく驚嘆に値する功業を「マネス的」と呼びならわしています。キュロスはペルシア人を、アレクサンドロスはマケドニア人を、ほとんど地の果てまで征服して率いて行きました。が、彼らの呼び名はあくまでも英傑の王でありました。プラトンも申すように（『法律』七一六A）、「もし尊大の心たかぶり、傲C慢の気風を伴って愚かしい若気に燃え立ち」、神様扱いされてもそれを咎めず、お社まで建ててもらってそのまま頂戴するようでは、その栄光の輝きも一時のもの、やがては不敬に陥り不法を犯して、空虚・倨傲のそしりを免れず（エンペドクレス断片二、四）、

「はかなくも煙のごとく、立ちのぼって空に消えぬ」、

ということに相成りましょう。ところがこういう連中でも、年月を経れば、保護を求める権利を与えられない逃亡奴隷も同然に、神殿・祭壇を剝ぎ取られ、残るは記念碑と墓だけに、結局はなってしまいます。だからこそ、ヘルモドトスなる者が詩を書いて（ベルク『ギリシア叙情詩

集』三、六三七）アレクサンドロス大王麾下の将軍アンティゴノスのことを、「太陽の子にして神」と歌い上げたのに対してアンティゴノスが、「それは違う、俺の尿瓶の番をする奴隷は、俺がそんな者とは思っていないぞ」、と言ったのです。彫刻家のリュシッポスが画家のアペレ D スを非難したのも正しいでしょう。アペレスの描いた絵では、アレクサンドロスは手に雷電を持っていたのです。リュシッポス自身の彫像では、その手に槍を持っていました。その槍にこそ、時もなおアレクサンドロスから奪うことのできぬ、本当の、彼自身の名声が存していたのです。

ダイモン（半神）

二五　こういう次第ですから、テュポンやオシリスやイシスの話は、神々の受難でも人間の経験でもなく、鬼神とか半神とか呼ばれるダイモンのそれだと考える方がよいのです。* プラトン（『饗宴』二〇二E）、ピュタゴラス（ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』八、三二）、クセノクラテス（断片二四）、クリュシッポス（『古ストア派断片集』二、一一〇三）などという人たちは、神々についての昔の著述家の考えに従いつつ、この鬼神・半神というのは人間より強いものであり、その力はわれわれ人間の本性をはるかに越えたものである、と言っております。鬼神は神の本性を混じりけなく純粋にもっているわけでは E

ない、魂の本性と肉体の感覚を一身に併せもっていて、この感覚は快・不快、その他およそ変化に内在するすべての経験（人によってこの経験のために混乱する度合いに強弱の差があるが）を感じとる。混乱の度合い云々というのは、鬼神にも人間同様、美徳と悪徳の個人差があるということです。ギリシア人が歌うギガンテス（巨神族）やティタネス（タイタンたち）の所業、例えばクロノスのいささか無法な振舞いや、*アポロンに対する大蛇ピュトンの抵抗、*ディオニュソスの悪意*や女神デメテルの世界放浪*などの話は、オシリスやテュポンの話、その他何のわだかまりもなく語られているのを誰でも聞くことができる物語と、何ら違う点はありません。このことは、秘儀の陰にかくされていて、入信者たち以外には洩らしてはならぬこととて固く守られ、一般の人間にとっては見ることも禁じられている、そういう秘儀のからんだ物語についても、同じだと言えます。二六　ホメロスの詩を聞いてごらんなさい。すぐれた人間のことを彼は、「神のごとき」とか「神にも等しき」とか「神より知慧を授かりし」とかいう形容詞で称えますが、半神（ダイモン）から派生した呼びかけ、あるいは形容詞は、善悪いずれの人間にもひとしく用いているでしょう。例えばアイアスがヘクトルに（『イリアス』一三、八一〇）、「何とダイモンに似たるかな。*いかなればとて、汝わがアルゴス勢をば

361 A　F

脅さんずるや。」

また（『イリアス』五、四三八、一六、七〇五、二〇、四四七）、

「ダイモンのごとく四たび討ちかかれば、」

また、ゼウスが妃ヘレに（『イリアス』四、三一）、

「妃よ、何とダイモンに似たるぞ。プリアモスならびにプリアモスの子らが、何ゆえに汝にかほどの悪しき振舞いをなしたるぞや。かく烈しくいきり立ち、イリオスの堅固に築かれたる市を撃ち滅ぼさんとはやるとは。」

善きダイモンと悪しきダイモン

こういうのはすべて、半神（ダイモン）が、神と人間の要素が混じりあっているために、つねに同一ではあり得ないところから来ることです。そこでプラトンは（『法律』七一七AB）、オリュンポスの神々に右側と奇数を割り当て、これとは反対側をダイモンに与えております。[*] クセノクラテスもまた（断片二五）、不吉な日とか、人を打つ、泣B く、断食する、品の悪いことを言う、悪口を言う、そういうことをするのが習わしになっている祭とかは、神々や善き半神に捧げるにはふさわしからぬものだが、われわれの周囲には、大きく強いもので、接するのがむずかしく、たえず不機嫌で、今挙げたようなことに喜びを感ず

る、そういう本性のものがある、そしてそういうものは、いったん泣いたり悪口を言ったり、そういうことが思いどおりにできてしまうと、それ以上悪くはならないのだ、と申しております。すぐれた半神、善き半神のことはヘシオドス（『仕事と日』一二三以下）も触れていまして、彼はこれを「聖なるダイモン」「人間の守護者」「人間に富を授ける者」「この、王の権力にも比すべき力を持つ者」などと呼んでいます。プラトンは（『饗宴』二〇二E）ダイモンのこのような性質をとらえて、ダイモンは神々と人間の中間にあって両者の役に立つ、神々には人間のことどもの、人間には神々のことどもの説明役で、かなたにあっては人間の祈りや願いの筋を伝え、こなたに来ては予言、神々からの賜りものをもたらす、と申しております。またエンペドクレスも、ダイモンらは、おのれの犯した過ちゆえに罰を受けることもあると言い（断片B一一五、九以下）、

「上空の力は彼らを海へと追いたて、
神は大地へと吐き出し、大地は、疲れを知らぬ
太陽の光の中へ送り、太陽はアイテルの渦の中へ投げ返し、
かくて送っては受け、受けては送りつつ、みな彼を憎む。」

C

こうして罰せられ浄化されて、彼らはふたたび本来与えられていた場所と位置を取り戻すのだというのです。二七　このようなダイモン、半神について言えることは、 D
そっくりそのままテュポンにも当てはまると言われております。* 憎しみと

悪しきダイモンとしてのテュポン

悪意ゆえに恐るべき所業に及んだとか、ありとあらゆるものを混乱に陥れて、全世界の大地と海を禍いで満たしたとか、そして罰せられたとか、というようにです。しかしオシリスの妹にして妻なるイシスが彼を助けます。彼の狂おしい怒りを鎮めて消したのですが、一方彼女は、自分が耐えてきた数々の艱難や争いを放念したりはしません。それに彼女の放浪、知慧によって行なった数々の功、また勇武の誉れ、そういうものを忘却の中に埋めて沈黙するなどということもしません。むしろその時々に自分が嘗めて

善きダイモンとしてのイシスとオシリス

きたことを、像にしたり、深い意味の言葉にしたり、身振りによる物真似にしたりして、きわめて神々しい祭儀の中に取り込み、* こうしてイシスは、人々に敬虔であることの大事さを教 E
え、かつ同時に、同じ難儀を味わいつつある男女を励まし、この教えと励ましを畏れ多くも尊いものにしたのです。彼女とオシリスは、その高い徳により、善きダイモンから神へと転身し、その点で後のヘラクレスやディオニュソスと似ていますが、* こういう次第で彼らは、ダイ

モン、そして同時に神として、何の不都合もなく融合して崇められております。その力は至るところに及んでおりますが、わけても勢力を誇っているのは地上、それから地下の世界です。エウボイア出身の著述家アルケマコス(前三世紀)が言っておりますように(断片七M)、サラピス*とはプルトンにほかならず、イシスはペルセパッサだと言われているのです。* さらに、ポントスのヘラクレイデス*(断片一〇三V)は、カノボスにある神託所はプルトンの神託だと考えております。

F

プルトンとサラピス

二八　プトレマイオス・ソテル(プトレマイオス一世)は夢の中でプルトンの像を見ました。* 彼はそれまで本物を一度も拝んだことがなかったので、それがどんな像であるのかは知りませんでした。しかしとにかくそのプルトンの像が彼に、一刻も早くアレクサンドレイアへ連れて行けと命じたのです。ところが彼はその像がどこに建てられているかも知らず、困り果てて友人たちに夢の話をしますと、ソシビオスという名の、いろいろな所に旅したことのある人物が見つかって、彼の言うことに、プトレマイオス王が見たと信じているような像を、彼は黒海南岸のシノペで見たというのです。そこでプトレマイオスは、ソテレス、ディオニュシオスの両名を派遣しましたが、二人は多くの日数を費やし、またさんざん苦労を

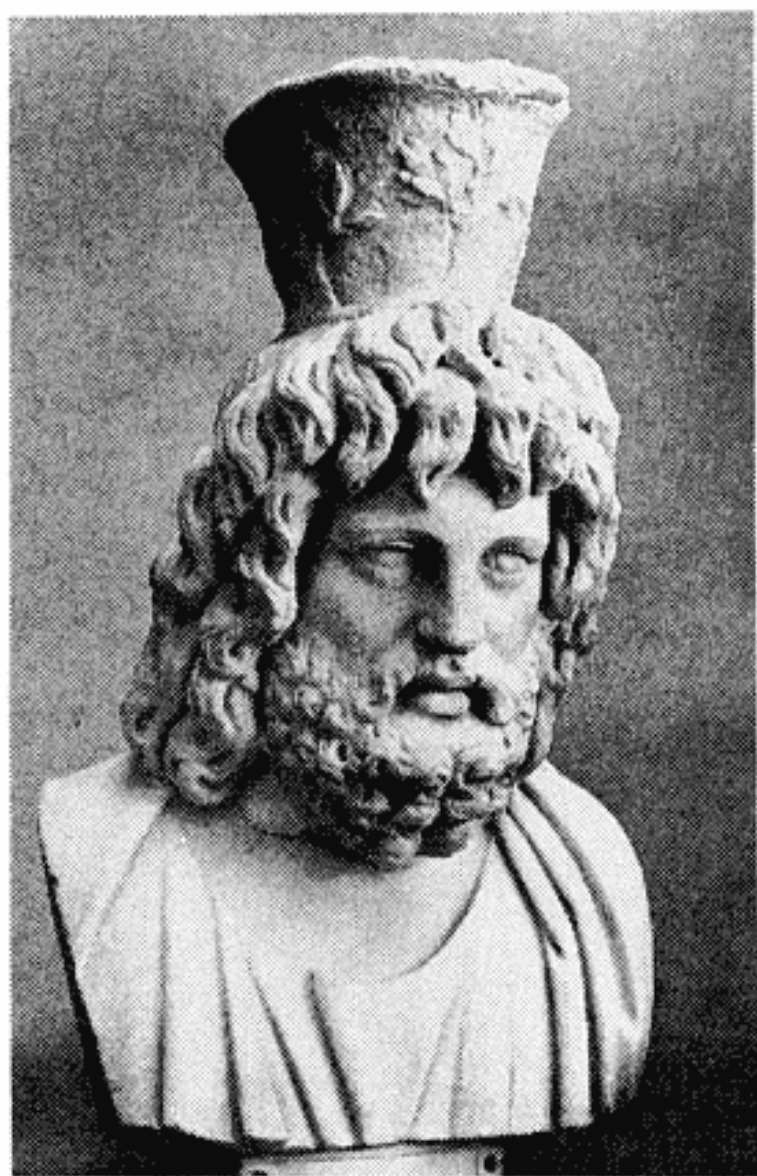
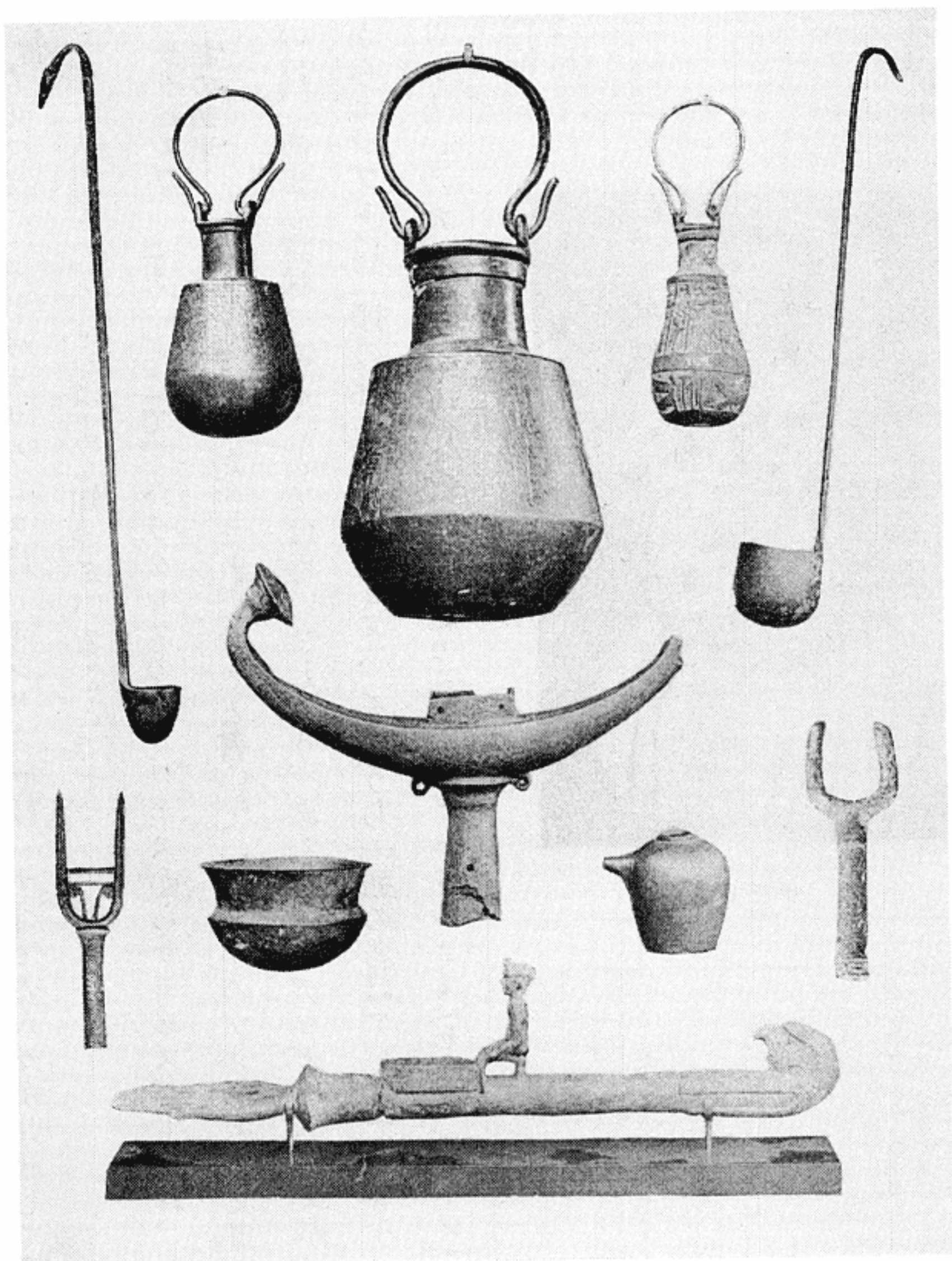
重ねた末（それに神のお導きもないわけではありませんでした）、像を盗んで運び去りました。そして運ばれてきたのを検分した結果、神託や前兆の解釈者であるティモテオスと、ナイル河口セベンニュトスのマネト、*および彼らの一統の者たちが（マネト断片七八M）、これはプルトンの像だと断定しました。その根拠となったのは、番犬ケルベロスと蛇を伴っていることでした。そして王はこの二人の説明から、これはサラピス以外の何者でもないと確信したのでした。無論この像がシノペから運ばれてきた時は、サラピスという名をもっていたわけではありません。アレクサンドレイアに着いてはじめて、この名を与えられたのです。しかし肝心なのは、サラピスとはプルトンのエジプト名だということです。*事実、有名な自然学者のヘラクレイトス（前六―五世紀）が「ハデスとディオニュソスは同一の神だ。いずれの神を称えるにも、信者は狂い立つ」、と言っている（断片B一五）のを聞きますと、こういう見解に到達するでしょう。肉体のことをハデスと呼ぶ、なぜなら、魂は肉体の中で言わば酔いつぶれて、魂であることをやめてしまうから、と言う人がいますが、あれは無理をしてこじつけのアレゴリーを述べているると言ってよいでしょう。それよりは、オシリスをディオニュソスと、そしてサラピスをオシリスと同一視するという方がよい（オシリスは死んでその本性を変えた時にこの呼び名を

362 A

B

得たのです）。それゆえサラピスは、オシリス同様、すべての人々が共通して拝する、これは秘儀に入信した人ならばよく知っていることです。

サラピスの名の由来

二九　ここで、ヘラクレスの娘カロポスからサラピスが生まれ、息子アイアコスからテュポンが生まれたなどと書いている、かのプリュギア文書*に注意を向けるのは、あまり意味のあることではないでしょう。あるいは、ディオニュソスがはじめてインドからエジプトに二頭の牡牛を曳いてきた、そのうち一頭の名はアピスで、もう一頭の名はオシリスといった、と書いている（前三世紀の）歴史家ピュラルコス（ヤコビ『ギリシア歴史家断片集』

サラピス

オシリス秘儀用具

アピス

八一、断片七八)も、ためらわずに軽んずべきです。サラピスという名前はギリシア語の sairein (「掃く」)という動詞からできたもので、ある人々は、この動詞の意味は「美しくする」「飾る」ということだと言っております。したがってピュラルコスの説明は見当はずれですが、* もっと見当はずれな説もあります。サラピスは神ではなく、アピスの棺 (soros Apidos) なのだというのです。何でも、メンピスに二つの青銅の門があって、それぞれレテ(「忘却」)の門、コキュトス(「悲嘆」)の門というのだそうです。* そして、アピスを葬る時にこの門が開かれるのですが、その時この門は重くてなかなか開かず、軋(きし)んで音をたてるそうです。だからわれわれは、青銅で造ってあって音をたてるものには手をのせるのだとい

C

うのです。まだしもまともなのは、サラピスという名前を「走る」という動詞 seuesthai あるいは sousthai から引き出し、* 万物がいっせいに運動することだととる人々の考えです。大方の祭司たちは、オシリスとアピスは一つにからみ合っていると言って、次のように説明し教えています。すなわち、アピスというのは、オシリスの魂が目に見える姿になって現われたものだと考えるべきだというのです。* 私としては、もしサラピスという名がエジプト語であるなら D ば、それは「喜び」という意味を表わしているはずだと思います。その論拠は、エジプト人は「喜び」の祭礼のことをサイレイ (Sairei) と呼んでいるということです。* プラトン(『クラテュロス』四〇四B以下)によりますと、ハデス (Haides) というのは、彼を知ってねんごろになった者たちから、「知っている」(eidemon)、「好意的な」(prosenes) 神と名づけられた結果だというのですから。* エジプトには、名前が大事な意味を持っている例がまだほかにもたくさんあります。例えば、死後人間の魂が行くと彼らが信じている地下の国は、アメンテスと呼ばれますが、アメンテスというのは「取りかつ与える者」という意味です。* これもまた、昔ギリシアから出た語で、それがギリシアに逆輸入されたという例の一つなのかどうかは、あとで検討することにし E ましょう(三七五E以下)。今はまだ手もとに残っている問題を扱いおおせることにいたしま

す。

再び善きダイモンとしてのオシリスとイシス、悪しきダイモンとしてのテュポン

三〇　こうしてオシリスとイシスは善きダイモンから神に転身しました。一方テュポンの力は萎え、粉砕されたとは申せ、今なお最後の活力をふりしぼって、あるいはあえぎあるいはもがいていますので、人々は時には犠牲を供えて宥めたり鎮めたりしますし、時には祭の時に赤ら顔の者を冷やかしたり、崖から驢馬を投げ落としたりして、彼に肩身の狭い思いをさせたり嘲弄したりします。テュポンが赤ら顔で、肌の色が驢馬に似ていたからです。ブシリスとリュコポリスの人々は決してらっぱを鳴らしません。それは、らっぱの音が驢馬の声に似ているからなのです。また彼らは、驢馬は清潔な動物ではなく、鬼神に憑かれた動物だと信じていますが、それは驢馬がテュポンに似ているためです。彼らがパユニの月とパオピの月に行なう犠牲式のために饅頭を作る時、その饅頭に縛られた驢馬の型押しをしてテュポンを辱めます。太陽神ヘリオスに捧げる犠牲式の日には、この神様を拝む者は金を身に着けるな、驢馬に餌を与えるなと命じられます。* ピュタゴラス派の哲学者たちも、テュポンには鬼神的な力があると信じているように思えます。と申しますのは、彼らはテュポンが五六の約数で偶数の日に生まれた、* と言っている

からです。ピュタゴラス派の人々はまた、三角形の本質はハデス、ディオニュソス、アレスのものであり、四角形はレア、アプロディテ、デメテル、ヘスティア、ヘラのものであり、一二角形はゼウスに属するなどと言っておりますが、エウドクソス（断片二九三）によりますと、五六角形はテュポンに属するのだそうです。*

テュポンと驢馬

三一　エジプト人はテュポンの肌色は赤いと信じて、赤い牛を犠牲に供えます。そしてこの赤牛選びはたいへん厳しく行なわれますので、一本でも黒い毛や白い毛があると、その牛は犠牲としては不合格とされます。* B これというのも、エジプト人にあっては、犠牲として供えるものは神にとって好ましいものなのではなく、まさにその反対で、犠牲になるというのは、神をないがしろにした、あるいは不正を為した人間がほかの肉体をもった動物へと変身する、そういう人間の魂に降りかかる運命なのです。* ですから、犠牲獣の頭に呪いの言葉を浴びせて首をはねると、昔はその頭を川にほうり込んだものでした。今では外国人に売っております。* 犠牲に供されるべき牛には、「封印官」と呼ばれる祭司が封印を押します。その封印には、カストル（前一世紀）が言っているところによれば（ヤコビ『ギリシア歴史家断片集』二五〇、断片一七）膝立ちをして座らされ、両手を後ろ手に縛られて、喉を剣で刺されている男の絵が彫られていました。先ほど申し上げましたよう

に(三六二F)、驢馬はテュポンに似ているという幸せに恵まれているわけですが、それは肌の色ばかりでなく、それに劣らず、愚かである、傲慢である、という性質によってもおります。そこで、エジプト人がペルシア王の中でも呪われ者、穢らわしい者としてとくに憎んでいたオコス*に、彼らは驢馬というあだ名をつけて呼びました。しかしそう呼ばれたオコスの方では、デイノン(前四—三世紀)の記しているところによりますと(ヤコビ『ギリシア歴史家断片集』六九〇、断片二一)、「さりながらこの驢馬、汝らの牛を食ろうて楽しむべし」と答えて、アピスを犠牲に供した由。テュポンが驢馬にまたがって、ホロスとの戦いから命からがら七日七晩逃亡をつづけた後、ヒエロソリュモス、ユダイオスという二人の子をもうけた、という話を伝えている人がおりますが、これは、この子供たちの名前から分かるように、話の中にユダヤの伝承Dを引き込んだものです*。

アレゴリーによる神の説明

三二　これまで述べてきましたさまざまなことから、以上のようなもろもろの仮説が唱えられたのでした。次に、まずはじめに、これまでとは違う立場に立って、もっと哲学的なことを述べているのだと信じられている人々がいますので、その中でも最も単純明快なものを考察してみましょう。これはどういう人たちかと申しますと、ちょうど

ギリシア人の中に、クロノス(Kronos)とは「時」(Chronos)のアレゴリーであるとか、ヘラ(Hera)は「空気」(Aëra)であるとか、ヘパイストスの誕生とは、空気が火に変ずることのアレゴリーであるとか言う人がいるように、*エジプト人の中にも、オシリスとはナイル河であり、大地であるイシスと結ばれるのであるとか、テュポンは海で、その海へとナイル河が注いで、散って見えなくなる、ただ、大地が受け入れて、吸い込んで、そのために肥沃になる、そういう水だけは別だ、と言う人がいるのです。ナイルのために嘆きの儀式が行なわれますが、この儀式が嘆くのは、左で生まれて右で死ぬもののことです。左とか右とか申しましたが、エジプト人は E 東が世界の顔で、北の方角が右、南が左と考えているのです。*そこで、ナイル河は南から流れてきて、北で海に呑み込まれるわけですから、その誕生は左で、死は右、というのはもっともなのです。ですから祭司たちは、自分が海の穢(けが)れに染(し)まぬようにし、塩のことを「テュポンの吹いた泡」だと申します。そして祭司たちに禁じられていることの一つに、「食卓に塩を置くべからず」というのがあったのです。*また彼らは、船乗りには声をかけません。船乗りは海を利用し、海で生計を立てているからです。そして同じことが、彼らが魚を食さない小さからぬ F 理由になっていて、「憎む」という意味を表わすのに魚の絵を描きます。*とにかくこんな風で

すから、サイスの町のアテナ（＝イシス）神殿の入口に浮彫りがあって、そこには子供、老人、その背後に鷹、さらにその後ろに魚、しかしいちばんしんがりに河馬（かば）が描かれております。これが象徴的に明らかにしているのはこういうことなのです。すなわち、「おお、生まれ出ずる者よ、世を去り行く者よ、神は厚顔無恥を憎みたもう。」子供は誕生の象徴であり、老人は死の象徴です。そして鷹は神を表わし、魚は、先ほど申しましたように、海に住んでいるゆえに憎しみです。河馬は恥知らずを表わします。というのは、河馬は父親を殺して母親を犯すと伝えられているからです。* ピュタゴラス派の人々が言う「海はクロノスの涙である」という文句も、海が清浄でないこと、また本性われわれとは同族のものではないことを、謎めいた言葉で表明したものと思えましょう。

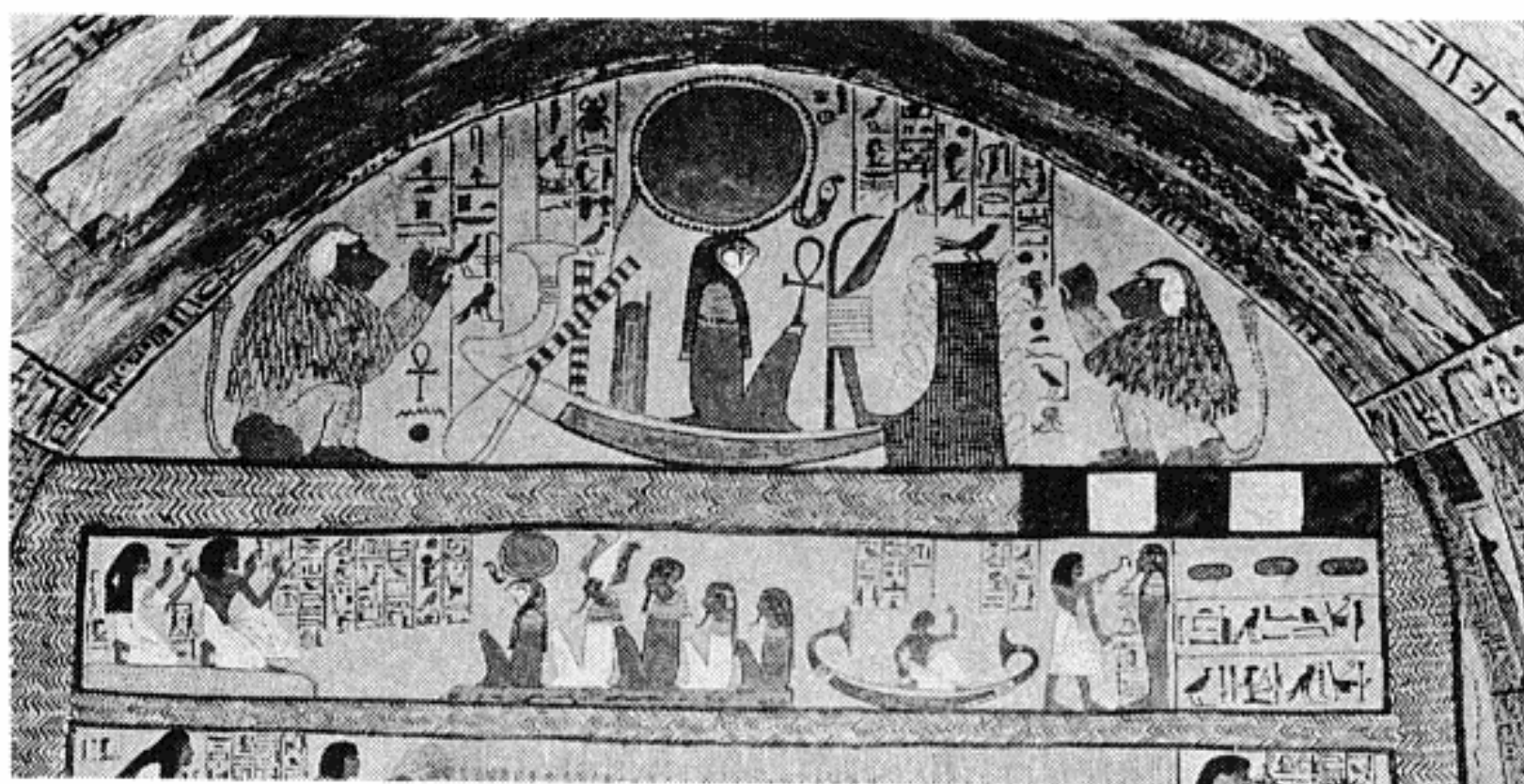
神の自然学的説明　このようなことは誰でもよく知っていることですので、ついでながら述べておいた、ということにしておきましょう。三三　祭司たちのうちでもいっそう哲学的な人は、ナイル河をオシリスと呼び海をテュポンと呼ぶにとどまらず、さらに進んで、オシリスは一切の水、湿り気の源であり、万物の発生の原因、種子の本質である、一方テュポンは、およそ湿り気のないもの、灼熱のもの、乾燥しきったもの、したがって水分には敵対するものだ

364 A

と考えます。* だからこそテュポンは肌が赤くしかもつやがなかったろうと信じて、そう見える B
人に出会うのを喜ばないし、そういう人と進んで交際もしないのです。今度はオシリスです
が、肌は黒かったと彼らは物語の中で述べることになります。なぜなら水が混ざると、土でも
衣類でも空の雲でも、何でも黒くなる、若い人たちには湿り気があるから髪が黒くなる、それ
に対して髪が白くなるというのは、言わば色を失うことで、盛りを過ぎた人々が乾いてくる結
果生じることだ、ということになります。また、春は新鮮で旺盛で温和ですが、秋は湿り気が
不足するので、植物には敵となり動物には病の季節となります。さらに、ムネウィスと呼ばれ
て、ヘリオポリスで養われている牛がいますが(これはオシリスの聖獣です。中にはこの牛は C
アピスの父親だと信じている人もいます)、この牛は黒くて、崇められる点ではアピスに次ぐ
ものです。* また彼らは、エジプトという国土をケミアと呼んでおりますが、これはこの国土
が、ちょうど目の中の瞳のように黒いからです。* さらに彼らはこの国土を心臓になぞらえてお
ります。それはエジプトが暖かく湿り気が多く、しかも大半、人の住んでいる所の南(つまり
左)の部分に囲まれ、それに接しているからで、心臓が人間の左に囲まれているのと似ている
というわけです。**三四**　エジプトでは太陽や月が、馬車ではなく、舟に乗

ムネウィス

って空を渡ると言われていまして、これはつまり太陽も月も湿り気から生まれ、育てられているのだということを遠回しに言っているのです。[*] 彼らは、タレスばかりでなくホメロスも、水が万物の始源であるということをエジプト人から学んだのだと信じております(『イリアス』一四、二〇一)。と申しますのは、ホメロスのオケアノスとはオシリスであり、テテュス(Tethys)とは、万物をいっしょに育てて(tithe-noumenen)養う女神であるゆえに、イシスである、[*] というのです。それに、現にギリシア人は「種子(精子)の発射」のことを apousia といい、「性交」のことを synousia というではないか、[*] また「息子」は hyios で、「水」(hydor)や

D

太陽神が舟で渡ってゆく

「雨が降る」(hysai) から派生した語だ、そしてディオニュソスはほかならぬオシリスと同一の神であるがゆえに湿り気 (hygros) の元締で、したがって Hyes と呼ばれる、* などと申します。なるほどヘラニコス (前五世紀) は、祭司たちがオシリスをヒュシリス (Hysiris) と発音しているのを聞いたらしく (ヤコビ『ギリシア歴史家断片集』四、断片一七六)、彼はこの神を一貫してこう呼んでいます。多分それがオシリスの本性に従った呼び名だと彼自身知ったからでしょう。*

オシリスとディオニュソス

三五　クレア様、オシリスがディオニュソスと同じ神だということを、* 誰があなた以上に知っていましょうか。あなたはデルポイでディオニュソスを信じる女性たちを束ねていらっしゃる方ですし、お父上とお母上からオシリスの秘

E

儀も授かっておいでなのですから。* しかし一般の人々のために、これらの神が同じものだという証拠を提供すべきだとするなら、秘儀にかかわるゆえに口にしてはならぬことは、そのままそこに置いておくことにして、アピスを葬る際に祭司たちが人々の目の前でやることをここでは申しましょう。とにかく彼らがアピスの遺体を舟に載せて運ぶ時、あれはバッコスの祭とほとんど違わないのですから。鹿の毛皮をまといます、テュルソスをかざします、* 口々に叫びます。そして激しく体を動かします。ちょうどディオニュソスの祭の恍惚に身を任せた人々のようにです。こんな風ですからディオニュソスの方でも、多くのギリシア人が牛の姿をしたディオニュソス像を描きますし、* エリスの女たちはディオニュソスに祈りつつ、「牛の脚もて、神[F]よ、来りませ」と呼びかけます。またアルゴスには、「牛から生まれたディオニュソス」という名のディオニュソスがおわします。そして水中かららっぱでこの神を呼びますが、「門の守護者」のために、水の深みに仔羊を投げ込みます。* ソクラテス* が『神の奉仕者について』の中で申しておりますように(断片五M)、彼らはこのらっぱをテュルソスの中にかくしておくのです。まだあります。ギリシアのティタネスの伝説や夜祭の行事は、オシリスの切断、よみがえり、生まれ変わりの話と一致しております。* これらの神の墓についても同じです。というの

は、先ほども申しましたように(三五八A、三五九A)デルポイの人々は、ディオニュソスの遺体のなにくれが、デルポイの神託所の傍らに安置されている、そして、ディオニュソスの信女たちがリクニテス、字義通りには「箕(み)の神」、すなわち幼いディオニュソスを目覚めさせると、「神の奉仕者(ホシオイ)」と呼ばれる神職たちが、アポロン神殿内で非公開の、つまり秘儀としての犠牲式を執り行なう、*と信じているのです。ディオニュソスはぶどう酒の神であるばかりでなく、あらゆる水に関わるものの司(つかさ)であり、創造者でもあるとギリシア人が信じていることは、ピンダロスが次のように言っている(断片一五三)ことで十分に証明されます、「喜びに満てるディオニュソス、秋の日の輝き、木の族(うから)を、繁らせたまえ。」こういうわけで、オシリスを崇める人々も、養い育てられている木を切ったり、泉の水をせきとめることを禁じられているのです。

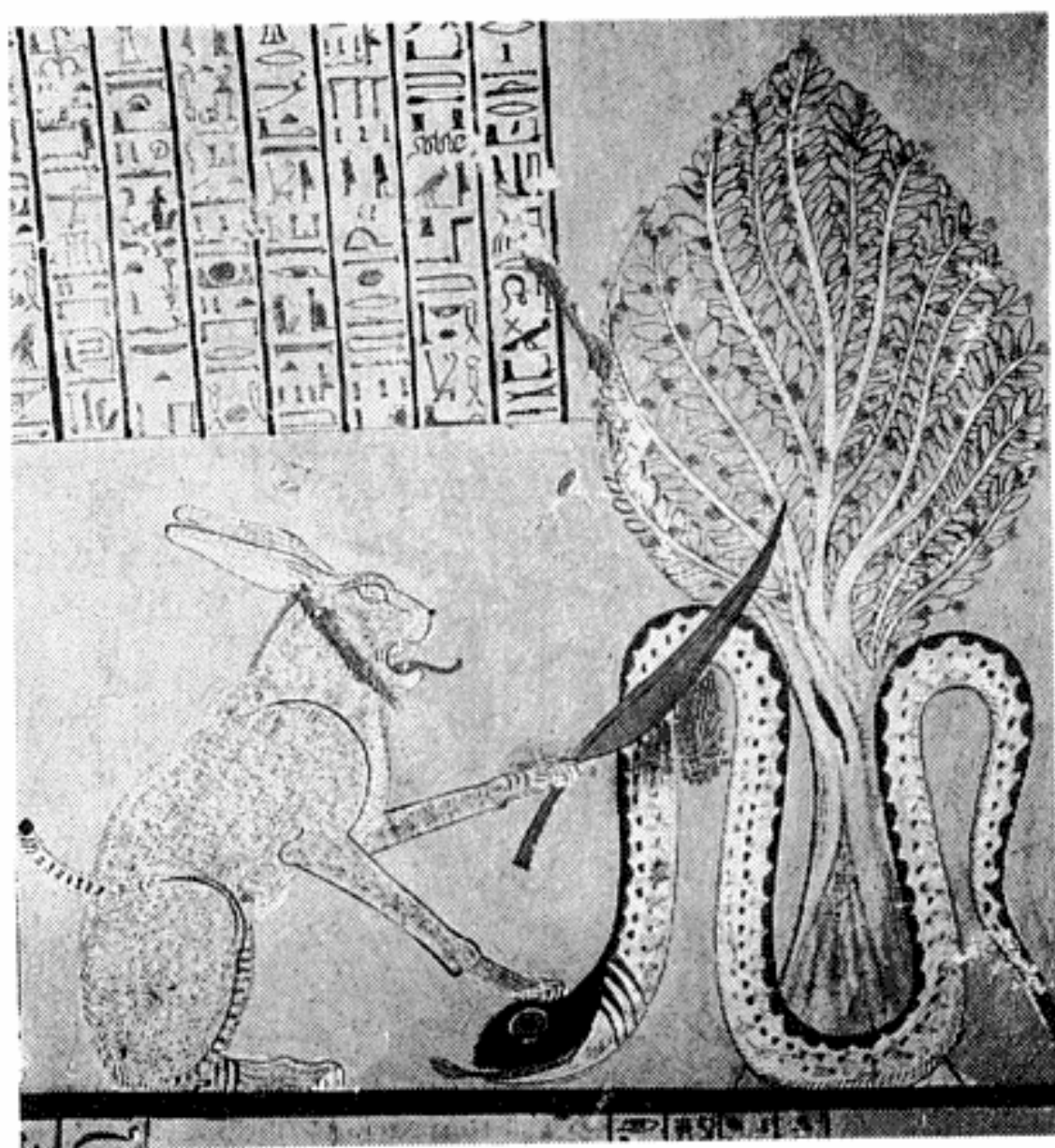
365A

オシリスと水、生命の源としての水

三六　エジプト人はナイル河だけでなく、およそ水に関わるものをオシリスと呼び、この神を祀る祭礼の行列では、つねに水瓶が先頭を行きます。

B

彼らは王と世界の南部地域を表わすのに藺草(いぐさ)の記号を使いますが、藺草は万物が「飲み込むこと」万物を「多産にすること」を表わす、その文字の形も生殖器に似ている、と解されている

のです。* 先に申しましたように（三五五Ｅ）、パミュリアというのは男根崇拝の祭ですが、これに参列する人々は、三個の男根を組み合わせた像を展示してかつぎまわります。万物の始源は神ですが、すべての始源は、それ自身の生殖力によって自分を増殖させていくのです。そしてわれわれには、「数倍」という意味を「三倍」と言い表わす習慣があります。もちろん、古人が本当に三倍という意味で「三倍」と言っているのだという確証がある場合は別ですが、例えば、「何倍も幸せな」と言うべきところを「三倍も幸せな」と言う（ホメロス『オデュッセイア』Ｃ六、一五四）とか、「三倍も縛られた」（同八、三四〇）とは実は数えきれないほど幾重（いくえ）にも縛られたという意味だとかいうことがありますね。話を水に戻しますと、水というのは万物の始源、万物が生まれる元で、自分自身から最初の三元、地と気と火をつくり出しました。元の話に付け加えられた話では、テュポンがオシリスの性器を河の中へ投げ込み、イシスもそれを見つけることができなかったということになっていますが、しかし、彼女は生き写しの似像を作って、これを崇め、これを奉じて行列を行なえと命じました（第一八節参照）。結局これは、オシリスの生殖力、種子の力は、その素材として湿り気をもっており、この湿り気の力により、本来生成にあずかっている器官を動かしてはたらくのだ、ということを教えているわけです。エジプ

「大猫」に退治されるアポピス

トにはもう一つオシリスの話がありまして、太陽神ヘリオスの兄弟でアポピスというのがゼウスと戦った、ゼウスはオシリスを味方にし、彼と協力して敵を討ち、そして彼オシリスを息子と定めて、ディオニュソスと名づけた、というのです。* この物語のお話の要素が、オシリスの本質についての真実に触れていることはお分かりでしょう。と申しますのは、エジプト人は風のことをゼウスと呼んでおりますが、* 乾いたもの、火のようなものというのは、風に敵対するものでしょう。それは太陽ではありませんが、太陽と同族の何かでしょう。これに対して、湿り気は過度の乾燥を治め、蒸気が立ちのぼるのを盛んにし、

D

よってもって風が育てられ、勢いが強くなるわけです。

E

オシリスときづた

三七　さらにまた、ギリシアではきづたはディオニュソスの聖樹とされ、エジプト人はこの木のことをケノシリスと呼んでいるが、この語の意味は「オシリスの植物」ということだ、と言われております。*ところがさらにアリストンという、『アテナイ人の植民』という本を書いた人がおりますが（前一世紀）、この人がアレクサルコスの手紙というのを見たことがあるそうで、*そこに、エジプト人のディオニュソスはゼウスとイシスの子だが、オシリスではなくアルサペスというのだと書いてあったといいます。アルサペスとは「男らしさ」を意味する名前です。*同じことをヘルマイオス（後一世紀？）も『エジプト人』の第一巻で述べております。彼は、オシリスという名前の意味は「強い」ということだと解釈できる、と言っているのです。*このほかにも、ディオニュソスとオシリスとサラピスをエパポス*に関係づ

F

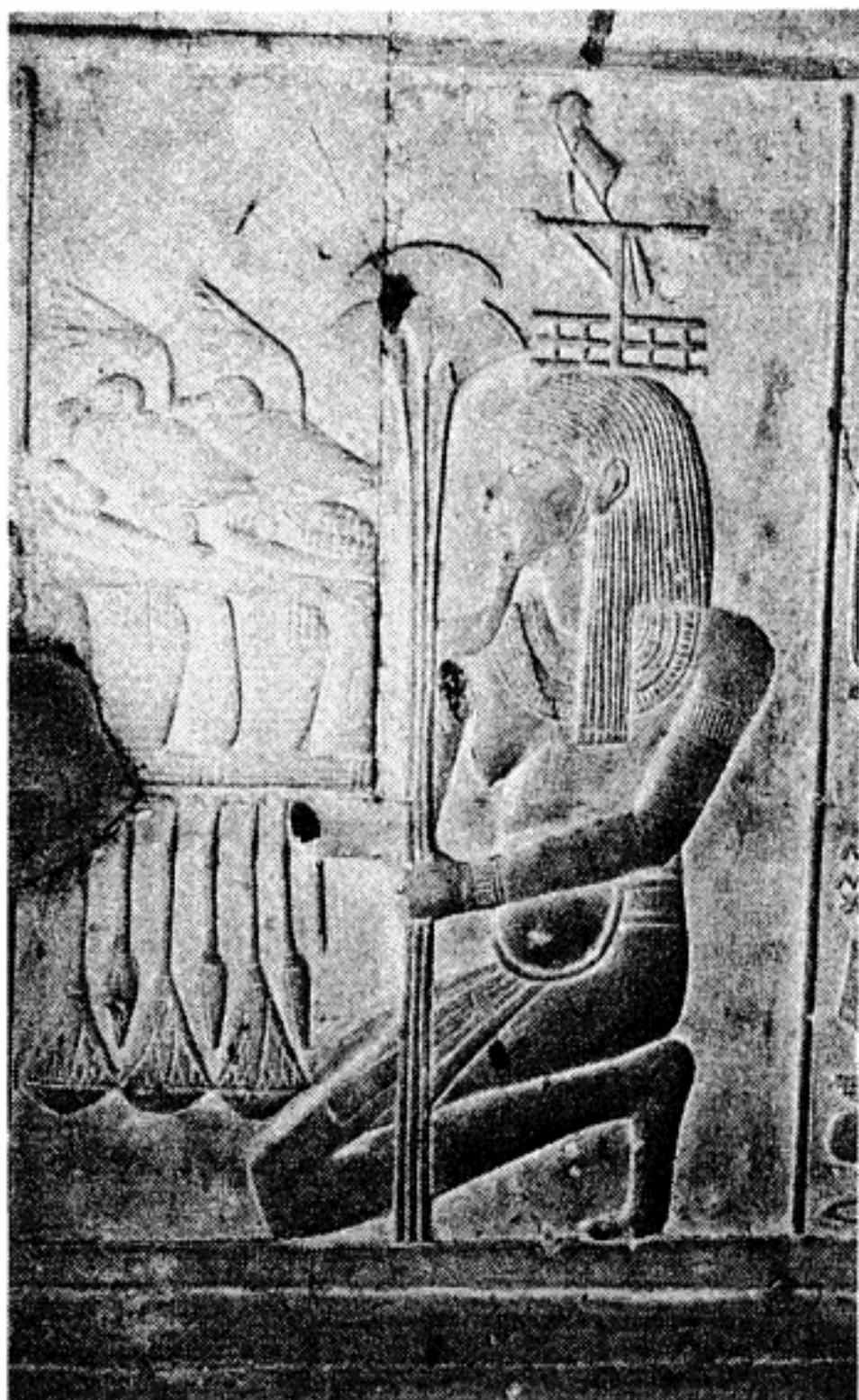
けたムナセアス（前二世紀）とか、イシスはプロメテウスの娘でディオニュソスと結婚した、と言っているアンティクレイデス（前三世紀）などという人がいますが、割愛いたしましょう。*オシリスと他の神との関係については、実際に祭礼や犠牲式を自分の目で見た人々の証言の方が、ずっと強力でしょうから。

オシリスと星

三八　星との関わりでは、犬星（シリウス）はイシスの星だとエジプト人は考えます。この星が水をもたらす、つまり洪水を起こすからです。また獅子座を崇めます。そして神殿の入口の扉を、口をかっと開いた獅子で飾ります。ちょうど 366A

「太陽が初めて獅子座に接する時、」（アラトス『パイノメナ』一五一）

オシリスとナイルの氾濫

ナイルが氾濫するからです。* そして、ちょうどこのナイルの氾濫をオシリスがあふれたものととるように、彼らはイシスを大地、ただし大地全体ではなく、ナイルの水がかぶさって交わり、そして種子を与える限りの大地、と見なします。そしてこの交わりから生まれるのがホロスです。ホロス（Horos）とは、すべてのものを保存し養育する「時」（hora）であり、周囲の空気をほどよく調整するはたらきです。* そして伝えられるところでは、彼はブトの近くの沼地でレトに育てられたということです。大量の水を含んだ土はとくに、乾燥を和らげ治める、そして立ちのぼる蒸気が旱魃を治める、というわけです。地の果て B や山の縁、大地が海に接する所を彼らはネプテュスと呼びます。ですからこのネプテュスのことをテレウテ（「果て」）ともいい、彼女はテュポンの妻だと彼らは申します。* ナイル河が増水して氾濫し、ずっと果ての方に住んでいる人々の所へ近づくと植物がぐんぐん生長してくる様を

見て人々は、オシリスがネプテュスと交わった、と申します。その植物の一つにメリロトンがあって(三五六E参照)、物語の中では、これが落ちてその場に遺されていたので、テュポンは妻ネプテュスが寝とられたと感づいた、ということになっています。ですからホロスはイシスから嫡子として生まれましたが、アヌビスはネプテュスから庶子として生まれたわけです。* しかし王の系譜の中では、ネプテュスはテュポンとの結婚の当初は子がなかったということになっています。* もしこの記述が、妻としてのではなく、女神としての彼女のことを述べているのだとしたら、大地に生産力がないために、まったく子なし実りなしであったということを、物語に託して述べていることになります。

ナイルの神ハァピ

テュポンは乾燥

三九　テュポンが反旗をひるがえして支配者

たらんとしたのは、乾燥の力によってでした。ナイル河を生み、かつ増水させる湿り気を征服して雲散霧消させようとしたのです。加担者となったのはエチオピアの女王ですが、これはエチオピアから吹いてくる南風を指しております（三五六B参照）。この風が、北西から吹いて雲をエチオピア方面へと運ぶ季節風を征服して、雨が降ってナイル河を増大させるのを妨げると、テュポンがその熱でナイル河の首根っこを押さえて憔悴させて、腕ずくで逆流させ、その D ためにナイルは今や衰弱して萎縮して、水がごく浅くなり、ただの窪地のようになって海に向かわされます。例の、オシリスを棺の中に閉じ込める話（三五六B以下）は、ナイル河の水を隠して無くしてしまうことを表わしているのにほかなりません。ですからアテュルの月にオシリスが行方知れずになるとエジプト人は言うのです。* この月は季節風がやんで、ナイル河の水かさがまったく下がってしまい、あたりの土地は裸になり、夜が長くなって闇が広がり、光の勢いが衰えて闇に服従してしまう、そういう時なのです。この時祭司たちは、この月の一七日から四日間、いろいろな悲しみの行事を執り行ないますが、わけても金を塗り込めた牛の像をば引き出し、それに黒い麻の外衣をうちかけて、オシリスを失った女神の悲しみに対する嘆きを E 表わします（祭司たちは、牛はイシスと大地の像だと信じているのです）。嘆かれる事柄は四つ

です。第一はナイルの水が少なくなって痩せてきたこと、第二は南風が支配して北風がまったく吹かなくなったこと、第三は昼が夜より短くなったこと、しかしとくに、この季節に葉を失う植物が裸になったと同時に大地も裸になったことです。十九日の夜、人々は海へ行きます。聖器奉持者（三五二B参照）と祭司たちが、金の小箱を納めた聖櫃を奉持いたします。飲み水を持ってきてこの小箱に注ぎます。すると参列者一同が、「オシリスが見つかったぞ」、と歓声をあげます。次いで彼らは、肥えた土を水と高価な香料と香でこねて三日月形にまとめ、それに衣装を着せてお化粧をします。そしてこれは土と水という万物の大もとの素材で作られたのだから神であると、彼らは信じるのです。*

イシスのテュポン征服――降雨とナイルの増水

四〇　イシスがオシリスを取り戻し、またホロスを立ちのぼるもやと霧によって強くし、ホロスもかくて成長しますと、テュポンは力負けするようになりましたが、まだ完全に滅ぼされたわけではありません。というのは、大地を支配する女神は、湿り気に敵対するものを完全には滅ぼさず、乾湿の混合よろしきを保たんと思し召し、縛（ばく）をゆるめて放してしまうのです。*　もし火の要素がかげって失われてしまうようなことになったら、世界は完全なものではなくなるからです。そして、もしこれが本当らしく

367A　　F

ないこともないとするならば、テュポンが昔オシリスの領分を支配していたという言い伝えも理屈に合わないことはないでしょう。昔エジプトは海だったのですから。* その証拠に、石切り場や山では今でも貝殻が見つかりますし、現在あっちにもこっちにもたくさんある泉や井戸の水はどれもみな、塩分を含んでいてまずいでしょう。さながら昔の海の名残がそこに淀んで、それが噴き出してくるかのようです。B

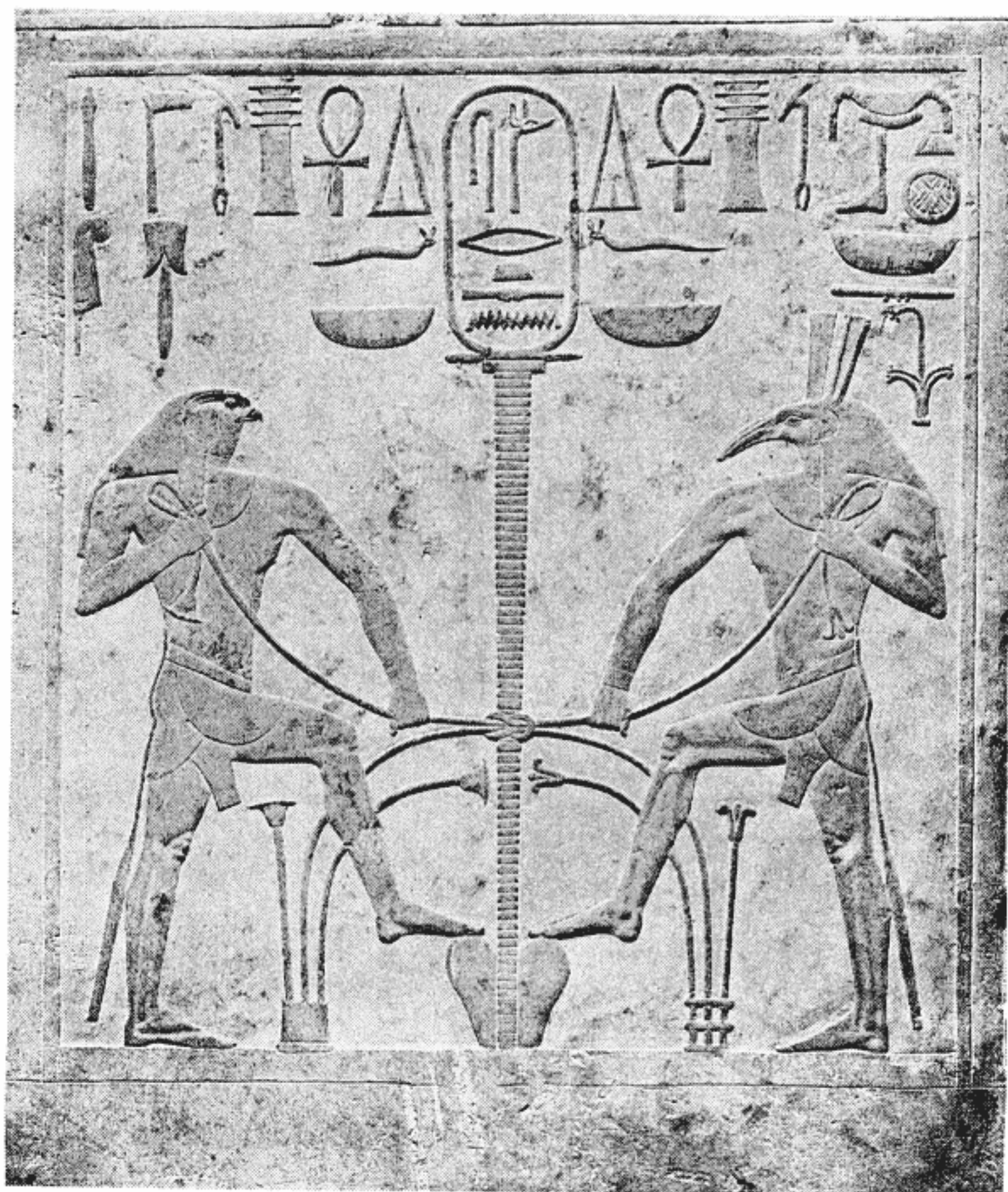
しかしついにホロスはテュポンを征服し、とはつまりちょうどいい時に雨が降って、ナイルは海をば押し出し、かくて海の底に沈んでいた平原を日の下に現わし、それをおのが堆積物で満たしました。このことはわれわれの目で確かめることができます。河が新しい泥を運んできては陸地を先へ押しやって、海岸が少しずつ後退し、海は、海底の深さが堆積土のために高くなっていくので、水がそこから外に流れて行く、その様を見ることができるからです。またパロスという島のこともあります。ホメロスはこの島がエジプトから舟で一日かかるほど隔たっていることを知っておりました(『オデュッセイア』四、三五四)。ところが今では島ではない、エジプトの一部です。島が隆起したのでもなければ近寄ってきたのでもありません。間を隔てていた海が、エジプト本土を造りかえ、そして養うナイル河のために押し出されてしまったのでC

す。

しかしこうしたことは、ストア派の人々が神について論じていること『古ストア派断片集』二、一〇九(三)と似ております。と申しますのはあの人たちも、生み、そして育てる霊はディオニュソスであり、圧倒的な力を及ぼして破砕するのはヘラクレスであり、受け入れるのはアンモン、大地をあまねく渡って実りを得るのはデメテルとコレ、海にあまねきはポセイドンである、と言っているからです。

オシリスと月

四一　以上のような自然学的な説明に天文学から得られる学問的な知識を結びつける人々もいて、その人々は、テュポンは太陽をめぐる世界に属し、オシリスは月を中心とする世界に属するのだと申します。* 彼らの意見によりますと、月の光は、生む力と湿り気とを与えるので、動物の生殖をも植物の発芽をも助けてくれる、それに対して太陽は、強烈な火ですべての成長し花を咲かせるものを熱し、萎れさせてしまうし、熱によって大地の大部分をまったく人の住めない所にしてしまい、場所によっては月をすらも支配している、と申すのです。ですからエジプト人はテュポンのことを、「力を振るう者」「強圧的な者」という意味で、セト(Seth)と呼ぶのです。* そして彼らは、ヘラクレスが太陽の上に住居を構え、太陽といっしょに天を廻っている、そしてヘルメスが月に住んでやは

D

ホルス(左)とセト(右)

り天を廻っている、という話を作っています。* 月に関することどもは理性と知慧のはたらきに似ており、太陽に関することどもは力ずく力まかせに行なわれることに似ています。ストア派 E の人たちは、太陽は海に火を点じられて養われ、月は泉や沼のゆらめく水が放つ、甘くて柔らかな蒸気に火をともされ養われている、と申しております（『古ストア派断片集』二、六六三）。

四二　エジプトの物語では、オシリスの死は月の一七日のことだった、となっています。しかし一七日と申せば、満月だった月がかけ始めているのがはっきりと見える日です。ですからピュタゴラス派の人々は、この日を「障害日」と呼び、この一七という数をまったく忌むべき数と見なします。そもそも一七という数は、一六という正方形数（つまり四×四）と一八という長方形数（三×六）――この二つの数だけが、四辺を全部足し合わせた周囲の数と、その図形の F 中に囲まれる面積の数とが等しくなる平面数です* ――の間に介在し、八対八＋八分の一の比率となって、両者が接続するのを妨げて切り離します。二八という数について、ある人はこれはオシリスが生きた年数であると言い、ある人は王位にあった年数だと言います。この二八というのは月が輝く日数であり、また月はこれだけの日数で一めぐりいたします。* 「オシリスの埋葬」と呼ばれる日に木を伐採する場合には、三日月形の櫃を用意しますが、これは、月が太陽

368A

に接近すると三日月形になってかけるからです。オシリスの遺体を一四の部分に切断したというのは、満月の後かけ始めて新月に至る日数と関係づけて謎解きがなされます。月が太陽の光を逃れ、太陽の傍らを通り過ぎて、はじめて姿を見せる日のことを「半ばよしの日」と呼びます。なぜ「よし」かというと、オシリスはよいことをしてくれる神だからです。オシリスという名前自身、いろいろな意味をもっていますが、よく言われるように、どんどん恩恵をほどこす者というのは、その中でも重要な意味です。この神にはもう一つオンピスという名もありますが、ヘルマイオス(一世紀?)はこれも恩恵をほどこす者という意味だと説明しております*(ミュラー『ギリシア歴史家断片集』四、四二七)。

四三　ナイルの水位の上昇は月の光に何らかの関係があると信じられております。最大の上昇はエレパンティネ付近で起こり、二八ペキュス(四メートル弱)に達しますが、これは月の光と回転の周期と同じ数値です。水位の最小の上昇はメンデスとクソイス付近で見られますが、七ペキュス(一メートル弱)で、これは半月(はんげつ)までの日数と同じです。中位の水位上昇はメンピス付近で起こり、一四ペキュス(二メートル弱)で、これは満月までの日数です*。

アピスというのはオシリスの像に生命が吹き込まれたものだとされています。生成力の光が

月から発して、発情期の牛に触れるとアピスが生まれるのだというのです。ですからアピスは、その明るい面が次第にかげって陰になるというように、いろいろの面で月の満ちかけに似ているわけです。* さらに、パメノトの月の朔日(ついたち)には、「オシリスの月詣で」という祭が催されますが、これは春の到来を告げるものです。このようにオシリスの力は月に帰せられているのですが、人々はこれをイシス(彼女は生殖の力です)とオシリスが交わっていると申します。* ですから月は世界を生んだ母と言われ、かつ男女両性の具有者だと信じられています。なぜなら彼女は太陽に満たされて身ごもりますが、彼女は彼女で、大気中に生命の種子を発射し拡散しているからです。テュポンの破壊力ばかりがつねに支配しているわけではなく、彼はしばしば生産力に敗れるのです。敗れていったんは縛られますが、その後ふたたび解放されるとホロスと戦います。そしてホロスは地上の世界であって、したがって生産・破壊いずれからの影響も受けずにはいないのです。

四四　ある人々はオシリスの物語を、月食を暗にほのめかしている話だとしております。月食というのは満月の時、太陽が月の正面に位置して、そして物語が、オシリスが棺の中に入ったと言っている、それと同じように、月が大地の影に入る時に起こるものです。月の三〇日に

アヌビス

は、今度はその月が太陽をかくして見えなくしますが、しかし完全に見えなくはしません。ちょうどイシスがテュポンを完全に成敗してしまわないようにです。

イシスとアヌビス

ネプテュスがアヌビスを生むと、イシスはその子を自分の子として育てます。ネプテュスは地下のもの、見えないものです。それに対してイシスは地上のもの、はっきり見えるものです。この地上・地下の両方に接していて、境を分ける線（地平線）がアヌビスと名づけられ、*姿としては犬の姿で表わされます。犬は夜の暗闇の中でも昼の明るさの中でも、同じように見ることができるからです。そしてエジプト人の間でアヌビスは、ギリシア人

の間でヘカテがもっているのと同じ力をもっているようです。それはつまり、両方とも地下界のものでありながら、同時に天空オリュンポスの神でもあるという点においてです。* 中には、アヌビスはクロノスであると考える人もいて、だからアヌビスはすべてのものを自分自身から生み、すべてのものを自分の中に身ごもり(kyon)、それゆえ犬(kyon)という名がつけられた、と言います。* そこでアヌビスを崇める人たちの崇め方には何か秘儀めいたところがあります。そして昔は、エジプトでは犬が最も崇められていたのでした。しかしペルシア王カンビュ F セスが聖牛アピスを殺して打ち捨てた時、* 獣一匹その遺骸に寄ってもこなかったし食らいもしなかったのに、犬だけが来たそうで、そのために犬は、獣たちの中の第一位を与えられるという最高の名誉を失ったと申します。

テュポンは自然界の有害な要因のすべてである

以上のほかに、月がその中へと落ち込んで、その結果月食になる、この大地の影をテュポンと呼ぶ人たちもいます。**四五** こうして見 369A て参りますと、個々の説は正しくないが、それにもかかわらず、全体を通して見ると正しい考えだ、というように申し上げて差し支えないかと思います。有害なのは乾燥でもなければ風でもない、海でもなければ闇でもない。そうではなくて、およそこの自然界がもっている有害で

破壊的な要因のすべてであり、それらの一つ一つがテュポンの一つ一つの属性とされているわけです。われわれは、デモクリトスやエピクロスのように、万物の起源が生命のないものにあると考えるべきではないでしょうし、*あるいはストア派のように(『古ストア派断片集』二、一一〇八)、無性格で未分化の素材を細工する職人が、ただ一個の理性、ただ一つの神意となって

万物は善悪両方の要素の混合である

万物に及び万物を支配する、と考えるべきでもないでしょう。なぜなら、神がすべてのものの原因である所に、何であれ悪いものがあるとか、神が何の原因にもなっていない所に善きものがあるとかいうのは、共にあり得ないことだからです。というのは、宇宙の調和というものは、ヘラクレイトスの申すように(断片B五一)、「竪琴と弓のように、たがいに反対方向に張る緊張」でしょうし、エウリピデスの言葉(断片二一)をB借りれば、

「善と悪とが別々にあるのではなく、

両方が混ざり合ってちょうどいい加減になる」

のですから。ですから、それこそ大昔の、神のことを考えた人や立法家たちから詩人や哲学者たちに伝えられてきた考え方というのがあるわけでして、それは誰かが最初に言ったというよ

うなものではなく、それでいて人々に強く、拭い去りがたく信じられ、それも言葉や人づてに聞いた話という形ばかりでなく、ギリシア人・異邦人を問わず至る所で、祭の儀式や犠牲式などを通じても伝えられてきた、というものです。つまりこういうのです。万物に心もなく理性もなく導き手もなく、ひとりでに高く保たれているわけがない、あるいはただ一つ、理性だけ C
が、舟の舵や馬の手綱、あるいははみで統御するように、万物を支配し統御しているわけでもない、そうではなくて、すべてのものに善・悪いずれもが混じり合っている、そういう考え方です。むしろ、端的に申しますと、本来この世には混じり気なしの単一のものなどというものはないので、一人の差配がいて、給仕人よろしく、二つの大きな瓶から善悪を適当に混ぜ合わせてわれわれに配ってよこすわけではない、むしろわれわれの人生や世界が、全宇宙とは言わぬまでも、この大地の世界、月と共にあるわれわれの世界が、つねに同じではなく、さまざまな様相を呈し、ありとあらゆる変転にさらされるのは、二つの相反する力によって成り立って D
いて、その一方は右の方に向かって真っすぐにわれわれを導いて行くが、もう一方はくるりと反転して後戻りさせる、そういう仕組みになっているからです。考えてもみて下さい。もし何ものも原因なしには生じないとするならば、そしてもし善は悪の原因とならないとするなら

ば、もともと自然の中に、善ばかりでなく悪を生む元、その始めがある、ということにならざるを得ません。

神とダイモン——ゾロアストレス

四六　以上は大多数の最も賢明な人々の見解です。中には、言わばたがいに腕を競い合う二種類の神があって、つまり一方は善をなす神、一方は悪をなす神だと言う人もあります。さらに、よい方の神だけを神と呼び、もう一方は鬼神（ダイモン）と呼ぶ人もあります。例えば、トロヤ戦争の五千年前に生きていたと言われているマゴス僧のゾロアストレスがそうで、*彼は神の方をホロマゼス、鬼神の方をアレイマニオスと呼んでおりE ます。*さらに彼は、人間の感覚で知り得るものになぞらえるなら、前者は光に似ているが、後者は反対に闇、無知に似ていると言い、両者の中間にミトラがあると言っております。なればこそペルシア人は、ミトラのことを仲介者と名づけているのです。*ゾロアストレスはまた、ホロマゼスにはお願いのお供物とお礼のお供物を供えよ、アレイマニオスにはお祓いのお供物と悲しみのお供物を供えよ、とも教えております。この悲しみのお供物というのは、オモミと呼ばれる草をすり鉢でつぶして、死者の国の神ハデスと闇を呼び、しかる後に殺した狼の血に混ぜて、日の当たらぬ場所へ持っていってこぼす、というものです。*実際彼らは、植物の中にも

善神に関係があるものと悪しきダイモンに関わっているものとがあると信じており、動物にもこの二種類がある、例えば犬や鳥や針鼠は善神の、水ねずみは悪神のものだと考えて、そういう動物をできるだけたくさん殺した者は幸せ者だということになっていました。* F

マゴス僧の世界形成論

四七　しかしながら、ペルシア人もまた、いろいろと神々の物語を伝えておりまして、例えばこんなのがあります。ホロマゼスは最も清浄な光から生まれ、アレイマニオスは闇から生まれ、たがいに戦っている。ホロマゼスは六人の神を作った。第一は慈しみ、第二に真理、第三に秩序、あとは知慧と富と、最後に美しいものを楽しむ心の作り手。* アレイマニオスもこれと張り合うべく同じ数の神を作った。次にホロマゼスは自分の体を三倍大きくして、大地から太陽までの距離ぐらい、太陽から離れた所に位置を占めると、空に星をちりばめて飾った。その星のうちの一つ、セイリオス（シリウス）を、彼は番人、見張り役と定めて、ほかのすべての星の前に置いた。* このほかに彼は二四柱の神を作って、卵の中に納めた。* アレイマニオスから生まれた神々もあって、彼らも数は同じだった。そして彼らは卵に穴をあけて……〔欠落〕……そこで善いものに悪いものが混じってしまうことになった。しかし疫病と飢えをもたらすアレイマニオスが、彼らの手で必ずや完全に滅ぼされて姿を消す運命の時が来る。その

370 A　B

時大地はどこもかしこも平らになり、すべての人々の生き方も一色、そしてただ一つの国が生まれ、みな幸せに暮らし、ただ一つの言葉を話すようになる、*というのです。テオポンポス（前四世紀）もこんな話を伝えております（ヤコビ『ギリシア歴史家断片集』断片六五）。マゴス僧の話では、三千年の間は二人の神が交代に、一方が支配して他方が支配されるが、次の三千年の間彼らは争って戦争を起こし、一方が他方の神の成果をこわしてしまう。しかし最後にハデスが滅び、人々は食べるものにも事欠かず、影を引きずって歩くこともなくなり、幸福に生きるであろう。またこのような幸福が訪れるよう、いろいろに工夫してくれた神は、しばらく静かに休息する、とは言え、神としては長い間ではなく、人間が眠るのにちょうどよいほどの時の間である。*

カルダイア人の世界形成論

マゴス僧の語る物語というのは以上のようなものです。四八　カルダイア人*は申します。惑星——彼らは、めいめいどれかの惑星のもとに生まれたとされていて、その惑星を自分の守護神と呼びます——のうち二つは福の星、二つは禍いの星、あとの三つは中間で、禍福いずれでもある。*ギリシア人の福神・禍神の考え方は誰にもはっきりしています。善き神の役どころはオリュンポスのゼウス、避ける

ギリシア人の世界形成論

C

べきは死者の国の王ハデスだとされ、アプロディテと軍神アレスから調和の女神ハルモニアが生まれた、と話では言われていますが、このハルモニアの両親のうち、アレスは気性激しく争いを好み、アプロディテは柔和にして誕生を支配し保護する女神です。ごらん下さい、哲学者Dたちもこれと同じ考え方をしています。ヘラクレイトスは（断片五三）無愛想に「戦いは万物の父にして王にして主である」と言い、ホメロスが『イリアス』一八、一〇七）「神々の間にも人間の間にもいさかいの絶えてなくなるよう」と祈っているのは、ヘラクレイトスに言わせれば（断片九四）、「彼は自分でもそれと気づかずに万物の生成を呪っている。なぜなら万物は戦いと反目から生まれるのだから。太陽も自分固有の境界を越えぬ。もし越えれば、正義の女神ディケを助ける運命の女神たちクロテスの目が、それを見逃さぬであろうゆえ」、ということになります。エンペドクレスは（断片一八）善をほどこす元をピロテス（「愛情」）とかピリア（「友情」）とか呼び、時には「眼（まなこ）静かなハルモニア」と呼んでいます。これに対して悪の元の方を、彼はE（断片一七、一九行目）「滅びをもたらすネイコス（「争い」）」とか（断片一二二、二行目）「血みどろのデリス（「戦い」）」とかと呼びます。ピュタゴラス派の人々はこれを多くの名で呼び、善の神の方は「一」「限定」「静止」「直線」「奇数」「正方形」「等しいこと」「右」「輝き」、悪の方は「二」

「無限」「運動」「曲線」「偶数」「長方形」「等しからぬこと」「左」「暗さ」とし、*これらの原理が生成の根底にはたらいていると考えるわけです。しかしアナクサゴラスは知性(ヌース)と無限を、アリストテレスは形相(エイドス)と否定を、そういうものとして挙げ、*プラトンはしばしば何か覆いをかけたような秘めやかな言い方で、対立する二つの原理を「同」「不同」と名づけております*(『ティマイオス』三五A)。しかし『法律』(八九六D以下)——これを書いた時彼はすでに老境にありました——では、謎めいた象徴的な言い方をやめ、世間一般で認められた

F

言葉使いをして、宇宙はただ一つの魂(プシュケ)によって動かされているのではなく、いくつかの、恐らく二つより少なくない魂によって動かされている、そしてそのうち一つは善をなすが、もう一つは反対で、反対のはたらきをする、と言っております。彼はこのほかに、第三に、中間の性質のものの余地を残しておりますが、それは生命のないものでもなく理性のないものでもなく、ある人々が考えているように、自分自身では動くことができないものでもなく、ただし上記の両者に依存していて、つねにより良きものを希求し、憧れ、追求するものです。しかしこういうことは、本稿の以下の論述において、エジプト人の神の考え方をこういう

371A

哲学と関連づけながら申し上げることにいたしましょう。

善なる力の強さ

四九　この世界の誕生も構成も、対立する力の混合によっております。両者は互角ではありません。善なるものの方が力をもっております。しかし悪の力が完全に滅びることはありません。宇宙の体にも魂にも悪の力が生まれながらに息づいていて、善の力に対してたえず必死の戦いを挑んでいるのですから。こういう次第で、オシリスとは魂の中のあらゆる善きものの指揮者にして主なるもの、知性と理性なのですが、地上にも、

強さの源は理知である

風の中にも水の中にも、天にも星にも、オシリスの流出とオシリスの映像*がみちみちていて、それは秩序だって一定していて健康なものであり、それこそが季節、風の温度、季節の循環となって表われるのです。一方テュポンは、魂のうちの感じやすく、ティタネス族の神に似て*没理性的で気まぐれな要素、また肉体のうちの、季節や空気の混ざり具合が異常になったり日食が起こったり月が姿を消したりすると、死にさらされたり病に冒されたり混乱したりする要素です。この説明がこれで正しいということは、一方では「力を奮う者」「強制する者」を意味しますが、他方「しばしば立ち戻ること」「跳び越えること」も意味しているのです。ベボンというのはテュポンの仲間の名前だと言う人がおりますが、祭司で学のあったC

B

Cト(Seth)という名が証明しています。というのは、セトとは、エジプト人がテュポンにつけたセ

マネト（前三世紀）は、テュポン自身の異名だと言っております（ヤコビ『ギリシア歴史家断片集』断片二〇）。ベボンという名前の意味は「抑制」や「妨げ」ということで、事が本来の道に沿って進行し、向かうべき所に向かっているのを、テュポンの力が妨げることからこう言うのです。*

五〇　そこでこのベボンには、家畜ならば最も愚鈍なもの、すなわち驢馬（ろば）、野獣ならば最も獣的であるもの、すなわち鰐（わに）と河馬（かば）、

動物としてのテュポン――非理知的なものの象徴

が割り当てられるのです。* 驢馬については先に申し述べました（三六二F）。ヘルモポリス（「ヘルメスの市」）では、テュポンの像は河馬として描かれております。その河馬の背中では鷹が蛇と戦っております。この場合河馬はテュポンで、鷹は力であり支配です。その支配権をテュポンは強引に獲得しますが、おのれの悪ゆえに混乱し、また自分でも周囲を混乱させなどして、時 D に支配の座を失います。そこでテュビの月の七日――この日は「ポイニキア（フェニキア）からのイシスの帰還の日」と呼ばれております――に、人々は縛られた河馬の型押しをしたお供物の練り菓子のまわりを、足踏み鳴らしながら回ります。* アポロノポリス（「アポロンの市」）には、町中総がかりで一人一人が一頭の鰐を食べるしきたりがあります。* ある一日、できるだけ多くの鰐を人々はつかまえて殺します。そして神殿の真向かいの所にそれを捨てます。これは、テ

ュポンがホロスから逃げる時鰐に変身したので、悪くかつ有害な動物や植物や、それに人間の経験は、みなテュポンの仕業、テュポンの演じる役割、テュポンの活動だということにされているのだから、と人々は申します。

E

オシリスと目、鷹—理知の象徴

五一　またオシリスを目と笏杖(しゃくじょう)で表わすこともあります。[*] 目は予見を表わし笏杖は権力を表わしています。ホメロスが『イリアス』八、二二〕世界を支配する王者たる彼のことを、「至高の王、知慧にたけたるゼウス」と呼んでいるのと同じです。「至高の」とは彼の力のことを言い、「知慧にたけた」とは彼の賢明な計画と思慮深さのことを言っているのでしょう。この神を鷹として描くこともよくあります。この鳥は目の鋭さと飛ぶ速さとですぐれていて、最少の餌で生きて行くことができるからです。葬られずに放置されている死体を空から見つけると、舞い降りて、その死者の目に土をかけてやるとも言われております。水を飲むために川に降りる時は、必ず羽を真っすぐに立てて立ちます。飲み終わるとその羽を元通りに下ろします。こうすることによって、この鷹が鰐に食われずにすんだ、無事だということが分かるのです。もし鰐につかまると、水を飲み始めた時羽を立てたまま、ということになるからです。

F

また、至る所で人間の姿をしたオシリス像が見られますが、それらの像は直立した男根を持っています。生殖、養育というのがこの神の本質だからです。そしてこの神の像は燃えるような赤い衣装をまとっています。これは、オシリスの持っている善なる力が形をもったのが太陽であり、知性的に思考する彼の本性が目に見えるようになったのが光である、と信じられているからです。ですから太陽という球をテュポンのものだと考えるなどは一笑に付してよいことなのです。* テュポンには光るとか守るとかいう面がまったくなく、秩序、生成と関わりなく、ほどよい運動、理性にも縁がなく、むしろその反対だからです。多くの動物や植物を死なせる乾燥は、太陽の作用に帰すべきものではなく、むしろ、無秩序で無限定な力の勢力が度を越えて、蒸気が上るのを止めてしまうために、地中空中に風と水が時ならぬ時に混入するせいなのです。

372A

再びオシリスと太陽

五二　オシリスに捧げる賛歌*では、太陽のふところに抱かれた見えない神*に呼びかけ、月と太陽とが一本の直線上に並ぶエピピの月の三〇日に、ホロスの誕生を祝います。月ばかりでなく太陽も、ホロスの目であり光であると信じられているのです。* パオピの月がかけ始めて八日目、とはつまり秋分の日の後に、人々は太陽の杖*の誕生を祝います。

B

これは、太陽と熱と光が弱くなり、傾いて曲がってわれわれから遠ざかっていくので、支えと力添えが必要だということなのです。さらにまた、冬至の頃、牝牛を曳いてヘリオス(太陽)の C 神殿のまわりを七回廻らせます。これを「オシリス探し*」というのですが、女神は冬に水を渇望するからです。七回というのは、太陽が冬至から夏至への道行を七か月目に達成するからです。月の四日目には、「ホロスの誕生祝い」という記録*に書かれているように、他の誰よりも先にイシスの子のホロスが、太陽に犠牲を供えたと言われております。そればかりか、人々は日に三度太陽に香を供えます。日の出には脂(やに)の、昼には没薬(もつやく)の、日の入時にはキュピと呼ばれる香の、お供えをするのです。このそれぞれについての説明は、後ほど申し上げることにいたします(三八三A以下)。これらすべてのことに関して、人々は太陽にお願いをし、そしてお仕 D えしているのだと信じているのです。しかしこういう例をたくさんここに集めて御披露する必要がありましょうか。中には、そのものずばり太陽がオシリス(Osiris)であり、それをギリシア人はセイリオス(Seirios「焦がす者」)と呼んでいる、なるほどエジプトでは、その Seirios に冠詞をつけた(つまり O-Seirios とした)ために、それと気づきにくい名前になってはいるが、と言う人々がおります。*その証拠にイシスは月以外の何物でもないではないかと、その人々は申しま

す。こう言って彼らは、イシスの像で角のあるものは、三日月をかたどったものであり、また黒い衣服をまとったイシスは、月がかくれて見えなくなるのを表わしたもので、身をかくしている間に月は太陽をあこがれて追っているのだと言われております。ですから、色恋沙汰にかけて月に呼びかけるというようなことにもなるのですが、これまでも何度か引用した(三五三C、三五四E、三五九B—Cなど)エウドクソスは(断片二九七)、イシスは色恋の裁き手だと申しております。こういう説はある程度信じてもよいかも知れません。しかしテュポンは太陽であ る、などという説は聞くだに値しません。しかしわれわれの本来の問題に戻りましょう。E

自然界の女性原理としてのイシス

五三　実際、イシスは自然における女性的なものそのものでして、あらゆる種類の生殖の営みの受け手です。それゆえプラトンは(『ティマイオス』四九A、五一A)イシスを「乳母」だの「すべてのものの受容者」だのと呼んでいますが、*たいていの人々は「無数の名をもつ者」と呼びます。*それは彼女が理性の力によってあらゆるものに変わり、どんな姿形(すがたかたち)でも受け入れるからです。イシスは生まれながらに、第一のもの、至高のものへの愛を授かっております。そしてこの至高のものとはすなわち善なるものと同一であって、イシスはそれにあこがれ、それを追求しているわけです。悪に発するものは、彼女は避け

たりはねつけたりいたします。たしかにイシスは善・悪いずれに対しても場所となり素材となりますが、つねにみずから善の方に傾いていて、その善なるものを生むためにわが身を提供し、その流出と似姿を自分の中に身ごもり、それを身ごもって母となることに嬉しさと喜びを感じるのです。生殖とは、物質的な側面においては本質の似姿であり、生まれ出るものは存在の模倣だからです。**五四**　とすればエジプトの物語の中で、オシリスの魂は永遠で不死だが、肉体はテュポンが何度も切り刻んだり亡きものにしたりした、そしてそれを求めてイシスが諸国を遍歴し、ふたたびそれを一体に集めなした、と言われているのは、怪しげな話ではないのです。というのは、真に在るもの、真に思惟されるもの、そして善であるものは、死滅や変化より強い、つまり死にもしなければ変わりもしないからです。それに対して、その真に在るものをモデルにして感覚や肉体が作った似姿、あるいは真に在るものが一時的に呈した考えや、一時的に帯びた形や類似性は、蠟に押された封印の押型と同じで、永久にそのままとどまりはしません。掟なきもの、混乱の力に捕らえられてしまいます。こういう力は、天の方(かた)よりこなたへ押し寄せて、ホロスと戦います。ホロスとは、感覚でとらえらえるものであり

ホロス

ながら、真に思惟されるものの似姿としてイシスが生んだものでした。だからこそ

F　373A　B

ホロスは、テュポンから庶子だと訴えられたと言われるのです。つまり彼は、父親のオシリスのように純粋で混じり気なしではない、父親は理性そのもの、何も混じらず、何にも動かされない理性であるのに、ホロスは肉体的要素があるために物質的なものが入り込んでいる、というわけです。ホロスはしかし優勢になり勝利を得ます。それはヘルメスすなわち理性*が証言して、自然は真に思惟されるものにのっとって世界を生むのだ、ということを明示するからです。イシスとオシリスが、まだレアの胎内にあった時にアポロンを生んだという話は、この世界が現われ、理性によって完成されるよりも前に、物質が最初の「生み」のわざをやったということのアレゴリーですが、これは物質の本性上、それ自身成就するはずのないことです。ですから物語は、この神が闇の中で五体満足ならざる状態で生まれたとし、年長のホロスと名づけるのです。つまり年長のホロスというのは世界ではなく、やがて誕生すべき世界の影、その映像だったにすぎないのです。**五五**　このホロス*も、彼自身としては明確な姿をしており、それなりに完全なものです。テュポンを完全に滅ぼしてはしまわない、彼の活動を止め力をそいだだけです。ですからコプトスにあるホロス像は、片方の手でテュポンの生殖器をつかんでいると言われるのですが、物語では、ヘルメスがテュポンの活力の元である筋を引き抜いて、そ

れを竪琴の絃にした、となっており、これは理性が宇宙を、たがいに調和しない部分の寄せ集めだった状態から、調和のある状態へと作ったということ、および、破壊的な要素を払拭して D しまわなかった、ただその力を大いにそいだということなのだ、と人々は教えます。だから破壊的要素は今では弱く活力がない、外から影響を受けやすく変化しやすい要素と混じり合いつながり合ったからです。せいぜい地面の大揺れ小揺れ、空気の乾燥や突風、さらには稲妻や雷雨を起こすだけのものになっています。水や風を疫病で汚すこともあります。ついには月へ上っていって、その光を掻き乱したり黒くしたりします。これをエジプト人は、テュポンがホロ E スの目を打ったの、えぐり取ったの、呑み込んだの、それをまたヘリオス（太陽）に返したのと信じ、そして語り伝えております。目を打ったというのは月ごとに月がかけることを表わし、盲目にしたというのは日食を表わし、それを太陽が月が大地の陰から出るとすぐに照り返して、癒してやる、ということになるのです。

オシリス、イシス、ホロスの関係の哲学的解釈

五六* ホロスより強力で神々しい本性は、真に思惟されるものと素材、そしてこの二つから生じるものでギリシア人が世界（コスモス）と呼んでいるものとから成っています。このうち思惟されるもののことをプラトンは『ティマイオス』五〇ＣＤ）イデアとか模範（パラデイグマ）と

ムト

か父とか呼んでいます。素材あるいは生む席あるいは場所のことを母、そしてこの父(ちち)・母(はは)から生まれてくる者のことを「子孫」または「生まれる者」と呼んでおりました。エジプト人は、宇宙の本質を三角形の中でも最も美しい三角形、プラトンが『国家』(五四六B)で結婚の形を考える際に利用したらしいあの三角形、*になぞらえているようだと言う人もいるでしょう。これは直角三角形で、垂辺が三、底辺が四、斜辺が五というもの、この斜辺の平方は他の二辺の平方の和と同じ力をもっています。*そこでこの三角形の垂辺は男性に、底辺は女性に、そして斜辺は両者から生まれたものに、なぞらえられるでしょう。*そうするとオシリスは原因、イシスは受容者、そしてホロスが成就されたもの、ということになります。三というのは最初の完全

F

374A

な奇数で、[*]四は偶数の二から成る正方形(二乗)です。五は、三という数と二という数から成っているわけで、一部は父親に、一部は母親に似ております。そして「すべて」という語(panta)は「五」という数詞(pente)から生まれたものであり、[*]「数える」という語は、もとは「五本の指で数える」「五を単位として数える」ということでした。五はそれ自身で正方形になると(二乗されると)、エジプトの文字の数と同じになり、アピスが生きていた年数と同じになります。[*]

ホロスはよくミンという名でも呼ばれます。ミンとは「見られるもの」ということで、世界は知覚されるもの見られるものだからこう呼ばれるのです。[*]イシスはムト(Mouth)、あるいはアテュリ(Athyri)、それからメテュエル(Methyer)とも呼ばれます。この最初の名前は「母」ということであり、二番目のは「ホロスの棲(すみか)の世界」のこと、あるいは、プラトンが『ティマイオス』五二D—五三A)で申しておりますように、「出産の場所、受容の場所」ということです。三番目のは「満ちる」というのと「善い」というのとの合成語です。世界の素材は充満しており、善なるもの清浄なものの秩序づけられたものとの関わりがあるからです。[*]

B

以上とヘシオドス、プラトンとの対応

五七　ヘシオドスも（『神統記』一一六以下）宇宙の最初に生まれたものをカオスと大地（ガイア）とタルタロスとエロスであるとしている点で、私が C 今上に述べてきたことと同じことを考えていたと思えましょう。実際、ヘシオドスのガイアをイシスに、エロスをオシリスに、タルタロスをテュポンに置き換えて当てはめれば、そうだと申せます。カオスには触れませんでしたが、ヘシオドスはカオスをどこか下の方の、宇宙がそこに基礎をもつ場所と考えていたようです。* こうなりますと、『饗宴』（二〇三B以下）でソクラテスがエロスの誕生について語っている、あのプラトンの物語が思い出されます。ペニア（「貧窮」の女神）が子供がほしくて、眠っているポロス（「機略」の神）の傍らに寝ました。そして彼の子を身ごもり、エロスを生みました。この子は生来性格が一様でなく、たいへんに多様でした。父親が善良で賢明で、何事につけても自主独立だったところへ、母親が無策で無力で、貧乏ゆえにいつも他人にからみつき、他人にとりいって何かを引き出そうとする、そういう両親 D から生まれたからです。ポロスがほかならぬ、まず愛され、求められた方であり、完璧で自主的であったのに対して、ペニアの方は、プラトンが素材と呼んでいるもので、彼女自身のうちに善なるものがあるわけではない、それに他人から満たされなければならず、そしてつねに他

人をあこがれ他人と共有しなければならない。この二人から生まれた世界、つまりホロス(＝エロス)は、永遠でもなく、外からの影響に動かされないわけでもなく、不死でもなく、身に受ける出来事の変転・循環のうちにあって、つねに生まれかわりながら、つねに若く、決して老い衰えるままにはなるまいとするのです。 E

オシリス、イシス神話の哲学的解釈

五八　物語を、全面的に事実を述べたものととってはならず、むしろ個々の点について、本当らしさに照らして、ふさわしい話を取り入れるようにすべきです。ですから、「素材」ということを言う場合、若干の哲学者*の見解を鵜呑みにして、それが魂(生命)のない不活発な物体で、それ自身では何も為すことなく、何もできないものだと考えてはなりません。例えばわれわれは、油が香料の素材であり、金が像の素材であると申しますが、油なり金なりは香料や像に解消するものでなく、それら自身の質をちゃんと保っております。同様にして、われわれは人間の魂と知性とを知と徳の素材とし、そして理性がそれを飾り調和を与えるのです。ある人たちは、心を形(エイドス)の宿る所、言わば知覚の型のようなものだと説いております。*またある人たちは、女性の種子は力や起源となるのではなく、生成のための素材となる、あるいは育てるはたらきをするのだと考えております。*そのよ F

ネプテュス

うに考えるならば、この女神、すなわちイシスについても、つねに最初の神に結びついて、その神のもつ善なるもの美しいものを愛するゆえに彼と共にいて、決して反発しない、と考えねばなりますまい。しかし、人間の夫婦についてよく、夫は法の認める立派な夫で、心正しく、正しさを守って妻を愛している、妻も立派な女性で、夫をもち、夫と交わり、しかも夫をあこがれている、というようなことを申しますが、これと同様に女神も、夫オシリスにいつもすがり、夫に子をせがみ、夫の最も権威ある要素、清浄な要素を受けて身ごもるのです。五九　しかしテュポンが侵入して、いちばん外の地域を奪った時、イシスは陰鬱になったように見え、嘆きつつ、散り散りにされたオシリスの体の残っている限りのものを探し、そして死滅するか

375A

も知れない部分を手に入れ、またかくすなどして、飾りました。実はそれらによってイシスはあらためて、生まれてくるであろうものを世に示し、そして自分の身からそれを生んだのです。天と星のもとにある理知(ロゴイ)と形(エイデー)と神の流出(アポロエ)は元のままです。ただ外からの力を受けて変わるもの、つまり地上や海中にあるもの、植物や動物にあるものが散り散りばらばらにされ、死んで葬られたのです。しかしそれはしばしばふたたび輝き出、新しい誕生を得て現われるのです。そこで物語では、テュポンがネプテュスといっしょにいる、しかしオシリスもひそかに彼女と関係している、と言われることになるのです。素材のいちばん外側、これがネプテュスとかテレウテ(「果て」)とか呼ばれているのですが(三六六B参照)、これは破壊的な力が支配する所です。生む原理や保存する原理はここには弱々しい種子しか与えず、これがテュポンによって滅ぼされるのです。ただ、イシスが取り上げ、育てて一体にしたものは例外なのです。

B

C

神の名についての語学的説明

六〇　この神は、プラトンもアリストテレスも考えているように、*全体としてはよい神です。自然がもっている生む原理や保存する原理はこの神、そして存在することの方へと向かいます。それに対して滅びの原理、破壊の原理は、この神から去って存在の否定に向かいます。こういう次第でイシス(Isis)という名

は、知って「急ぐ」(hiesthai)、そして「運ばれて行く」(pheresthai)ことからつけられた名前です。* イシスは生き生きとした理解力をもった運動なのです。この名前は決して外来の名前ではありません。神々(theoi)すべてがそうで、万国共通ですね。「見られるもの」(theaton)と「走るもの」(theon)という二つの呼び名からできています。* この女神も同様です。彼女の理解力(episthеme)、それと同時に運動(kinesis)から、われわれは彼女をイシスと呼び、エジプト人も彼女をイシスと呼ぶのです。プラトンも『クラテュロス』四〇一C)同じことを言っています。昔の人は本質(ousia)のことを isia と言っていた、とソクラテスに言わせているのです。* こうして知性や思慮深さ――これは衝き動かされる精神の動き、はたらきですが――理解、善なるもの一般、徳、こういうものは、滑らかに流れあるいは走るものの側に属すとされ、反対に、しかしちょうど同じように、悪――それは自然あるいは本性が急ぐ、あるいは行こうとするのを妨げたり、縛りつけたり、押さえて離さなかったり、せきとめたりすることです――に対して上に挙げたのに対応する蔑称をつけて呼びます。例えば悪は「悪く行くこと」(kak-ia)、進退きわまるような困難は「行けないこと」(apor-ia)、臆病は「行くのを恐れること」(deil-ia)、悩みは「行かないこと」(an-ia)と呼ばれる所以(ゆえん)です。*

六一　オシリス(Osiris)という名は「敬虔

D

な」(hosios)と「神聖な」(hieros)という二つの語が合成されてできました。* オシリスは天上のことどもと地下(死者の国)のことどものいずれにも通じる言葉の持ち主だからで、昔の人々は天上のことどもについては「神聖な」(hieros)と呼び、地下のことどもについては「敬虔な」(hosios)と呼ぶ習わしだったのです。* そして天上のことどもを明らかにし、天上で起こっていることどもの理由であるのがアヌビスで、時にはヘルマヌビスと呼ばれることもありました。E
これは彼が時には天上に属し、時には地下に属すからです。それでアヌビスには白い雄鶏を犠牲として供えることもあれば、サフラン色の雄鶏を供えることもあるのです。白い方は純粋で輝いていて天上世界にふさわしい、サフラン色の方は、色が混ざっていて純粋ではないので地下の世界にふさわしいと考えてのことです。それに、いろいろの語がギリシア語に取り入れられてギリシア語らしく造形されたことに驚いてはならないのでして(三六二D－E参照)、もともとギリシア語だったものが植民した人々とともに海外へ出て、今に至るまで外国における外国語としてそのままそこに留まっている例なら無数にあります。そういう語をいくつか詩人が作品の中で使いますと、外国かぶれだと言って非難する人が現われます。そういう人はこういう語が外国の言葉だと決めつけているのでしょう。『ヘルメスの書』と呼ばれる書物がありまし F

ソティス

て、*そこには神々の名前について記されているのですが、こんなことが書いてある由です。太陽の道の監視のために配されたる力をホロスといい、ギリシア人これをアポロンと称す。風の監視に当たるはオシリス、またはサラピスと呼ばれる。……〔欠落〕……エジプト人はソティスと称す。このソティスというのは「妊娠」(kyesis)または「身ごも(ってい)ること」(kyein)という意味で、したがって、この語にちょっと手を加えるとkyon、すなわちイシスに固有の星と信じられている「犬星」(シリウス)になるのです。*こういう次第ですから、神々の名前について、これはギリシアのものだ、いやエジプトのものだと張り合うべきではないのです。実際、私としては、オシリスよりはサラピスという名についてなら、エジプト人に名誉を譲ってもい

376A

いと思います。サラピスは外来語でオシリスはギリシア語だからですが、しかし、両方とも一つの神、一つの力の名前なのです。

以上の説明に対するエジプトの対応

六二　エジプト側のことどもも、これまで申し上げてきたことと一致するようです。例えば、エジプト人はしばしばイシスをアテナという名で呼びますが、この場合、この名前は「自分から生まれた」ということ、つまり、何か自分自身に発する動きのことを言っているのです。* 一方テュポンは、先にも申しましたとおり（三六七Dおよび三七一CD）、エジプトではセト、ベボン、スミュなどと呼ばれますが、これは妨げる、あるいは押しとどめる強い力、あるいは対立、あるいは反転させる力を言い表わそうとする名前です。* また、エジプト人は今でも天然磁石のことを「ホロスの骨」と呼び、鉄のことを、マネト（ヤコビ『ギリシア歴史家断片集』断片二二）がそう言っていますが、「テュポンの骨」と呼んでおります。天然磁石には引きつけられ引っ張られるが、またしばしばこの石にはねつけられ、反対方向に押されていく、というようなことがありますが、鉄はそれに似ています。そしてまさにその鉄のように、宇宙の保存活動、善に沿うた理性に基づく運動も、回転しつつ、かの激しいテュポン的な力にはたらきかけ、説得して和らげ、そして引きつけます。しかしそ

B

うかと思うと、そのテュポン的な力を立ち直らせて元の力に逆戻りさせ、無限の淵に沈めてしまうことがあります。さらにエウドクソスが(断片六二)ゼウスについて申しております。エジ C プト人の物語では、生まれた時ゼウスは、二本の足がたがいにくっついていたので歩くことができず、恥ずかしいので一人離れて暮らしていた。しかしイシスが彼の体のその部分を切って二本に分け、らくに歩けるようにした、というのです。この物語が言わんとしていることは、神の心も理知も、そのままでは見えず、あるいははっきりとしない、運動することによってはじめて創造のはたらきをするようになる、ということです。

セイストロン

六三　セイストロン(seistron)という、いわゆる「がらがら」のような祭礼用具がありますが*、このseistronという名前の意味も、たえずこの道具を揺すって(seiesthai)動きを止めてはならず、眠ってしまって何も感じなくなったりしないように、これで目を覚まさせて起こしておく、という用途から出た名前です。テュポンもこのセイストロンで追い払わ D れたといいますが、これは、もし死滅の気が自然をがんじがらめに縛り上げて居座った時には、生成力が運動を与えることによって、その縛(いま)しめから振りほどき、再生させなければならない、ということです。このセイストロンの上の端は円い輪になっていて、そこに振られる四

個の球がついています。宇宙の生まれては死んで行く部分が、月の円環に囲まれていて、そしてその円環の中ではすべてのものが四元——火と土と水と空気——によって運動し変化するからです。セイストロンの輪の上の先端の部分には、人間の顔をした猫が彫ってあり、下の方の振る竿の部分には、片側にはイシスの、反対側にはネプテュスの顔が彫ってあります。この二つの顔はそれぞれ誕生と死を表わしています（イシスとネプテュスは上に述べた四元が運動し E 変化したものです）。猫は、その千変万化ぶりと夜行性と多産のために、月になぞらえられているのです。聞くところによりますと猫というものは、はじめて子を産むときは一匹だけ産むそうですが、次に子を産む時は二匹産み、次は三匹、次は四匹、次は五匹というように、七匹まで、産むたびに一匹増しに産んで、都合二八匹の子を産むというのです。* ところがこの二八という数は月が光る日数です。もっとも、それでは話ができすぎていると言われそうですが、これとは別に、猫の目の瞳は満月の夜に大きく円くなり、月がかけてくると縮んで小さくなる F ように思えます。猫が人間の顔をしているのは、月の変化の中にある知的理性的要素を表わしているのです。

六四　一口で申せば、水だの太陽だの大地だの空だのをオシリスあるいはイシスと考えるのは正しくないし、火だの乾燥だの海だのをテュポンと思うのも間違っている、むしろ、この火や乾燥や海の中に、限度もなく秩序もなく、過度にあるかと思えば不足しているというような、そういう在り方をしているものをテュポンにあて、秩序をもち、善であり有益であるものはイシスのわざであり、それはまたオシリスの理性の似像であり模倣である、と考えればよいのです。しかしまた、例えばエウドクソスが（断片六三）、なぜデメテルではなくてイシスが色恋に関与しているのかとか、どうしてディオニュソスはナイル河の水位を高めることができず、死者を支配することもできないのかとか、それが信じられなくて当惑している、あれは解消させましょう。と申しますのは、私どもは一つの一般的な推論に従って、これらの神々はおよそ善なるもののすべてに関与しておられる、そして、男の神様が最初の種子をお与えになり、女神様がそれを受け取られ、そして分配なさる、というようにして、自然の中にある一切の善美なるものはみな、これらの神々のおかげで存在することになった、と考えるからです。

以上の締めくくり——イシスとオシリスの正しい受けとりかた

377A

B

俗信―神々のはたらきを自然現象に解消してはならぬこと

六五　そこで私どもは、俗なことを言う人たち、これが世間には多いのですが、そういう人たちも相手にすることにいたしましょう。例えばこういう人たちです。上に申しましたような神々に関することどもを、季節ごとの環境の変化とか、収穫や種蒔きや耕作のような季節ごとの仕事の循環とかに結びつけて喜び、穀物の種を蒔いて土をかけると、オシリス様のお弔いをしたと言い、芽をふいて穀物がまた顔を出すと、オシリス様がよみがえってお出ましだと言う、そういう人たちです。同じ連関でこういう話も伝えられています。イシスは身ごもったと知った時、パオピの月の六日目にお守りの帯を締めたが、*冬至の頃、まだ未熟児の子を、まだ季節でもないのに花を咲かせ、葉も新芽をふき出している繁みの中に産み落とした。これがハルポクラテスです*（だから人々は彼へのお供えとして、芽をふいたばかりの扁豆を初穂として持ってくるのです）。そこで人々はイシスが産褥についてハルポクラテスが生まれた日を、春分の後に祝うことにしたそうです。こういう話を聞くと人々は、この話が好きになり、話の中からじかに、手近で分かりやすい点をめいめい引き出してそれを信じるのです。

六六　まず第一に、エジプト人が神々をギリシア人にもエジプト人にも共通のものだとし

て、エジプト人固有の神とせず、つまり、ナイル河、およびナイル河がうるおしている場所だけをこれらの神々の名のもとに限定し、あるいは沼地や蓮(ロトス)だけが神のみわざだと言うなどして、ナイル河もなくブトやメンピスのような都市もない国の人々をこれらの大いなる神々の崇拝から締め出す、というようなことをしていない、だからといってそれを驚くには及ばないのです。* むしろイシスとイシスに関わりのある神々はすべての人間のものであり、すべての人間が知っているのです。もっとも、そのうち若干の神々を、エジプトで呼ばれている名 D 前で呼ぶことを学んだのは、それほど昔のことではありませんが、それでも、それぞれの神の力ははじめから知っていて、崇めていたのです。

第二に、そしてこれはいっそう大事なことですが、自分でもつい気がつかずに、神のみわざを風だの川の流れだの種蒔きだの取り入れだの、地上に起こる出来事だの季節の変化だの、そういうものにことよせ、そういうものに解消してしまう、つまり、例えばディオニュソスのことを酒と言ったり、ヘパイストスを火と呼んだりする、そういうことがないよう、大いに注意し、そうならないように心がけなければなりません。ペルセポネという女神のことをストア派の哲学者のクレアンテス(前三世紀)がどこかで(断片五四七)「実りの中を分けて運ばれ、息ひき

とったる風（かぜ）」と言ったり、ある詩人が（キンケル『ギリシア叙事詩断片集』七三頁）麦を刈る男たちのことを歌って、

「屈強の若者らデメテルの手をば刈るとき」、

などと言っているのもそうです。これでは、帆や綱や錨のことを船頭と呼んだり、機織（はたお）りの縦糸・横糸を織り姫と呼んだり、碗や蜂蜜入りの飲み物や大麦の粥を医者と呼ぶのとどこも違わないではありませんか。それどころか、こういう、感覚があるわけでもなく、生命があるわけでもない、当然ながらそれを必要として用いる人間に食べられ使われてしまうものに、神々の名を与えるのですから、人々の胸の中に、恐るべき、神をないがしろにする考え方を植え付けてしまうことになります。実際、かようなものを神と信ずるなどできるわけもないことです。

民族ごとに神の信じかたも違うこと

六七　神というものは、心のないものでもなく魂のないものでもなく、人間に奉仕するものでもありません。しかし、この後われわれは、今挙げたような自然の恵みや物を用い、それをわれわれに途切れることなく潤沢に、贈り物として届けて下さる方々、それを神と見なしました。そして民族が違えば神々も違うとは考えなくなり、異邦人の神もギリシア人の神も区別なく、南の人の神も北の人の神もみな同じだということに

E F

なりました。けれども、日月（じつげつ）、天地、それに海、これがみな、すべての人間に共通ではあっても、その呼び名は民族ごとにいちいち違っているように、これらのものに秩序を与える一つの理性、それらを統括する一つの賢き思慮、それに、こうしたものすべてにそれぞれあてがわれて奉仕するもろもろの力、これらのものにそれぞれの民族が、それぞれの習慣に従って、異なる崇めかた、異なる名称をあてました。中には神聖視される徴（しるし）を使って思いを神へと向かわせる例もあります。こういうしるしの中には、意味がとりにくいものも、比較的はっきりしているものもありますが、いずれにしても多少の危険がないわけではないでしょう。すっかり道を誤って、迷信の泥沼に足をとられた人もあれば、沼地を避けるように迷信を用心したはいいが、無神の淵に落ち込んだ人もあります。

378A

理性的思考にあってのみ神は正しく理解される

六八　こういう事情ですから、この件については、哲学が提供してくれる推論的思考を、言わば秘儀参入のための案内者として用い、それによって、言い伝えられたことも祭礼で行なわれることも、その一つ一つについて、敬虔な気持で考察を深めていく必要があるのです。「無神論者」とあだ名されたテオドロス（前四―三世紀）は、彼の教説を右手で（とは上手に）提供するのだが、聴き手の中にはそれを左手で（とは

B

下手に)受け取る者がいると申しておりますが、* われわれもそのように、犠牲式や祭礼について先祖伝来のしきたりが立派に取り決めておいてくれたことを、誤ってそれとは違う受け取りかたをしないようにいたしましょう。そういう祭礼の決まり事も、われわれの理性的思考に対して開かれている、つまり理性的思考の対象とすることができるということは、その決まり事そのものから推断できます。例えば、年のはじめの月の一九日に、ヘルメスの祭がありますが、* その時人々は、「真理は甘きもの」と唱えながら蜂蜜といちじくを食べます。あるいは、物語の中でイシスはお守りの帯を締めていますが、それは「言葉は真理なり」という意味を表わしているのです。* ハルポクラテスにしても、未熟な神とかほんの子供の神とか豆の神様とか考えるのはよしましょう。むしろ、人間が神々について抱いている考えのうちで、未熟で不完全で不明確な考え、それの面倒を見、戒める神、と考えるべきでしょう。だからこそ彼の像は、指は口に当てているのでして、これは口数をへらして沈黙することのしるしです。* そしてメソレの月に人々は豆のお供えをするのですが、その時「口(舌)は運、口(舌)は神」と唱えます。エジプトの植物の中で最も尊いとされるイシスの聖樹はペルセアという木ですが、これはその実がハート型をしていて、葉が舌に似ているからです。* 人間が生まれながらに授かってい

るものの中で最も神聖なものは理性、とくに神々について理性的に思考する能力であり、また、これほど大きな、幸福への原動力もありません。ですからわれわれは、神託を求めてここデルポイを訪れる人に、神を敬う心を厚くおもちなさい、謹んでめでたい言葉をお言いなさい、と申すのです。ところが大方の人は、お祭の行列のような、「恭(うやうや)しく口をお慎みあれ」とわざわざ触れられるようなところで、ばかばかしいことをして、そうなればあとはもう、神を冒瀆することと甚だしいことを言ったり考えたりしてしまうのです。 D

神々の誕生と死

六九　しかし神に奉仕する犠牲式の中には、憂鬱で暗くて悲しみに満ちた儀式もあります。で、もし昔から定まっている式次第をないがしろにするのは宜しくない、また神々についての教えを折衷したり、不当な疑念を抱いてごちゃごちゃにしたりすべきではないとしたら、こういう場合どうすればよいのでしょうか。ギリシア人もまた、エジプト人がそういう厳粛な儀式をやっているのと同じようなことを、しかも同じ時期に、いろいろとやっております。例えばアテナイでは、テスモポリア祭の時に、女たちが土下座し、*ボイオティアでは女神アカイアのお社を移動させ、その祭を「悲しみの祭」と呼んでおります。これは女神デメテルが娘ペルセポネのハデス下向(げこう)を嘆く祭なのです。*これが行なわれる月はプレイアデス

（すばる）の（沈む）頃、種蒔きの季節で、エジプト人はアテュルの月、アテナイ人はピュアネプシオンの月、ボイオティア人はダマルティオスの月、と呼んでおります。テオポンポス（前四世紀）はこう申しております（ヤコビ『ギリシア歴史家断片集』断片三三五）、西の方に住んでいる人々は冬をクロノス、夏をアプロディテ、春をペルセポネ、と考え、そう呼んでいる、そして彼らは、クロノスとアプロディテから万物が生まれると信じている。[*] しかし東の方の住人であるプリュギア人は、神は冬は眠り、夏に目覚めて起きると信じ、神を眠りにつかせるにも、目覚めさせるにも、バッコスの祭に似た狂乱の祭を行なう、またパプラゴニア人は、冬の間神は縛られて閉じ込められている、春になると身をふりほどいて動きはじめるのだと信じている、

E

F

ハルポクラテス

というのです。* 七〇　季節というものを考えてみますと、実りがかくれて見えなくなってしまうということからも、こういう暗い祭礼が生まれてきたのではないかと思われます。実りというものを昔の人は神とは思っておらず、むしろ神の賜物、野蛮で獣のような生き方をしないようにするために、神様が下さる必要で大切な贈り物だと考えていたのでした。木から実りがすっかり見えなくなり、本当になくなってしまうのが見える、ちょうどその季節に、自分たちは細々とながら、せちがらくまた別の種子を蒔きます。それが最後まで育って実を結んでくれるかどうかは不確かなまま、手で地面を掻いて掘り、また土をかぶせ、こうして種子を地下にかくしつつ、死んだ者を弔い哀悼するのと同じようなことを、一所懸命にやっていたわけです。379A そしてよく、プラトンの書物を買うことを「プラトンを買う」と言い、メナンドロスの作品を上演することを「メナンドロスを舞台にのせる」と言う、あれと同じように、本当は神々そのものではなく、神々の贈り物、神々のなさったことだのに、それらに、自分たちが頂いているお恵みゆえに尊敬し崇めている神の御名そのものをあてがってしまうのです。B ところが後世の人々が、何とも教養のない話ながら、これをそのまま受け継いで、実りがたどる経過や、生きるために必要なものが、あると思っているとなくなってしまうということを、無知というか無学と

いうか、神々のことにしてしまいました。そしてそれを神々の誕生と死と呼ぶだけならまだしも、神様が本当に生まれたり死んだりするのだと信じて、見当ちがいで不当で混乱した想念を胸いっぱいに詰め込んでしまいました。このように理性に反する想念がいかに見当ちがいなものかは、自分の目にもはっきりと見えているのにです。こうなりますと、あのコロポンの詩人哲学者クセノパネス(前六世紀)がエジプト人に向かって言い放ったという、「もし神々を信じているのなら、神々の死など嘆くな。もし嘆くのなら、そんな死ぬ奴を神とは思うな」、という言葉は言い得て妙だということになります。* そうでしょう。もし嘆きながら祈る、それも、実りがまた現われて自分たちのために熟してくれて、そして来年もそれを食べられ、来年もまた嘆くことができますように、と祈るのだとしたら、これはもう笑止の沙汰でしょう。

七一　**像や動物は神々ではないこと**

ところが実はそうではないのです。人々が嘆くのは実りをであり、祈るのは、その実りの原因であり与え手である神々になのです。死んだ実りに代わるべく、新しい実りをお与え下さいと祈るのです。ですから、これは哲学者たちの間でよく言われていることですが、言葉を正しく理解することを学ばない者は、その言葉が指しているものの扱い方をも誤る、というのはまことに至言であると申せます。ギリシア人の中にも、神々の銅

C

像、画像、石像、あるいはその他の奉納された像のことを、像と呼ぶことを学びもせず、そう呼ぶ習慣もないままにそれを神と呼んで、やがてのことに恐れ多くも、アテナイの独裁者ラカレス(前四―三世紀)が女神アテナの衣服を脱がせた*の、シュラクサイの独裁者ディオニュシオス(一世)が金髪のアポロンのその髪を切った*の、ローマのカピトリウムのゼウス(ユピテル)が、内戦の時焼き殺された*のと言い出す始末ですが、こういう人たちは、自分が神様の名前を神様D
と思うことによって生ずる見下げはてた見解を、自分の内に引きずり込み受け入れてしまっていることに気がついていないのです。

エジプト人もこれに負けてはいないのでして、彼らが崇めている動物と神様の関係で同じ誤りを犯しております。ギリシア人はこういう場合正しい言葉使いをして、鳩はアプロディテの聖鳥であるとか、蛇はアテナの、烏はアポロンの、犬はアルテミスの聖獣であって、エウリピデスも言うように(断片九六八)、

「おまえは犬になるであろう、あの輝くヘカテの像のような」

というように申します。* ところがたいていのエジプト人は動物そのものを拝むのでして、動物を神様扱いするのです。その結果彼らは、神に捧げる儀式を、儀式だかその笑うべきパロディ

だか分からないものにしてしまったばかりでなく――実はこんなのは愚行の中でもいちばん罪の軽い方です――恐るべき思いなしがここから生じて、弱い人、単純無垢な人をとんでもない迷信に陥れ、頭の鋭い人や大胆な人の場合は、まったく神を認めないとか、その他野蛮きわまる議論に赴かせてしまったのです。ですから、こういうことに関する正しい考え方とはどういうものであるのか、ここで立ち入ってお話をするのは間違ってはいないと考えます。七二 神々がこういう動物に変身したのはテュポンを恐れてのことで、例えばイビスとか犬とか鷹の体の中に身をかくされたのだ、などというのは、どんな珍談・奇談、伝説をもしのぐばかげた話ですし、死者の霊魂で生きつづける限りのものが、これらの動物の中に生まれ変わるというのも、なぜ動物だけに生まれ変わるのか、やはり同様にとても信じられません。こういう話について政治的な理由説明を試みる人もありまして、その中には例えばこういう人もあります。すなわち、オシリスは大遠征軍を起こしたが、その時、全軍を多くの部分(ギリシア人なら連隊とか中隊とか呼ぶものです)に分け、そのおのおのに動物の姿の旗印を与えた。* そしてこれが、この旗印のもとに集まっていた人々の一族の者たちにとって、神聖で貴重なものになった、というのです。さらにこれとは別の説もあって、のちに王たちが戦いに征(い)く時、敵を脅す

E F 380A

ために、金・銀造りの動物の頭のついたかぶり物を戴いて出陣したところから起こったと説く人もいますし、さらに別の説もありまして、それによりますと、エジプトの王の中には、頭のいい、悪事にかけては思いとどまることを知らない王たちがいたが、そういう王の一人が、*エジプト人はおっちょこちょいで、変化や新機軸にはすぐ飛びつく、そして彼らの軍隊は、全員が一つことを思い、打って一丸となって事に当たる場合には、その巨大な兵力ゆえに無敵であり、戦わずして勝つが、ひとたび迷信を持ち込んで教え込むと、いつまでも収まらぬとめどのない不和対立の原因となる、と見たそうです。そこでその王はどうしたか、と話はつづきます。それぞれの地域民に、おのおの別々の動物を大切にして崇めよと命じたそうです。この動物たちは、たがいに敵意をむき出しに振舞い、しかもたがいに食らい合うように生まれついておりますす。そこで各地域民は、自分たちの動物を守り、傷でもつけられようなら大いに怒り、こうしてまったく気がつかないうちに、獣たちのいがみ合いに自分たちも巻き込まれ、その動物たちといっしょになって争うようになった、というのです。今日でも、リュコポリスの人々だけは羊を食べますが、これは彼らが神と信じている狼も羊を食べるからです。*これも現代の話ですが、オクシュリュンコスの人々は、キュノポリス(「犬の町」の意)の人々がオクシュリュ

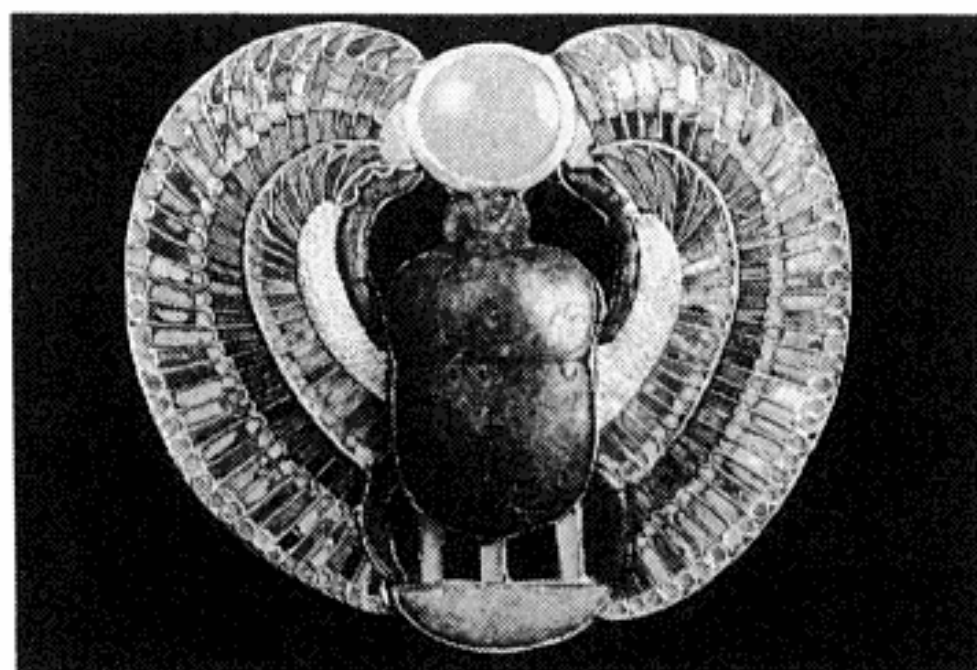
ンコス*を食べたというので、犬を捕らえて神への犠牲として供えた後、それを食べたというこ
とです。あげくの果てにこの両市民たちは戦争を始め、たがいに相手をひどく扱い、ついにロ
ーマ人が間に割って入って両者を罰しました。* 七三　テュポンの霊がこういう動物たち*に分け
与えられている、と多くの人々が言っておりますが、言わんとしているのは、一切の道理に合
わない、獣のような性質のものは悪しき半神(ダイモン)の部分を生まれながら持っているのだ
ということで、その悪しき霊をなだめ和らげるために、人々は動物たちを大切に扱い、さらに
は奉仕しているのでしょう。* もしひどい大旱魃(かんばつ)が襲って、命にかかわる病気や、そのほかいろ
いろ訳の分からない異常な災害をもたらしますと、祭司たちは夜陰に、物を言わず、そっと、
崇められている動物を何頭か連れ出し、まず脅します。しかしそれでも旱魃が収まらないと、
その動物たちを神に捧げて殺します。* これはその動物たちに宿っている半神の霊に対する懲罰
ということなのでしょうか、それとも、これ以上のものはない大災厄に対する大祓いなのでし
ょうか。いや、これはマネトが(ヤコビ『ギリシア歴史家断片集』断片二二)伝えていることで、エ
イレイテュイアの町では、人間が生きながら焼かれたそうですが、この人たちは「テュポンの
徒」と呼ばれ、遺骨は扇であおいで散らした由です。* しかしこれは公開で、それも一定の時

C

D

期、すなわち「犬の日々」、すなわち犬星（シリウス）が空にある時期（とは冬）に行なわれたものです。しかし先ほど述べましたひそやかな動物の犠牲は、不定期に、その時々の事情に応じて行なわれたので、ほとんどの人はそういう行事のことを知りません。例外はあります。それは埋葬の儀というようなことが行なわれる場合で、ほかの動物たちも列席者に見せてから、全員の立ち会いのもとでその動物たちを埋める、こうすることによって、今度はこっちからテュポE ンを悩ませてやり、がっかりさせてやれるのだと、当事者たちは信じているのです。アピスはわずかなほかの動物ともどもオシリスの聖獣だとされておりますが、あらかたの動物はテュポンのものです。そしてもしこれが正しいとすると、動物に関するわれわれの探究の向かう方向を示していると思います。すなわち、イビスや鷹やキュノケパロス（「犬頭」の意）という聖獣、それに当のアピス……（欠落）……のような、誰もが異論なく、一様に崇めている動物たちです。現にメンデスでは山羊のことをそう呼んでおります。

動物が崇められるのは象徴としてであること

七四　あとまだ、有益さのことと、象徴的な意味のことが残っております。このうちいずれか一方は何種類かの動物に見られますが、多くの動物にはこの両方のものが具わっています。現に、牛とか羊とか、イクネウモンといういた

スカラベ虫

ちに似たものなど、人の暮らしを助けてくれて有益であるところから大事にされていることは明らかです。ちょうどレムノス島で冠雲雀(かんむりひばり)が、ばったの卵を見つけてはつぶしてくれるので大事にされ、* テッサリアで、地面に大量の蛇が発生すると、こうのとりが現われてそれを全部片づけてしまう、というのでこうのとりが大事にされる(ですからテッサリアでは、こうのとりを殺した者は追放に処す、と法律で定められていました)ようなものです。* しかしエジプトコブラやいたち、それにカンタロスという甲虫(ふんころがし)などは、わずかながら何がしか、神々の力を連想させるものが見られるから大事にされるのです。* ちょうど、雨つぶに太陽の似姿が見えるというようなものです。いたちは耳で妊娠して口からお産をする、これは言葉の誕生を写したものだ、と多くの人々が今も信じています。* カンタロスには雌がなく、それですべての雄が球形にまるめた糞(ふん)の

381 A　F

鰐の神ソベク

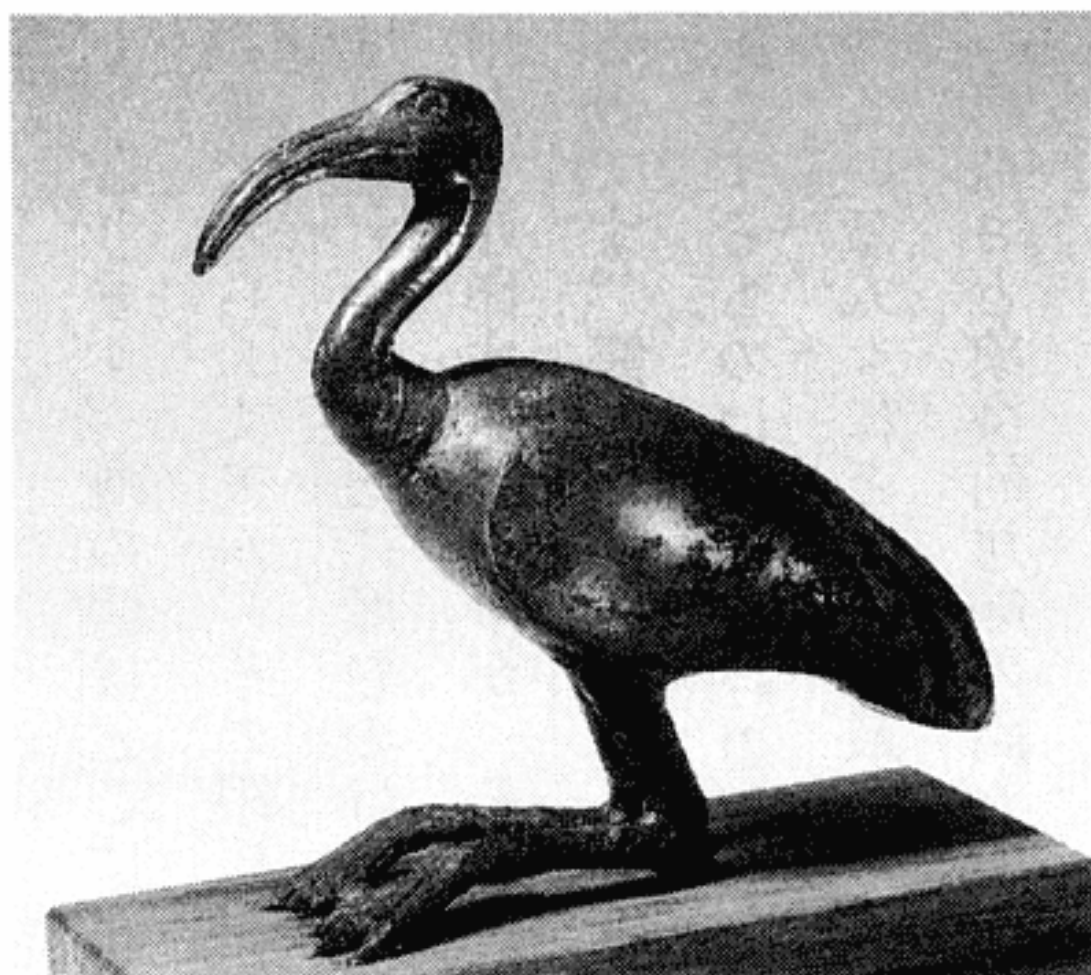
中に種子を放射します。この球は糞を後ろ向きに押して作るのですが、これはちょうど、太陽が本当は西から東へと進んでいるのに、それとは反対の方向に空を回っていると見えるようなものです。コブラは、年をとらず、足なしでらくに動くというわけで、星あるいは永遠になぞらえられました。*

七五　鰐にしても、信ずべき理由なし B に崇められたわけではなく、動物の中で鰐だけは舌がないので、これは神の模倣だとして崇められたのです。* つまり、神のお言葉は声を必要としない、「音をたてずにおみ足を運びたもうて、人間を正しくお導きなさいます」（エウリピデス『トロヤの女た

ち』(八八七―八八八)ようにというわけです。また、水中に棲息する動物の中でひとり鰐のみが、薄くて透明な、目を被う膜をもっていて、これを額から下ろしますと、外からはこっちが見ていることを見られずに相手を見ることができるのです。そしてこの点もまた最高神と一致しております。雌の鰐はどこに卵を産みつけたらよいか、ナイル河のどこまで増水するか、どこまでなら大丈夫か、その限界を知っています。鰐は水中に卵を産めず、かといって河からあまり離れたところに産むのは心配で、そこで来るべき事態を正確に感じとって、河の増水を利用して産卵するのですが、その卵を温めながら、ぬれないように、乾いているように気をつけるのです。鰐は六〇個の卵を産み、それだけの日数(六〇日)でかえします。そしていちばん長生きするものはそれだけの年数(六〇年間)生きます。この六〇という数は、天界のことに関わっている人々にとっては最も重要な尺度です。*

C

有益さと象徴的意味の両方のゆえに崇められている動物のうち、犬についてはすでに申しました(三五五B、三六八F)。イビスは毒蛇を殺しますが、人間は、イビスが自分自身で蛇の毒を洗い浄めているのを見て、はじめて下剤というものが必要だということを知ったのでした。*祭司の中でもとくに厳格に掟を守る人は、イビスが水を飲んだ所からだけ浄めの水を取ります。

D

イビス

イビスは古くて変質した水や、何かが混入している水は飲みもしなければ、それに近寄りもしないのです。また、この鳥が両脚を開いてふんばった時、それとくちばしとが正三角形をなし、白い羽に黒い羽が混じり込んでいるところは半月の形を表わします。[*] エジプト人が、このようにかすかにせよ、何か関係があるということを好んだということを、驚いてはならないでしょう。ギリシア人にしても似たようなもので、神々の絵を描いたり像を造ったりする時、このような「関係」を利用しているからです。例えばクレタ島のゼウス像には耳がありませんが、[*] 支配者として万民の上に立つ者には、誰の言うことも聞かないことこそふさわしいからなのです。彫刻家ペイディアスは、アテナ像の傍らに蛇を、エリス

のアプロディテ像の傍らには亀を置きました。処女たちには護衛が必要だが、結婚した女性には家に引きこもり、口を閉ざしているのがふさわしい、ということを表明しているのです。* ポセイドンの三つ又のほこ(triaina)は、海が、天、地に次いで三番目のもの(tritos)として彼に割り当てられたことを意味していて、彼の妃の名がアンピトリテであるのも、息子の名がトリトンであるのもそのためです。*

E

神の象徴としての数と図形

ピュタゴラス派の人たちは数や形に神々の名を付して飾りました。例えば正三角形には(ゼウスの)頭から生まれたと言われ、トリトゲネイアとの異称をもつアテナの名をつけました。正三角形は各角から下ろされる垂線によって分けられるからです。* また、一のことをアポロンと呼びました。アポロンとは複数を否定する名であり、* 一という数は単純だからです。二を「争い」または「敢為」(?)と呼び、三を「正義」と呼びました。* 不正をなすとか不正をなされるとかいうのは、不足と過多から起こるのですが、正義というのはみな同じということであって、不足でもない過多でもない、その中間にあるものだからです。テトラクテュスと呼ばれるものがあって、これは三六のことですが、よく言われておりますように、これは最も重い誓いを表わし、「世界」とも呼ばれました。* 最初の四個の偶数(二・四・

F

382A

六・八）と最初の四個の奇数（一・三・五・七）の和なのです。七六　そこで、もし哲学者の中でも最も有名な人々（ピュタゴラス派）が、生命のない、あるいは形のないものの中にさえ、神、または神らしいものを暗に指しているものを見いだし、そういうものに注意を向けないあるいは軽くあしらうのは宜しくないと考えていたとするなら、感覚もあり生命もあり、他からの影響も受け、みずからも性格を形成するもの（動物）の特徴は、なおのこと慕わしいものと考えるべきだと思います。だからといって動物たちを崇めるのではなく、その動物たちを通して神を見るべきでしょう。動物たちは本来神をよく映している鏡です。それに……〔欠落〕……万物を秩序づけたもう神の道具と考えるべきであって、一般的に言って、生命のないものの方があるものよりすぐれているだの、感覚のないものの方があるものよりすぐれていると考えるべきではない、たとえ世界中の金やエメラルドを集めようともです。と申しますのは、神がおわしますのは美しい色や形の中でもなく、磨きあげた光沢の中でもないからで、未だかつて生命にあずかったことのないもの、あるいは本性上あずからないものはみな、屍よりもなお浅ましい運命にあるのです。それに対して、生きていて、見ることができて、自分自身の中に運動の原因をもっていて、自分自身のことも他のことも知ることができるもの、これが、ヘラクレイトスが

(断片B四一)「これによってすべてのものが導かれる」と言った知性の流出を自分に引きつけ、その知性の分け前にあずかっているのです。* ですから、これらの動物にあっては、青銅や石の制作物ほどに神をよく写していない、などということはありません。銅像や石像はみな壊れたり汚れたりします。そして、本性上感覚も理解力もまったくありません。

C

イシスの多様さ、オシリスの単一さ

動物崇拝については以上のことを私はとくに認めておきます。七七　イシスがまとっている衣装は実にさまざまな色をしております(これはイシスの力が、何にでもなり、何でも受け入れる素材に関しているからなのです*――光と闇、昼と夜、火と水、生と死、始めと終わり、というようにです)。そこへ行くとオシリスの衣装には暗い色のものはなく、またさまざまな色合いがあるわけでもなく、つねに明快、輝きを思わせる色一つです。なぜなら、始めというものは何物とも混じっておらず、最初に思惟されたことはあくまでも最初であり思惟されたのであって、それ以外のものではないからです。ですからこのオシリスの衣装はただ一度だけ着せると、あとは脱がせて、誰にも見えないよう触れさせないようにいたします。これに対してイシスの衣装の方は何遍でも使います。見ることができ

D

るもの、手近なものは、使われることによって、そのたびにさまざまにその様相を変え外観を

変えるからです。思惟されるもの、純粋で神聖なものは、さながら電光のごとく、魂を貫いて光り、その一度だけ触れることも見ることもできる、そのようにして知るのです。ですからプラトンも(『饗宴』二一〇A)アリストテレスも、哲学のこの部分を最高の秘儀だと申しております。* 思いなしにすぎないもの、いろいろなものが混じってある状態、このありとあらゆる様相を呈するものを通り過ぎて、理性の力によってかの原初のもの、単一のもの、物質でないものへと跳び上がり、そしてそこにある純粋の真理にじかに触れるや、哲学の究極を、言わば秘儀の成就のようにつかみ得た、と信じる、そういう点で秘儀と申しているのです。

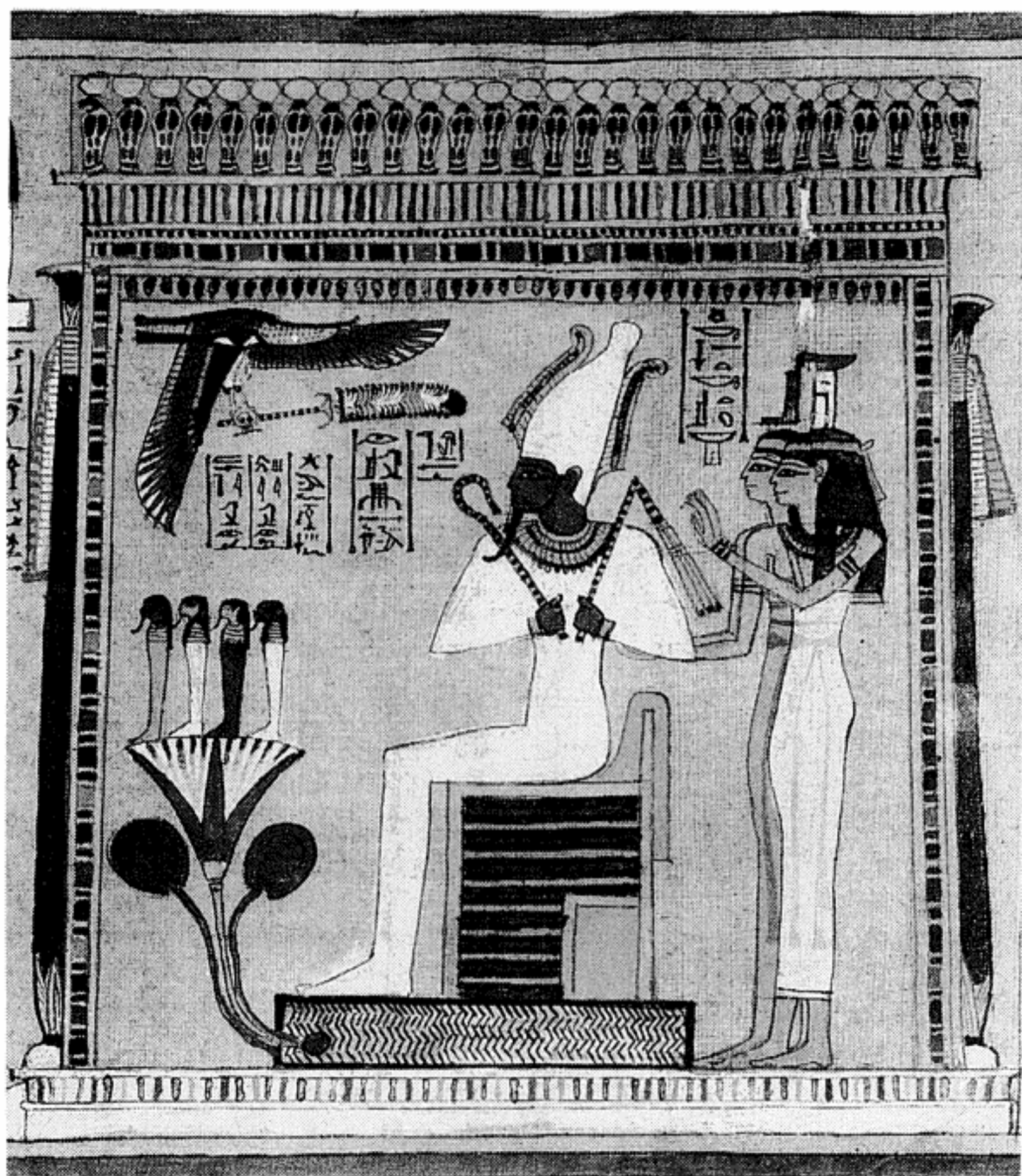
死者を支配するオシリス

七八　今日祭司たちが、これを言わなければ務めは果たせないと言いたげながら、たいへんに慎重に、ひそやかに、そっと教えてくれることがありまして、それは、このオシリスという神が、実は死者たちを支配し、その国の王となっているのであって、ギリシア人がハデスとかプルトとか呼んでいるものにほかならない、ということです。* しかし、この話がいかにして真実であるかは分かっておりませんので、民衆を混乱させるばかりで、人々は、この世の生涯の終わりに達したように思える人々の亡骸(なきがら)がかくされているこの地中・地下に、神聖にして浄らかなもの実はオシリスが住んでいると思いなす始末です。しかし

本当のオシリスは、この大地からは最も遠い所に在ります。清浄にして汚(けが)されず、一切の腐敗と死を受け入れるものを去っております。F 人間の魂はここ地上において、肉体や感情に包まれていて、神との関わりをもちません。ただ哲学のおかげで、われわれが思弁に励むその中で、ぼんやりとした夢・幻のようなお姿をかいま見るだけです。しかしその魂が肉体から解放されて、形のないもの、見えないもの、感情がなくて清浄の世界へと参りますと、その魂たちを支配し王たるものがこの神オシリスなのです。そしてオシリスに身をあずけて、魂たちは、人間 383A の筆舌にはつくしがたい美を飽かずうち眺め、あこがれるのです。そしてこの美こそ、昔の話の伝える、イシスが愛し、追求し、結合したという相手でして、イシスはこうして、この地上の世界を、天地創成に関わった限りの美しいもの善きもので満たそうとしたのです。

儀式で焚く香について

最も神にふさわしいことどもに関しては以上のように申し上げておきます。七九

先にお約束しましたように(三七二C)、毎日香を焚くことについても一言申さねばならぬとすれば、まず知っておかなければならないのは、エジプトの人々は健康のための対策に非常に熱心だということでしょう。とくに宗教行事において、身を慎んで清浄な暮らし B をするとか、厳格な食事の決まりを守るとかいう場合、神にお仕えするということばかりでな

オシリス

く、それに劣らず健康そのものも重要視するのです。[*] 清浄にして傷ひとつなく、そして一点のしみもないものにお仕えするのに、こちらが心身いずれにせよ、どこか痛むとか病んでいるとかいうのは宜しくないと、人々は考えるのです。そこで空気ですが、このわれわれが最もよく利用し、おつき合いしているものは、いつも同じ組成、同じ混ざり具合をしているわけではなく、夜間は密になって体を圧迫し、心を陰鬱にさせ、いろいろなことが不安で心配になり、まるで心に雲がかかって重くなったような気分になります。ですから人々は、朝起きるとまずいちばんに、脂（やに）を焚いて祈るのです。つまり脂から出る分泌物によって空気を清浄にし、体内で体に同化して弱くなってしまった吸気をそれによってあおり立てるのです。脂の焼ける匂いには、何かたいへん強烈な刺激があるからです。[*] 今度は正午には、太陽が大量の重いほどの蒸気を大地から無理やりに引き出し、それを空気に混ぜてしまいます。すると人々は没薬（もつやく）を焚きます。その熱が、あたりの空気をどろどろに濃くしていたものを溶かして散らすからなのです。現に医者たちも、盛大に火を燃やすと、濃い空気を薄くする効果があるので、流行病対策の一助になると考えております。その火は、糸杉、ねずの木、松のような、香りのよい木を焚くといっそう効果的です。とにかくアクロンという医者[*]は、アテナイで疫病が大流行した時に、患

C　D

者の近くで火を燃やせと忠告したので評判になったという話です。これで少なからぬ患者を助けたのです。アリストテレスが申しますには、* 没薬や花や草原の発散するよい香りは、かいで気分がいいだけでなく、健康にもよいのだそうでして、これは、脳というものがもともと冷たく凍てついたようなものなのだが、香りによって温かさと柔らかさが、静かにそこに広がっていくからだということです。没薬はエジプトではサルとも呼ばれていて、このサルという語の意味として最もよく言われているのは、「撒布すること」というのです。だとすると、これもまた、没薬を焚く理由について上に申しましたことの正しさを証明してくれることになります。八〇　キュピと申しますのは一六の成分を混ぜたものです。* ぶどう酒に蜂蜜に干しぶどうにキュペロス、脂に没薬に刺(とげ)のあるアスパラトスという草、セセリス、さらにスキノスの木に瀝青(れきせい)に灯心草にラパトン、それに加えて大ねずの木に小ねずの木、それからカルダモンにカラモス、これだけのものを混ぜるのですが、決して行き当たりばったりに混ぜるわけではありません。混ぜるのは調剤師ですが、彼が仕事をする時には、神聖な文書を朗読して聞かせます。* 一六という数については、これが正方形(二乗)の正方形(二乗)で、しかも、正方形を形成する数のうちでこの一六が、四辺の和の数値(一六)が面積の数値(一六)に等しい唯一のもの* であ

E

り、それゆえに歓迎されて当然だ、ということは言うまでもなく明らかでしょうが、当面の、香を焚くという問題に関して考えるならば、この数が何か重要な役割を果たしていると言うことはできないでしょう。ただ、ここに混ぜ合わせられるもののほとんどが芳香を放つ性能のあるものですから、そこからは甘い呼気が放出され、人間にとってありがたい蒸気を立ちのぼらせ、それによって空気が変化し、体の方も、香りの呼気に軽く静かに動かされて、眠気を誘う状態になり、酒に酔うわけではないのに、毎日の心労から来る悲しみや緊張感を弛めたり無くしたりしてくれます。またこのキュピの放つ香気は、人の心の想像をあずかる部分や夢を受け入れる部分を、さながら鏡のように、磨きあげて曇りをなくしてくれます。ピュタゴラス派の人々は、夜眠りにつく前に、竪琴の弦を弾いたそうですが、ちょうどそれと同じように、キュピの香りも、心の中の感情的で理性的でないものを引き付けて、癒してくれるのです。芳香というものはしばしば、感覚が衰えてきた時にそれを呼び戻すものです。が同時にこれもしばしば、感覚を鈍らせ、鎮めてしまうものでもあります。芳香は滑らかなために、その呼気が体内に拡散するからです。同様な理由で、医者の中には、食品から立ちのぼる呼気が、体内で内臓の中を滑らかにすべって触って回る、すると一種のくすぐりのような効果が生じて、眠気を催

F

すのだと説く人もいます。

キュピは飲み物または下剤としても用いられます。これを飲むと体内が浄化されるらしいのです。……〔脱落〕……これとは違って、脂、それから没薬は、太陽の熱を受けて植物がにじませる涙のようなものですから、太陽の活動の成果ということができます。しかしキュピに混ぜられる成分の中には、昼よりは夜を好むものがあります。それは、その本性上冷たい風や、蔭や露や湿気によって育つものです。日中の光はひと色で単一で、太陽自身も、ピンダロスが申しますように(『オリュンピア祝勝歌』一、六)「高空にひとり輝く」のですが、夜の空気は、あらゆる星から一つの点に向かって、種子のように流れ出す多種多様な光と力とで組成された混合物です。ですから、日中は、太陽のおかげで生まれた単一な組成のもの(脂や没薬)、夜間はいろいろのものが混じってできたもの(キュピ)を香として焚くのは、たいへんもっともなことなのです。

B

C

訳　注

二一1　プルタルコスはこのクレアに『烈女伝』も献呈している。その『烈女伝』のはじめの記述によれば、プルタルコスは彼女と、哲学が人の死に際して与えてくれる慰めについて長時間対話をしたという(岩波文庫の拙訳『愛をめぐる対話』一四四頁)。また次頁では「イシスにお仕えしている」と言われ、六八―六九頁では「お父上とお母上からオシリスの秘儀も授かって」と言われている。

〃11「おふたりの神」とは、すぐあとに言われているようにゼウスとポセイドンである。トロヤ戦争のとき、ゼウスはトロヤ方を、ポセイドンはギリシア方を励ましたが、トロヤ方の勢いすさまじく、ギリシア方は文字通り背水の陣を強いられることになったというくだり。ただしこの句を含む前後一六行ほどは、ホメロスの真作なりやいなやをめぐって論争が繰り返されている箇所である。

二三2　伝統的な「不死」という言いかたではなく、「永遠の生」という句は(キリスト教文書以外では)これがギリシア語文献における初出例だと思われる。しかし表現のうえではそうだが、プルタルコスの神観念がホメロスのそれとまったく異なっていたとは思えない。

〃12　異民族の神をギリシアのいずれかの神と同一視し、その名までもギリシア語で説明しようという傾向は古くからあった(例えばヘロドトス)。イシスがギリシア語だというのは、oida(「知っている」という

意味の動詞)のいくつかの変化形に見られる is- に関連づけてのことだろう。

一三14 テュポン(プルタルコスはエジプトのセトのことをこう呼んでいる)はギリシアの神だから、これがギリシア語だというのはあたりまえだが、語源が tetyphomenos だというのはいわゆる「俗語源説」(folk-etymology)であり、エジプトの神の性格をこれによって説明するのはこじつけである。しかしこういう説明法は、プラトンをはじめ多くのギリシア人が好んで(おそらくは多くの場合無理を承知で)使ったものである。

一四9 eisomenon は「知る」という動詞の未来分詞に由来する。しかしイシスの社を Iseion という、ということ自体がギリシアの習慣だから、エジプトに即する限り通用しない。

〃10 イシスの両親は普通はヌトとゲブ(ギリシアではレアとクロノスに擬せられている)だが、本書第一二節(三〇頁以下)で紹介される神話の中では、母親レアのいわば浮気相手ヘルメス(エジプトではトト)とされている。

〃〃 プロメテウスをイシスの父親とするのは、エジプトのヘルメス、すなわちトトが、多くの点でプロメテウスと共通していることに由来するのだろう。

〃13 イシスがミューズの中に数えられているのは、驚くべきことだが、これは彼女は文字、筆記を司る女神ハトホルと同一視されたためらしい。しかしそのイシスとディカイオシュネとの関連(これは事実あったらしい)の方は謎にみちている。

一五2 ヒエラポロイはおそらく儀式の監督に当たる祭司職で、神像、その神像を飾るもの、その他供え

物のための器などについて指図する人。ヒエロストロイは神のお召し物の指図をするほか、犠牲獣の選定なども委ねられていたらしい。

〃7「黒いどんよりした衣装」というのが何に由来するのかは不明。本書の第七七節（一三五頁）によると、イシスの衣装の色はさまざまであり、オシリスのそれはつねに明るい色だった。

〃10 とはつまり、哲学者らしく見せるために、髭を伸ばしのぼろをまといのという連中が少なくなかったということ。

〃11 すぐあとでも言われているように、これは祭司の身なりである。

一六14「五つ叉」の「生木」とは手と指のこと。「枯れたところ」とは伸びた爪。つまり神々を祀る宴の折には爪を切ってはならぬということ。

一八7 現存するプルタルコスの著作の中には、ことさらにこういう問題を扱った箇所はない。ヘロドトス『歴史』二、三七（松平千秋訳の岩波文庫、上、一八五頁）によると、祭司たちは清潔を重んじて、三日に一度全身の毛を剃るのでしらみがわかない。

〃12 プルタルコスは本書第三二節（六四頁）でも塩がタブーだと言っているが、エジプトの資料からは確証されていない由である。

〃〃 アリスタゴラスは前四世紀ミレトスの人。少なくとも二巻から成る『エジプト誌』の著作がある。この断片番号はF・ヤコビ『ギリシア歴史家断片集』による。

〃14 アピスについては本書の中で何度も言及されている。第二〇節（四五頁）ではオシリスの権化と言われ、

第四三節(八二一―八三頁)ではオシリスの魂の化身と言われているが、月とのかかわりも深く、月の光を浴びた母牛から生まれるとされている。

三〇10「王や殿様が……」というよりは、昼間は神殿奉仕の時、つまり神様が見ていらっしゃるからであろう。

〃12 このヘカタイオスは歴史家の祖として有名なヘカタイオスとは別人で、前三世紀のアブデラの人。エジプト史の著述がある。

〃14 このプサンメティコスはヘロドトス『歴史』第三巻で何度か言及されているプサンメティコスで、第二六王朝の最初の王(前七世紀後半)。ただし、プサンメティコス以前のエジプト王に飲酒・献酒の習わしがなかったというこのプルタルコスの発言には確証がない。

三二2 神々と戦って倒れた者とはセト(ギリシア風にいえばテュポン)のことで、犠牲獣というのはこのセトとその配下の者らの化身と見なされていた。

〃4 エウドクソスは前四世紀クニドスの人。天文学、哲学、倫理学などの分野で非常に幅広く活躍をした人だが、とくにエジプトとギリシアの宗教の習合に関心を寄せていた。

〃7 オクシュリュンコスはエジプト名ペネサという集落。一九世紀末にここから大量の古代のパピルス(聖書およびギリシア文学関係)が発見されて有名になった。

〃8 オクシュリュンコスとは「鼻のとがった魚」という意味だが、それが何であるかは不明。アイリアノス『動物誌』一〇、四六は、この魚はオシリスの傷口から生まれたゆえ神聖なのだと言っている。

〃13　トトの月の九日で、今の九月六日。この日に天地が創造されたといい、この日にナイル河の氾濫が始まるという。新年はこの日に始まり、ひと月が三〇日で一二か月、それに三〇頁で言及されている「付け加えの日」つまり閏日の五日を足して一年になった。

三14　パイアケス人は、漂着したオデュッセウスを救ってもてなして、故郷へ向けて送ってやる幸せの民。ホメロスでこれらの人々が魚を食べていないのは事実だが、彼らが意識的に魚を避けていたというのは言い過ぎである。

亖8　プルタルコスはこの話を、玉葱をタブーとする因縁話と解した上で、「到底信じられない」と言い、もっと合理的な説明を試みているが、イシスの養い子（その名がディクテュスだというのはプルタルコスのこの箇所だけであり、玉葱と関連づけられているのもここだけ）がナイル河（別の所伝では海）に落ちて死んだという話は流布していたようである。本書第一七節を参照。

亖1　ヘロドトス『歴史』二、一二五（松平千秋訳の岩波文庫、上、二四二頁）が、大根、玉葱、にんにくを労務者に支給するために消費した金額がピラミッドに記してある、とわざわざ言っているほどだから、広く一般に食されていたと思われる。しかしディオドロスの史書一、八九、四では、豆や玉葱については、食べる食べないの習慣はまちまちだと言われている。ユウェナリスがエジプト人の悪口を言っている風刺詩の中で（一五、九）「玉葱をかじるなど神に禁じられたこと」と言っているのは、玉葱崇拝のことを言っているらしく、総じて祭司が玉葱を嫌ったと言っているのはプルタルコスだけのようである。しかしプルタルコスが、この玉葱にせよ次の豚にせよ、忌まれるのは「月が欠けている時に栄える」か

らだと理由づけをしているのは注目に値する。月と関係のあるオシリスが死に衰える時に栄える、つまりオシリスの敵（テュポン＝セトの味方）と見なされているのである。

二四5　テュポンが豚を追っていたらオシリスの遺体に行き当たったというのは、豚がテュポンを彼の敵であるオシリスへと導いたということ。ここでも豚がオシリスの敵と見なされているわけである。なお第一八節（四〇頁）を参照。

〃10　メイニスというのは前三〇〇〇年頃、第一王朝最初の王。最初の王だから、彼以前のエジプト人の原始的な単純な生活を、文明に浴した生活に転じた最初の王。簡素な生活をよしとし、贅沢な生活を堕落と見る対照の仕方がエジプトにあったかどうかは分からない。

〃12　テクナクティスは第二四王朝の王。たしかに賢明さと勇敢さで名をあげたらしいが、相次ぐ侵入者との戦いによってエジプトの存立が危うくなったこともあったようである。

二五6　スピンクスは通常獅子の体に人間の頭をもつ怪物。ギリシアでは女性だがエジプトではつねに男性。はじめは死に神的な神格、のちに魔よけとなる。プルタルコスがここで強調している「謎かけ」という特徴がエジプト起源のものであるかどうかはよく分かっていない。

〃9　サイスの守護神はネイト、そのネイトが一方ではアテナと同一視され、他方ではイシスと同一視されたのである（本書一一一頁を参照）。

〃11　女神が、過去のもの今のもの未来のものすべてが私である、と言っているということは、自分が万物の（そしておそらく「時」の）創造者だと主張していることになる。後半の「死すべき人間の……」はも

ちろん性的な連想をもっていて、女神の不可侵性を強調したものだろうが、この句がなぜ、前半の厳粛な句にじかにつながるのか、奇妙な感じがする。これは、この女神が性の結合によらない創造者であることを表明するものだという説もある。

〃12　マネトは前三世紀ヘリオポリスの祭司。ナイル河口セベンニュトスの人。ギリシア式の名はマネトス。年代記風の『エジプト誌』をギリシア語で著し、その断片が残っている。

二七9　戦車は戦いの道具で戦闘の象徴、とすれば「物を食べながら戦おうと思うな」「二つのことを同時にやるな」の意か。

〃〃　無計画にその日暮らしをするな。一日分の食糧だけでなく、もっと先までの計画をたてて暮らせ、の意。

〃10「椰子の木を植えるな」の意味は不明。

〃〃「剣で火をかき起こすな」は、ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』八、一七に説明されていて、「偉い人を怒らせるな」ということだとされているが、この「倫理論集」中の第一のエッセイ(ただしプルタルコスの真作ではない)『子供の教育について』によると、「すでに怒っている人をいっそう怒らせるな」ということ。

〃12　ピュタゴラス派による数の象徴については、本書第七五節(一三三頁以下)を参照。一がアポロンだというのは、Apollon = A-pollon で、a- は打ち消しの接頭辞、pollon は「多い」という意味の形容詞の変化形の一つ。そこでアポロンとは「多ならざるもの」=「一」ということになるらしいが、これはむろ

んこじつけである。

二七14 この象形文字の記しかたの説明は正しい。

二八3 このオシリスの語源説明もいわゆる「俗語源説」である。

〃6 プルタルコスより一世紀早いディオドロス『歴史』(一、四八、六)にも同じ記述がある。ただしこの理由の説明はプルタルコスにしかない。

〃7 アリストテレス『動物誌』もプリニウス『博物誌』もこのようなことは記していないが、黄金虫は雄ばかりという、この一見奇妙な説は、古代では珍しくなかったという。

〃13 ヘルメスはトトのことで、トトは犬との関係はないが、本書第六一節にヘルマヌビス(Hermanubis)という呼び名が紹介されていて、これはヘルメスと死者の導き手Anubisが同一視された結果であろう。そしてアヌビスはしばしば犬の姿に描かれている。

二九12 第三一節(六三頁)では、オコスは剣ではなく、「驢馬」と呼ばれて軽蔑されている。また、第四四節(八五頁)とヘロドトス『歴史』三、二九(松平千秋訳の岩波文庫、上、二九九頁)ではオコスではなくカンビュセスがアピスを殺したとされている。エジプト人からオコスの名を奉られたペルシア人には二人いて、一人はダレイオス二世(前五世紀末)、もう一人はアルタクセルクセス三世(前四世紀後半)だが、ここで話題になっているのは後者である(プルタルコス『アルタクセルクセス伝』三〇、九参照)。

三〇12 プルタルコスの文面だと、ヘリオス(ラー)の妃であるレア(ヌト)が、クロノス(ゲブ)、ヘルメス(トト)と密通したことになるが、本来エジプトの所伝では、ヌトはこのように複数の夫をもっていない。お

そらくエジプトとギリシアの宗教が習合してのちの所伝であろう。

〃　〃　将棋というのはエジプト名でセネト、ギリシア語でペッティア(あるいはペッテイア)というもの。骰を振る点では双六に、石を使う点では碁に、しかしその石を桝目によって動かす点では将棋に似ている。ヘルメス(トト)が将棋をするというのは、エジプトの文献に明記されているわけではない。しかしプラトンも『パイドロス』二七四C(加来彰俊訳の岩波文庫、一三三頁)で、トトが算術と天文学、幾何学、将棋と双六を発明したと言っているので、これもエジプト・ギリシアの宗教の習合以後生まれた所伝であろう。この挿話に太陽暦と太陰暦の抗争を見る学者もある。

三二　1　閏日のこと、およびこの五日の閏日に神々が誕生したことは、すでに「ピラミッド文書」に見え、その他のパピルス文書にも見え、しかもその神々の誕生の順が、ここでプルタルコスが述べているのと同じであることから、非常に古い時代にエジプトに根づいていたものだと推定できる。

〃　10　最初に生まれた神がオシリスであったというのは、すべてのエジプトの文献で一致している。しかし誕生地がテバイ(ルクソル)というのは、明らかにこの都市がエジプトの支配的地位を獲得してから生まれたものであり、古い伝承では、デルタ地帯のブシリス(あるいはナイル中流域のアビュドス)と言われている。

〃　14　本書第三六節(七〇頁以下)に、オシリスと関連して男根崇拝のことが述べられていて、そこではこの祭がイシスの要請によって始められたとされているが、一つの伝承によると、そこで崇拝される男根神がパミュレスというのだそうで、そうだとすると、祭の名であるパミュリアはそちらから出た名称で、

パミュレという女性はさらにそこから作られた名前だろう(ただし、パミュレスというのがすでにオシリスの呼び名の一つだという説もある)。なおこのオシリスの祭の有様はヘロドトス『歴史』二、四八—四九(松平千秋訳の岩波文庫、上、一九三—一九五頁)に詳しい。ヘロドトスはオシリスを終始一貫ディオニュソスと同一視している。

三2「年長のホロス」というのはプルタルコスの誤解で、本当は「(より)大(なる)ホロス」ということ。実は「アルエリス」とはその「大ホロス」というエジプト語をギリシア語に音訳したものにすぎない。大ホロスについては九九頁以下を参照。

〃4 テュポン(セト)の凶暴性からして、その生まれかたも異常だったとされている。すでに「ピラミッド文書」にそれが見える。

〃5 最後に生まれたとされるネプテュス女神は、すぐ後に述べられるようにテュポンの妻となるのだが、はなはだ影が薄く、テュポンの妻として人為的につくられた神だとする説もある。この女神がアプロディテとも呼ばれるとプルタルコスは言っているが、通例アプロディテと同一視されるエジプトの神はハトホルである。また「テレウテ(果て)」という奇妙な呼び名については、第三八節では「地の果て」という意味だと説明され、第五九節ではそれとはまったく別に、「万物の素材のいちばん外側」という意味だと説明されていて、これらのことはかえって、ネプテュスがテュポンからの連想で案出された女神だとの印象を強める。ニケ(勝利)という別名があるというのは、ここ以外には言及がない。

〃13 エジプトの歴史はいわば「神代」から始まる。この後本書で何度も引用される歴史家マネトもパピル

スも、神々が王であった時代を特定し、年代まであげている。しかし王としてのオシリスが、人間を獣的な生き方から解放して文明をもたらしたという考えかたはギリシアのものであってエジプト本来のものではないだろう。

亖7「エチオピアの女王」とは乾いた南風のことだと、プルタルコス自身あとで(第三九節、七六頁)言っている。

亖1　タニス河口は、ナイル河のたくさんに枝分かれした河口のうち、いちばん東のもの。

〃3　アテュルの月とは一一月頃。オシリスの死のことは第三九節でもう一度詳しく述べられるのだが、そこでは、この月には北風がやんで南風が吹きはじめ、ナイル河の水がかれる等々と言われている。ところが実は、こういう現象はこの月にはまだ起こらない。一月以上あとのことだという。そこでプルタルコスのエジプトについての知識がいささか疑わしいとされることもある。

〃7　はなはだ突然という感じで、オシリス神話の中にパンとサテュロス(ギリシアではともにディオニュソスの従者)が登場する。Panikos(英語になってpanic)はふつう、昼寝の夢をさまされたパンが怒って人間にもたらす底なしの恐怖のこととされている。プルタルコスのこの陳述にはうるさい問題がある。まずケンミスの所在だが、それがプルタルコスが考えている通りデルタ地帯のブト付近とすべきか、それともナイル中流テバイ付近のケンモという集落をそれとすべきか、どちらにも決め手はないが、学者間では前者の説が有力である。次にオシリスにパンとサテュロスが随伴していることについても、エジプトのどの神をパンとサテュロスに見立てるにせよ、オシリス(の死)にこういう陽気な神々が伴うこと

自体不自然で、これはオシリスがディオニュソスと同一視されたことにより、ディオニュソスの随伴者としておなじみの両者をオシリスに押しつけたにすぎないとする説(これが通説)と、必ずしもそう断定することはできないとする説とがある。

三四11　コプトスはテバイよりやや下流のナイル右岸。愛する者の死を悼んで髪を切る風習はギリシアでは古くから行なわれているが、エジプトにはそういう風習はないようである。またコプトスという地名の由来をコプテインという動詞に求めるまではよいが(とはいってもこれはギリシア語である)、それが「喪失」を意味するというのは了解しかねる。

〃〃　オシリスを探すためにイシスが放浪するというのは、エジプトに非常に古くからある伝承。ただしこのプルタルコス版は、娘ペルセポネを探して放浪の旅をつづけ、エレウシスにたどり着いたというデメテルの話とよく似ている。つまりギリシア化されている。

三五4　メリロトンはクローヴァーの一種。嚙むと甘い汁が出る由。

〃8　この話は第三八節(七四―七五頁)でもう一度取り上げられているが、ここではイシスのオシリス探索の旅の途中に挿まれた異質の話になっている。三八節ではネプテュスには子ができないことになっており、これは彼女の夫であるテュポンが枯渇の神であるのと符合してふさわしくもあり、またこれがエジプトの古い伝承でもあった。それを、オシリスがネプテュスを犯したという形でこの挿話の中に組み入れたのは、テュポンのオシリスに対する憎しみを際立たせるためであろう。組み入れたのはエジプトの神話自身であってプルタルコスではない。プルタルコスはアヌビス(エジプト名インプー)にさして重要

な地位を与えていないが、これは古い重要な神格で、とくに死者を司る神として犬の姿で表象されている。その崇拝の中心地は、テバイとナイル河口のちょうど中ほどのキュノポリス(「犬の町」)である。

〃10 ビュブロスは昔のポイニキア(フェニキア)、今日のレバノンのベイルートのやや北にあった古都。古王国末期の第六王朝(前二四世紀以後)エジプトの影響を強く受けていた。プルタルコスの記述はこれだけだが、ルキアノス『シュリアの女神』七が、「毎年パピルスに乗って、一つの首がエジプトからビュブロスに着く。海を七日間で渡ってくるのだ、」と言い、「アドニスの祭というのがここで行なわれているが、実はこれはオシリスの祭である」と言っているのは、オシリスとアドニスの関係を匂わせている。またオシリスがヒースの木の下に埋められていたというのは、彼が非常に古くから樹木崇拝と関係していたことを思わせる。

三六5 アンブロシアはギリシアで神々の召し上がり物。こよなくよい香りがした。

〃9 マルカトロスとはたぶんフェニキアの神メルカルト(そうではないという少数意見がある)。アスタルテは東方世界で広く崇拝されていた地母神、豊穣の女神(したがって、時にはイシスがこの女神と同一視されることがある)。そこまではっきりしているが、なぜこの神と女神が王と王妃としてビュブロスに君臨しているとされるのかについては、いろいろの説明が提案されているが、どれも決定的ではない。サオシス、ネマヌスについてはもっと分からない。アテナイスというのがギリシアの女名前であることは確かだが、それとこのビュブロスの王妃の関係は不明。

〃12 指を口にくわえさせるのは、アフリカのアビシニア(現在はエチオピア)では、子供を養子として引き

取るときの儀式の一部だというが、その風習がどこまで遡り得るかは不明。赤児を火にかざすことについても、「ホメロス風賛歌」の中の『デメテルへの賛歌』二三九以下(逸見喜一郎・片山英男訳の岩波文庫『四つのギリシア神話』二九頁)にまったく同じことが言われているし、ほかにも多くの類例がある。燕への変身については、この鳥が聖鳥、とくに死者の守護神だという伝承があった、と言うにとどめておく。次の文で、王妃は自分の子が火にかざされているのを見て焼き殺されると思ったのだろうが、それにしても「不死な体質」を奪われたというのは、なぜだか分からない。

三九2「前に申しましたように」と言われても、思い当たるのは第八節(一三頁)しかないが、するとそこで言われている「養い子のディクテュス」とここの「王子マネロス」とをプルタルコスは同一視していることになり、しかも彼は、イシスのオシリス探索の物語を中断して、わざわざこの物語を述べているので、彼は本気でそう信じているわけであり、これはエジプトの宗教の専門家にはかなり厄介な問題になる。なぜなら、マネロスにしてもディクテュスにしても、エジプトの文献にはこういう名は出てこないばかりでなく、ギリシア人が書いたものにはしばしば出てきて、しかも困ったことにたがいに一致しないことを述べているからである。例えばヘロドトス『歴史』二、七九、パウサニアス『ギリシア案内記』九、二七、七、アテナイオス『食卓の賢人たち』一四、六一九Fなど。

四〇2 前注にあげたヘロドトスはさらに、このマネロスとはギリシア語でリノスというと言っている。そしてリノスとはエジプト人が歌った一つの歌だと言い、これは名前こそそれぞれ違うが、フェニキアでもキュプロスでも歌われているものだとも言っている。ギリシアでリノスといえば伝説的な詩人、あるい

はその作になる嘆きの歌である。ところが歌われるのは収穫の時。春に生まれ、夏に育ち、秋に実り、やがて死ぬ植物の生命を嘆くのだという。

〃3　ホロス(ホルス)はもとブトを中心とする下エジプトの主神。それがオシリスの子として、オシリス神話のなかに組み込まれた。ちなみに、このホロスと対立することになるテュポン＝セトは上エジプトの主神だった。

〃6　第八節(一四頁)を参照。オシリスの体を切断するというモチーフは、すでに「ピラミッド文書」に現われるので、ずいぶん古いと言える。しかしこの切断は、当然ながらオシリス殺害と同時に行なわれるのであって、プルタルコスでのように、一旦ひつぎに納めたのをあらためて一四にも切断するというのは、それだけ陰惨であり、テュポン＝セトをいっそう悪者に仕立てたことになる。

四一6　この話も一見単純なようだがめんどうである。男根を切り捨てたという点で、クロノスがウラノスの男根を切って海に捨て(て、その泡からアプロディテが生まれ)たというギリシア神話を思い出すべきなのか、それともここにあげられた三種の魚に関するタブーの説明と見なすべきなのか、それともまた、イシスが男根像を作って崇めたというところから、男根神としてのオシリス崇拝の起源の説明を読み取るべきなのか。この最後の点はエジプト側にも典拠がある。しかしプルタルコス自身が、これらのうちいずれを最も重視してこの話を紹介したのかは分からない。なお魚については、ストラボン『地誌』一七、二、四がナイル特産の魚を列挙している中に、これら三種の魚も含まれているが、名前だけで説明はない。レピドトスのことはヘロドトス『歴史』二、七二、パグロスのことはアリストテレス『動物

誌』五九八a一三、オクシュリュンコスのことはアテナイオス『食卓の賢人たち』七、三一二Bがそれぞれ触れているが、レピドトスは「鱗魚」、オクシュリュンコスは「尖り鼻の魚」という意味だという以外には何も分からない。岩波版アリストテレス全集の『動物誌』の上述の箇所についての島崎三郎氏の注によると、パグロスとは鯛の一種の由。

四一8 オシリスが死者の国から地上に戻ってくるというのは、まちがいなくギリシア風の考えかたによっている。たぶんオシリスが秘儀宗教におけるディオニュソスと同一視されたことの結果であろう。

四三2 トゥエリスは女神タウレトのギリシア語読み。語源的には「大きな者」ということで、古くから民衆に親しまれていた。結婚して河馬の姿をしている。それがどうしてオシリス神話の中に組み入れられてテュポンの妾(と言っているのはプルタルコスだけ)ということになったのかは確かには分からない。

〃3 エジプトの宗教では蛇は神聖な獣、あるいは神そのものと見なされるが、その神性は善悪いずれでもあり得る。ここではホロスという太陽神オシリスの子に対抗する悪しき神。

〃7 イシスがセト＝テュポンに対してやさしく振る舞ったというのは、エジプトの神話にもともとある謎めいた伝承。

四三1 次の節のはじめでプルタルコスは、(イシスがテュポンに対してやさしく振る舞ったのを怒って)ホロスがイシスの首をはねた、という伝承を拒否しているが、実はそれが本来の伝承だった。それをこのように穏やかなものに変えたのはプルタルコスであろう。頭上に牛の角を生やしているのは、伝統的にはハトホル女神だが、新王国以後(前一六世紀以後)ハトホルはしばしばイシスと同一視されたから、この

ような話が出来たのだろう。

〃5　ホロスとセトの争いの結末については、エジプトの伝承に二通りあって、一つは戦いによって決着をつけたというもの。もう一つは裁判によって支配権の帰属を決めたというものだが、プルタルコスはここでそれを併記しているわけである。裁判のヴァーションでは、はじめはオシリスとセトとが係争者であったのが、のちにホロスとセトの争いに変わっている。そしてその中でも、ホロスが庶子か嫡出子かが争点だったというのは新しいヴァーションである。

〃6　古い画像やパピルス文書の中で、イシスが死んだオシリスの骸の上に、鷹の姿でうずくまっているように描かれているものがあって、したがってイシスが死んだオシリスと交わったというのは古いエジプトの信仰の中にあったことだが、これはイシスが死せる神から精液を吸い上げて身ごもり、かくて神の世継ぎを産むという、神秘の信仰を表している。したがって、ここで生まれてきたハルポクラテス（エジプト名ホル・パ・ケレド、「子供であるホロス」の意）が早産だったの下半身が萎えていたのというのは、エジプトの信仰ではあり得ない。

四五1　これは後に第三一節(六二頁)で、エジプト人は神が好むものを供えるのではなく、呪われ者を神に捧げるのだと言っていることと関係があるかもしれない。しかしエジプト人の犠牲観の説明としては誤りである。

〃2　神殿についてここで言われていることは考古学的に立証できる。ただしプトレマイオス朝以後の神殿に関する限り、と言わなければならない。

四五6　もし「ディオキテス」という写本の読みが正しいとすると、この地名は、プルタルコスのこの箇所以外のどの文献にも出てこないことになる。そこで、これは写本の誤りで、ティニスと読むべきだと言われている。ティニスは後出のアビュドス付近の古い町。

〃9　アビュドスはもともとオシリス信仰の中心地。オシリスが一方では死者を司る神となり、一方では死んだ王をオシリスと同一視する傾向が生じたことが、ここに言われていることの究極の原因である。

〃10　アピスとはエジプト名をヘプゥという牡牛神。後にオシリス信仰に組み込まれ、アピスはオシリスの魂の化身だとされた。その崇拝の中心地が、今日のギゼの南方のメンピス。第二九節（五七頁）以下を参照。

〃12　メンピスという町がこういう意味で尊重されていたことは確かだが、語源もこうだというのは言いすぎである。

〃13　ピライはアビュドスよりさらに上流。今日のアスワンのすぐ南。プトレマイオス王朝期にはイシスの神殿で有名だった。ここで話題にされているのは、そのピライの町の真向かいにあるビゲという島。この島の「オシリスの葬礼」というのも、プトレマイオス王朝以後重んじられていたらしい。「鳥も魚も近寄らない」というのは明らかに誇張だが、同じくこの島のことをディオドロス『歴史』一、二二、三も述べていて、それによると、鳥や魚をここで捕らえることが禁じられていた。「メティデの木」が何であるかは不明。この木の名については写本間にかなりの異同があって、確定しがたい。ただしオシリスの墓と称される所が、みな鬱蒼とした木立に包まれていたのは事実である。

四六4　デルタ地帯のブシリスは、アビュドス、メンピスとともに、たしかにオシリス崇拝の中心地だが、はじめからそうだったわけではない。ブシリスの主神はアンジェティであり、オシリスはそれに次ぐ神にすぎなかった。

〃5　これはたぶんデルタの西北端の、現在アブシルと呼ばれている所。ここにオシリス神殿が建てられたのはプトレマイオス王朝になってからのことらしい。

〃8　ヘロドトス『歴史』二、六一（松平千秋訳の岩波文庫、上、二〇〇頁）も、ブシリスで行なわれるオシリスを悼んで行なう儀式のことを、「憚りがあるから言えない」と言っている。

〃10　ギリシアでは「不死」だということが、神々を人間から区別する唯一の点。だがエジプトではたしかに神々も不死ではない。

〃〃　神々を星と見なす信仰は、本来太陽神ラーをめぐる宗教の中心地だったヘリオポリス（「太陽の町」の意のギリシア語。エジプト語ではイウヌ。現在のカイロの北方）で盛んだったものだが、のちにオシリスがラーを吸収して一般に広まった。ただ、オシリスにしてもイシスにしても、死者を司ったり豊穣を司ったりしている点で地下神的な性格が強いわけだが、それが天上に昇って星になるというのは奇異である。熊とはむろん大熊座を指すが、ホロスがオリオンだというのは通常のエジプトの信仰とは違う（ふつうオリオンに擬されるのはオシリス）。プルタルコスは次節でもホロスがオリオンだと言っているので、これは彼の勘違いだろう。

四七1　テバイは今日のルクソル。クネプは蛇神。蛇は最も長命であり、また若返るとも考えられていた。

四七 4 以下第二四節までは、第二三節に出てくるエウヘメロス(Euhemeros)の名をかりてエウヘメリズム(Euhemerism)と呼ばれる神観——神とは偉大な人間への賛嘆に起源をもつものだという——に対する批判。

〃 11 オシリスが常勝の将軍だというのは、オシリスがディオニュソスと同一視されるようになったのち、ディオニュソスからオシリスに帰せられることになったもの。

〃 13 カノボスも、ギリシア神話がエジプトに輸入され、オシリスがディオニュソスと同一視されるようになってから、オシリスに関係づけられた一例。もとは、アガメムノンの乗船の船長とも、金羊毛皮を求めて遠征したアルゴ船の船長ともいわれている人物。

四八 2 これは諺としてよく使われる言いかたで、文献上最古の例はヘロドトス『歴史』六、一三四(松平千秋訳の岩波文庫、中、二七八頁)。「動かすべからざる」とは手を出して動かしてはならぬということで、それを動かすのは神を冒瀆することになる。

〃 7 レオンは前四世紀のマケドニア人。エジプトの神話をすべて人間の物語と解して説明した。

〃 12 エウヘメロスは前三〇〇年頃の著作家。出身地メッセネについては、シシリー島東北端のメッセネだという説と、ペロポンネソス半島西のメッセネだという説とがあるが、後者が有力。前頁の注で述べた「エウヘメリズム」という神観のもとになった説は、彼の『聖記』という著作(Hiera Anagraphe)にある。この神観は、ここでプルタルコスが苦々しい調子で非難せずにはいられなかったほど普及していた。王が死ぬと神になるという、ヘレニズム時代から広まった「支配者崇拝」の風潮と関係があると考える

べきであろう。

咒1 パンコンとは、エウヘメロスがインドの近くにあると称した島で、そこで彼はこういう銘文を発見したのだと言っている。ペロポンネソス半島西岸にトリピュリアという地方はあるが、それとここのトリピュリア人の国は無関係だろう。

〃2 セミラミスは伝説的な女王。ディオドロス『歴史』二、四―四〇に詳しく伝えられている。インド以外の全アジアとエジプトを征服したというが、有名なのは「空中庭園」。バビロンの女王サンムラマットがモデルになっているというのが通説。セソストリスについてはヘロドトス『歴史』二、一〇二―一一〇(松平千秋訳の岩波文庫、上、二二一―二二六頁)と、それをさらに詳しく脚色してディオドロス『歴史』一、五三―五八が伝えている。第一九王朝のラメセス二世のことだというが、別のエジプト王をこれに擬する人もある。

〃4 マネスも伝説的な王。文献では、ハリカルナッソスのデイオニュシオス『ローマ古代史』一、二七、一―三が言及しているのみ。

吾10 以下第三一節までは、オシリスやオシリスにからむいろいろなエジプトの神々の物語を、彼らはダイモン(鬼神・半神)であるという観点から解釈しようとする試み。ギリシア人がダイモンと呼ぶものは、ここでプルタルコスが解しているようなものには解消しきれないが、少なくとも次に列挙されている人々の、カッコ内にあげた著作に関する限り、彼の理解は正しい。しかし他方、エジプトではオシリス、イシス、セト＝テュポンなどはつねに主要な神であってダイモンではない。したがって以下は、これら

の神々のギリシア的理解の仕方を示したものということになる。

五一5 ギガンテスやティタネスも通常はダイモンとは呼ばないが、プルタルコス(や同時代の知識人たち)にとっては、神は崇高なものでなければならず、しかるに神話が伝えるこれらの神々の行状は崇高さに欠けているゆえ、ダイモンと呼ぶことになったのだろう。ティタネスはウラノス(天)とガイア(地)から生まれた一二人の原始の神々。ところがこのウラノスが横暴な支配者となったので、末子のクロノスがウラノスの男根を切り落として支配権を奪った。その時流れた血から生まれたのがギガンテスである。ここで「無法な振舞い」とプルタルコスが言っているのは、その父神の男根切断の一件のこと。

〃〃 ピュトンはデルポイの地を支配していた大蛇神。蛇形の神は地下神であり、それに対してアポロンは光のもたらし手。新しい天空の神。このアポロンがピュトンを退治してデルポイの支配者となり、神託を告げることになった。

〃6 ディオニュソスが自分の崇拝を広めようと各地を訪れた時、あちこちで激しい抵抗に遭った。それに対してディオニュソスはきわめて惨い仕方で罰した。その最も有名な例が、エウリピデスによって『バッコスの信女』として劇化されている。

〃〃 穀物の女神デメテルは、娘ペルセポネを恋した冥府の神ハデスが、彼女を地下の国につれさってしまったので、行方不明となった娘を探して世界を放浪した(そしてこの放浪の末行き着いた所がアテナイ西部のエレウシスで、そこから有名なエレウシスの秘儀が行なわれるようになった)。

〃14 ここでプルタルコスが言っているのは、「神」(theos または Dis)という語をもとに作られた形容詞は

つねに褒めことばだが、「ダイモン」(daimon)にもとづく方は、褒めことばになることもあるにはあるが、非難の気持をこめて使われることが多いではないかということ。以下の三例は、それぞれその場にふさわしく訳し分けたが、原文はみな daimonië(「おお、ダイモン的なものよ」というのが原義)であり、ホメロスではつねに(ダイモン的、つまり人間の常では考えられぬ、という気持をこめて)、驚きとともに相手を非難する場面で使われている。

吾11 左・右、偶数・奇数で価値の高低が区別されているが、アリストテレス『形而上学』第一巻、九八六a二四以下によると、これはピュタゴラス派の考えに基づいている。なお第四八節(九〇―九一頁)を参照。

吾3 「と言われております」(原文は phasi. つまり「と人々は申しております」)となっているが、この「人々」というのが問題になる。第一に、訳注二一2で述べたように、セト＝テュポンは(本来ナイル上流地域で主神だったのだが、同じく主神の地位を譲らぬホロスと対立し、その対立の様相のままオシリス神話に組み込まれたために)悪・野蛮という性格が強調されることになった。この「人々」はそれを知っていて、しかも認めている人々でなければならない。第二に、ダイモンという性格づけはプルタルコスがオシリス神話の解釈のためにギリシアから持ち込んだものだが、この「人々」はこの解釈を認める人々でなければならない。もし第一点だけならば、多少怪しくはあるが、「人々」はエジプト人・ギリシア人のいずれでもあり得るが、第一点・第二点の両方に合致する人々といえば、ギリシア人でしかない。

五四11　この「祭儀」の原語は teletai であり、teletai は通常、ただ儀式というよりは秘儀を意味する。神の事跡を演ずるという形の儀式の例はエジプトの宗教にも多いが、ギリシア人が teletai と呼んでいるようなものが行なわれていたかということになると、学者の意見は一致していない。

〃14　ヘラクレスの父はゼウス、母は人間の女性アルメネだから、まさに「半神」。そして妻デイアネイラが彼の愛をつなぎとめるべく贈った下着が仇となって彼は死に、火葬壇に載せられたが、雲が舞い降りて、雷鳴とともに彼を天に運び、彼は不死になった、つまり神になったという。ディオニュソスも父はゼウス、母は人間の娘セメレなので「半神」だが、彼がプルタルコスが言う意味でのダイモンと信じられたことはなく、つねに神である。

五五3　サラピス(セラピス)については次節以下でもう少し詳しく述べられている。訳注五六8も参照。

〃4　ペルセパッサとはペルセポネ、つまりプルトンにさらわれたデメテルの娘だが、イシスはよくデメテルと同一視される。それをペルセパッサと同一視するのは、アルケラオスが最初に言ったかどうかは不明だが、ペルセパッサがプルトンと結婚したというギリシアの伝承を前提していることは確かで、そうするとさらに、オシリスをプルトンと同一視することが前提となる。

〃5　ポントスのヘラクレイデスはプラトンの弟子。幅の広い関心をもった多作家。

〃8　以下の話をプルタルコスは、『陸上動物と海中動物ではどちらが賢いか』というエッセイの終わり近くでも(九八四A－B)、いるかの賢さを説明しつつ、ここ以上に詳しく紹介している(しかしそこでも、ここ同様、話の出所を明かしていない)。それによると、ここに言う「さんざん苦労した末」というの

は、二人を乗せた船が風のため意に反して漂流していると、いるかが現われて彼らを導いた、ということを指している。同じ話をタキトゥスも、「エジプトの祭司たちが語るところによると」と言って紹介している(『歴史』四、八三―八四)が、プルタルコスのとは少し違っている。夢の中でプトレマイオスが若く美しい男から、ポントス(黒海南岸)にある像を運びまつれ、この像は王国に幸福と名声をもたらすであろう、と告げられる。感動したプトレマイオスは、エジプトの祭司にこの夢のことを問うてみたが、彼らはポントスのことは知らなかったので、かねてより、エレウシスの秘儀をアレクサンドレイアでも執り行なうべく呼び寄せておいたアテナイ人ティモテオスに問うと、彼ティモテオスはポントスへ旅したことがある者に尋ねて……、となっている。

吴3　マネトについては訳注二五12を参照。

〃8　サラピス(セラピス)とは、もとは今日のカイロ近郊のメンピスの主神プタハの化身として尊崇を集めていた聖牛アピスの信仰を、オシリスが吸収してウシル＝ヘプゥと呼ばれていたもの。それをプトレマイオス朝のギリシア人が、エジプト人・ギリシア人のいずれからも崇められる神によって国家統一を図るべく、オソラピス、さらにセラピス(サラピス)と呼んで、国内に広めたのである。

𠀋4　このあたりはテクストの損傷甚だしく、本訳の底本として用いたTeubner版は判読を断念しているので、ここでは凡例にあげたBudé版や解説にあげた研究書を参考にしてとにかく訳した。――パウサニアス『ギリシア案内記』九、三四に、ハデスの国から戻ったヘラクレスをカロプスと呼ぶ、と記してあって、この娘の名カロポスはそこから取られたものだろうが、起源は不明。またアイアコスをヘラク

レスの子としているのはこれが唯一の出典(ふつうはゼウスの子)。ただし、ヘラクレスがハデスの国を訪れたことや、アイアコスが死者を裁くことは、古くからギリシアの伝説中に根を下ろしていることではある。小アジア・プリュギアに起源を発すると称される宗教関係の文書があったらしいことは、いくつかのギリシア・ローマの(前一世紀以後の)文献から知ることができるが、その実態は不明。

一五九6 プルタルコスは、『クレオメネス伝』と『アラトス伝』を書くにあたって、このピュラルコスを(一方では批判の目を向けつつも)かなり利用している。ここで彼がピュラルコスを非難するのは、サラピスという名はエジプト語の「サイレイ」から導き出すのが正しいと彼は思っているのに、ピュラルコスがそれをギリシア語の「サイレイン」によって説明しているからである。

〃10 パウサニアス『ギリシア案内記』一、一八、四は、セラピスの神殿で最も大きいのはアレクサンドレイアにあり、最古のものはメンピスにある、と言っている。一方ディオドロス『歴史』一、九六、九は「レテの門」と「コキュトスの門」のことに触れているが、これはヘカテの神殿だと言っている。さらに、レテもコキュトスも本来冥界の門ではなく、三途の河と同じような河である。また、ここで青銅が音をたてる、あるいはそれを手で押さえて響かないようにするというのが、サラピスとの関係でどういう意味をもっているのかについては、諸説まちまちである。

一六〇2 この語源説明は例によってこじつけであり、プルタルコスもこれを認めているわけではなさそうである。しかしそれでも「まだしもまともな」と彼が言うのは、「走る」という語に「運動」という意味を認め、不動の大地が中心にあってその周りに天空が回転し、そこに「運動するもの」としての神を見る

というストア派の考えかたを見ているからだという説がある。

〃5　五六8の訳注を参照。

〃7　エジプト語に「サイレイ」という語がある(おそらくコプト語)のは確かであり、それが「喜び」を表わすことも確かだが、それがサラピスの語源だというのは間違い。むしろ、前の文に述べられている「大方の祭司たち」が教えていることの方が正しい。一方でこのように正しい知識をもっていながら、プルタルコスがなぜわざわざ「サイレイ」を持ち出したのかは謎である。

〃10　ハデスの語源は今なお確定されていないが、プラトンが『クラテュロス』で否定した「見えない」(a-eides)に最も関わりがありそうだというのが有力な見解。「ねんごろになった者」だの「好意的な者」だのいう説明は、死を死と呼ぶのを忌む婉曲語法。

〃12　アメンテス(エジプト語でアメンテト)は「地下の国」ではなく「西」。ただしコプト語の文書の中には「地下の国」となっているものもあり、プルタルコスの「取りかつ与える者」という語源説明もそのコプト文書から説明できるという。

六二13　ここに列挙されているテュポン＝セトに対する軽蔑、とくにセトと驢馬の結びつき(それはけっしてセトが本来驢馬神だったということではない)は、比較的新しいエジプトの文書からも確認される。金がタブー視されていること(これは奇異なこと)については、いろいろ説明が試みられているが、いずれも決定的ではない。

〃14　ピュタゴラス派が偶数に悪の因子を認めていたことについては訳注五二11、および九〇―九一頁を参

照。しかし「五六の約数で偶数の日」とは（ここはテクストも疑わしいが）何のことか分からない。また、三二頁で言われていた「閏の第三日にテュポンが生まれました」というのが、これとどう関係するのかも分からない。

三六 4 ピュタゴラス派が、単に万物には数があるばかりでなく、万物は数そのものであると考えていたのは有名なことだが、その考えかたを神にまでおよぼしたのはずっと後のことと考えられている。エウドクソスは前四世紀の人だが、その頃のピュタゴラス派にもすでにこのような考えかたが見られるというのは、意外なことである。

〃 6 牛の犠牲についてはヘロドトス『歴史』二、三八以下（松平千秋訳の岩波文庫、上、一八五頁以下）を参照。

〃 10 エジプトの宗教における犠牲の意味についての、このプルタルコスの発言は半分は正しいが半分は誤り。犠牲に供される獣がセト＝テュポンや彼に関わりをもつ（化身ではない）、したがって敵視される動物だという点では正しいが（それでも全面的にそうだと言い切れるかどうかには問題がある）、動物は不正を為した人間の生まれ変わりだという信仰はエジプトにはない。プルタルコスはいわゆる輪廻転生を信じていて、そのために犠牲獣のことを誤解したものと思われる。第七三節（一二七頁）には、ここととは違う犠牲獣観が述べられている。

〃 11 ヘロドトス『歴史』の、上の注にあげた箇所にすぐつづく二、三九（松平千秋訳の岩波文庫、上、一八六頁）によると、外国人とはギリシアの商人のことである。

六三 4 オコスについては訳注二九12を参照。

〃10 ヒエロソリュモスはイェルサレムの、ユダイオスはユダヤの名祖として作られた人物名。「七日間」という日の区切りかたはユダヤのものであり、エジプトならば一〇日を単位とする。しかしとくに注意を惹くのは、プルタルコスと同時代のタキトゥス『歴史』五、二―四に、このプルタルコスのとほぼ同じ話がやや詳しく述べられていることである。ヒエロソリュモス、ユダイオスの名のほかに、モーセに導かれてエジプトを退去したユダヤ人が、驢馬の群に助けられた、などと記されている。

六四 3 現存する文献では、アレゴリーという語を最初に使ったのはプルタルコス『詩の聴きかた』一九Eである。ホメロスの詩を、今なら「アレゴリー風に」解するというところを、昔は「hyponoia 風に」解する、といった、と言っている。ここにあげられている Kronos は Chronos, Hera は aëra などというのは単なる語呂合わせにすぎず、アレゴリーとしては粗末なものだが、ヘパイストスの誕生を、空気が火に変ずることだと言っているのは、ヘパイストスが本来火の神であったところからも当然と言える。

〃8 ナイル河との連関では、この説明は一応つじつまが合っているが、東が顔なら北は左、南が右のはずで、これは奇妙であるのみならず、エジプト人は西を右、東を左と見ているから、これは明らかに何かの間違い。

〃12 エジプトで塩がタブーとされていることはプルタルコスにとっては驚くべきことだったようである。例えば岩波文庫の拙訳『食卓歓談集』一六五頁以下を参照。本書の第五節(一八頁)や『食卓歓談集』の上記の箇所では、塩は食欲を増大しすぎるからという健康上の理由があげられているが、ここでは一転

して「テュポン＝セトの泡だから」とされている。

六四14　この一見奇妙に聞こえる断言は正しい。ただし、こうしたタブーにもかかわらず、エジプト人はかなり好んで魚を食してもいた。

六五7　河馬をセト＝テュポンと結びつけて厚顔無恥と評するのは、プトレマイオス朝の文書にしばしば見られることであり、現にプルタルコスも第五〇節（九四頁）ではその考えを援用している。しかし父を殺して母を犯すという、オイディプスもどきの所業は、いずれのエジプトの文書にも現われない。

六六1　オシリスは水の源であり、テュポンは灼熱だと言われると、エジプトよりは、例えば、万物の源は水だと言ったタレスのような、イオニアの哲学を連想する。しかしエジプト人がオシリスは水だというとき、彼らはもっと具体的な水を念頭においている。例えばナイル河というようなである。しかし最も奇異に思えるのは、一方で海だとされているテュポン＝セトが、なぜ灼熱で乾燥なのかということ。しかしエジプト人にとって海とはまず荒れるもの、不毛なもの、つまりわれわれが思うほど砂漠と矛盾しないものなのだという。

〃10　ヘリオポリス（「太陽の町」の意）で崇められているのはもちろん太陽神ラーであり、ムネウィスはラーの聖獣である。アピスはメンピスに崇拝の中心をもつオシリスの聖獣で、崇められかたの点でムネウィスはアピスに次ぐというのは、政治的重要度において、ヘリオポリスがメンピスに次いだということの結果である。

〃11　エジプトの国土が黒かった（周りの砂漠を彼らは「赤い」と見た）というのは、いろいろな文献に述べ

られていること。ケミアとは、エジプト語のケメトをギリシア語化したもの。

六七4　太陽や月が舟にのって空を渡ると信じられているのは事実だが、この説明はおそらく間違いだろう。ギリシア語では馬車が、エジプトでは舟が主要な交通手段だったから、ギリシアのヘリオスは馬車で、エジプトのラーは舟で、空を渡ったと言えば十分。

〃11　世界の周辺を巡り、またすべての河川や泉の水の源だというオケアノスに本当に対応しているのは、オシリスよりはヌンである。テテュスはオケアノスの妻。しかしここで、例によって俗語源説までふりかざしてテテュスをイシスと同一視したのは、ギリシアではテテュスはオケアノスの妻であり、エジプトではイシスはオシリスの妻だから、テテュスはイシスと同じ性格の女神でなければならないと、プルタルコスが考えたからだろう。

〃14　Apousia, synousia という二つのギリシア語が、どういう関連でここで引き合いに出されているのかは不明。

六八4　Hyes はディオニュソスのあまり有名でない呼び名の一つ。はっきりした意味を与えているのはプルタルコスのこの箇所だけ。彼はなんとかしてオシリスと水、湿り気の関係を強調しようとしている。

〃9　ヘラニコスは生年からいってもそうだが、著作の上でも、単なる年代記的な記録から歴史記述への橋渡しをして、ヘロドトスの先輩となった人。Hysiris という発音は、頭の'h'という帯気音を除けば、オシリスよりはむしろ元のウシルというエジプト名に近い。

〃11　三三頁と三四頁、および訳注四一8を参照。

六九1　当然クレアの両親もオシリスの秘儀を授かっていたことになる。しかし、プルタルコスの時代にギリシア・ローマに広まっていたのは、オシリスよりはサラピス(訳注五五3・五六8参照)の秘儀だから、ここでプルタルコスが述べているのもそれであろう。現に彼は、すぐあとで「アピスを葬る際」の儀式を引き合いに出している。

〃5　テュルソスはディオニュソスの祭祀には欠かせぬもの。きづたとぶどうをからませ、先端に松かさをつけた杖。

〃8「牛の姿のディオニュソス」はいろいろの文献やその他の資料に現われるが、いずれもヘレニズム時代以後のものである。しかし、いわゆるオルペウスの宗教に関係があったといわれていて、したがって、出典は新しくても、伝承そのものはかなり古い起源のものと考えられる。

〃11　冬の間死んで地下の国に眠っている神を、春の到来とともによみがえらせる。らっぱで神を目覚めさせ、地下の国の門番の歓心を買うために仔羊を供える。このように死んでまたよみがえる神の信仰は、いたる所に見られるが、すぐあとに述べられるディオニュソスのよみがえりは、これとは意味が違う。

〃　このソクラテスは有名なソクラテスとは別人で、前一世紀のロドス島の歴史家。

〃14　ティタネスの物語もまたオルペウスの宗教で重んじられる神話である。(ティタネスそのものについては訳注五一5を参照)ゼウスは女神ペルセポネと交わってザグレウスを生んだが、ティタネスらが彼を八つ裂きにして食う。ゼウスが怒ってティタネスを焼き殺すと、その灰から人間が生まれた(ゆえに人間にはわずかながら神の性質が宿っている)。一方ゼウスはザグレウスの心臓を呑み込み、セメレと

交わって、あらためてディオニュソスを生んだ、という話。したがってオシリスの死と再生の話に似ているとはいえ、同じなのはセト＝テュポンがオシリスを八つ裂きにするところまでである。四〇―四一頁を参照。イシスは八つ裂きにされたオシリスの体を集めて埋葬している（エジプト本来の神話では、イシスはただ埋葬したのではなく、ふたたび生命を与えている。しかしゼウスがザグレウスの心臓を呑み込むというギリシアの話と完全に一致するわけではない）。

七〇5　リクニテスというのもオルペウスの宗教に関わるが、今度のディオニュソスは、八つ裂きにされるディオニュソスではなく、らっぱで目覚めさせられるディオニュソスに関係している。この箕（または籠）というのは、収穫を入れて運ぶもので、生命力や実りの象徴。それに赤児のディオニュソスをのせて運んだ、と昔の注釈家が述べている。デルポイで、オルペウスの宗教とディオニュソス信仰の何らかの習合が行なわれて、そのために、プルタルコスの先ほど来のディオニュソス像が多少混乱しているのだと考えられる。

七一1　プルタルコスのこの象形文字の読み方は正しい。しかし肝腎の草が藺草（いぐさ）なのか菅（すげ）なのかほかの草なのかが分からない。「多産にすること」(kyesis) というのは Xylander（一六世紀ドイツの、プルタルコス研究の基礎を築いた学者。凡例を参照）による修正で（写本では「運動」となっている）、今日ではこの修正がすべての刊本に採用されている。

七三6　このアポピス征伐の話をエジプトの所伝によって記すとこうなる――太陽神ラーは天の東と西で、闇と地下界の強力な支配者である大蛇神アポピスと戦うことになった。ラーにはホルスとセト、イシスと

ネプテュス、オシリスその他の神々が加勢した(アポピスがラーの兄弟だというのはエジプトの所伝にはない)。プルタルコスがラーをゼウスと見なしているのは、このラーが本来のラーではなく、新王国時代にラーがアメンと習合して生まれたアメン-ラーだったからであろう。ゼウスがオシリスを養子にしてディオニュソスと名づけたという根拠は不明。

一七三10 新王国以後、風(呼吸)は生命の原理だというわけで、アメンと同一視されていた。

一七三4 前一世紀のシシリーのディオドロスの『歴史』第一巻は、ヘロドトス『歴史』第二巻、プルタルコス『イシスとオシリス』とともに、エジプトに関してギリシア人が遺した基礎資料だが、そのディオドロスの一、一七、四にもほぼ同じ記述がある。ただし「ケノシリス」という名はプルタルコスにしか見られず、エジプトの現存する文書中にもこれに当たるものがない。

〃6 プルタルコスの『ギリシア・ローマの似た話』三〇七Cに、『イタリア史』を著わしたアレクサルコスというのが出てくるが、そのアレクサルコスとこのアレクサルコスが同一人物かどうかは不明。

〃8 アルサペスとは、ナイル上流のヘラクレオポリスで崇められていた羊神に冠せられる形容詞ヘルエシュエフのことで、語源的には「湖上のもの」ということ。その形容詞がオシリスに吸収され、語呂合わせで「男らしい」という意味に解されたのも事実。ただしそのアルサペスがゼウスとイシスの子だというのは典拠不明。

〃10 ヘルマイオスについては、たぶん一世紀の人だろうという以外、何も分かっていない。

〃〃 エパポスとはギリシア神話で、ゼウスに愛されて牛に変身したイオが、ナイルの河岸で生んだ子で、

のちにエジプト王となる。ムナセアスは小アジア南岸パクラの人で、エラトステネスの弟子。神話に関する著作あり。

〃12　アンティクレイデスはアテナイの人で、神話中の人物や実在の人物の、放浪の後の帰郷談を集めた作品や、アレクサンドロスについて書いたものがある。

七四5　シリウスが洪水を起こすというのは、シリウスが朝東天に現われる頃洪水になるということで、それは夏。太陽が獅子座に接するのも夏。ナイルの氾濫は、上流では六月末頃から、河口付近では九月末頃から。そして翌年の四月に最も水位が低くなる。

〃9　Horos はホルスをギリシア語化した形であり、Hora はギリシア語だから、この語源説明はもちろん成り立たない。しかしプルタルコスはそうまでしてでも、ホロスの「調整作用」を強調したいのだろう。

〃13　訳注三二5を参照。

七五4　三五頁および訳注三二5を参照。

〃6　これも三五頁および訳注三五8を参照。

七六9　三四頁および訳注三四3を参照。その訳注に記したような問題があると同時に、以下に述べる儀式次第について、牛の像を引き出すとか、「オシリスが見つかった」と歓声をあげるとか言われているわけだが、これと九七頁で述べられている「オシリス探し」の儀は、同じものなのか別のものなのかも問題になる。とくに、ヘロドトスが『歴史』二、一三二(松平千秋訳の岩波文庫、上、二四五頁)で、「この牛は毎年一度……引き出される」と言っているのを思い出すならば、プルタルコスのこの二度の記述は

同じ儀式のことを言っているはずだということになり、そうなれば、訳注三四3で言われていることが正しいとすると、この儀式はアテュルの月ではなく冬至の儀式である。しかし他方九七頁の記述では、「オシリス探し」という呼び名以外には、ここの記述と共通する点がないから、別の儀式とも考えられ、プルタルコス自身別の話をしているようにも感じられる。ここの牛という語には冠詞がついていないから(ヘロドトス、および第五二節の牛にはついている)牡牛なのか牝牛なのか分からないといえば分からないが、イシスの像と言われているから牝牛に決まっている。とすれば、ヘロドトスの「一度だけ」というのが間違っていることになる。なおここにはエジプトの煩雑を極めた暦法の問題もからんでくるが、それについては「解説」で紹介するHaniの書物に詳しい考察が行われているので、それを参照。

七七8 ここのプルタルコスの記述は、エジプト側の記録と大筋において一致している。肥えた土、水、三日月等は、いずれも「よみがえり」の象徴である。

〃13 四二―四三頁および訳注四三2を参照。

七八2 ヘロドトス『歴史』二、一一―一二(松平千秋訳の岩波文庫、上、一六七―一六八頁)も同じことを述べている。

七九8 七六頁に引用した第五二節のすぐ後の箇所(九七―九八頁)では、むしろオシリスが太陽でイシスが月だという説を是認している。実は、多くのギリシアの文献でそのように言われているが、これに対応するエジプト側の確証はない。一方テュポンが太陽だという場合、オシリスの「湿り気」「水」との対照において、太陽の灼熱だけが考えられているのだろうが、これもエジプト自身の考えかたには関わりが

ない。七七頁では、三日月形の像というのが述べられ、二四頁では、テュポンが満月の夜にオシリスの棺を見つけたと述べられていたが、オシリスと月を関連づける、あるいは同一視するのは、プトレマイオス王朝以後のエジプトの文献にしばしば見られることである。また月が動植物の生殖や成育を促すというのは、ギリシアにもエジプトにも共通した考えかたである。

〃13　このセトという名の意味の探索は九三頁、一一一頁でも繰り返されるが、これもいわゆる俗語源説である。

〈一〉1　ここではヘラクレスが、太陽としてのセト＝テュポンと同一視されている。プルタルコスが何を根拠にこう言っているのかは不明。これに対して、ギリシアのヘルメスは月との関わりをもたないが、ヘルメス＝トトというエジプトの神はたしかに月に関わっている。

〃10　縦四マス×横四マスの正方形、縦三マス×横六マスの長方形を書いてみればすぐ分かる。4×4＝16＝4＋4＋4＋4であり、3×6＝18＝3＋6＋3＋6である（ただし、同じ長方形でも、縦二マス×横九マスだとこうはいかない。2×9＝18、2＋9＋2＋9＝22となる。

〃13　以下オシリスを月の神と見立てているわけで、確かにエジプトにもこの考えかたはあるが、それはオシリス本来のものではない。

〈三〉7　この文句は七四頁でも引用されていた。訳注七四5を参照。オンピスという名については諸説あるが、「解説」に紹介するGriffithは、オシリスにかかる形容詞としてしばしばギリシアのパピルスに現われるオンノプリスの別形で、意味はここでプルタルコスが言っている通りだと述べている。

〈三〉13　ナイル河の水位の上昇に関するこの数は、プルタルコス以外では、彼より一世代後の弁論家アリステイデスの『演説』三六、一一五にだけ見られる。しかしこの数はすべて七の倍数になっていて、明らかに月の満ち欠けから割り出されたもので実測ではない。なお、ヘロドトス『歴史』二、一三以下(松平千秋訳の岩波文庫、上、一六八頁以下)にも、ナイル河についての詳しい考察が示されている。

〈三〉3　アピスについては訳注四五10・五六8、それと五九―六〇頁を参照。またヘロドトス『歴史』三、二八(松平千秋訳の岩波文庫、上、二九八頁)もアピスについて言及しているが、そこでは月の光によってではなく、「天からの光」となっている。一般に、アピスを月と関係づける証言はギリシアとローマに多いが、エジプトにはなく、関係があるのは月ではなくて太陽である。

〃5　訳注八一13を参照。エジプトの文書では「オシリスが左の目に入った」となっており、その「左の目」とは月のことであり、月はただちにイシスではない。プルタルコスの言葉はオシリスとイシスの性的結合を語っているが、その際オシリスを太陽、イシスを月と見るのがマネトが言いはじめたことであり、それ以後も主としてギリシアでの受けとりかたである。次の「月を両性具有者だと(エジプト人が)信じている」というのは誤り。次節の月食の説明でも、月がイシスに見立てられているが、これについてももちろん同じことが言える。

〈四〉11　三五頁と訳注三五8を参照。ネプテュスが地下、イシスが地上、アヌビスがその境界線という考えかたを立証する材料はエジプトにはない。

〈五〉2　ヘカテは人間にいろいろな幸をもたらすと信じられていた古い女神だが、夜の女神となり、ひいては

地下界と関係づけられるようになったのは、比較的後のこと。しかしその結果、ヘカテは「地下界のものでありながらオリュンポスの神」でもあることになった。アヌビスについては前注を参照。

〃5 アヌビスをクロノスと考えると、なぜ「だから」すべてを自分の中に身ごもるとも考えられるのかは不明。「身ごもる」(kyo) ゆえに「犬」(kyon) だというのは単なる語呂合わせ。

〃7 カンビュセスがアピスを殺した話は、ヘロドトス『歴史』三、二七—三〇(松平千秋訳の岩波文庫、上、二九七—二九九頁)も伝えていて、「カンビュセスはそのたたりで発狂した、とエジプト人は伝えている」とつけ加えている。ただし犬のことには触れていない。

〈六〉3 デモクリトス(あるいは彼の師レウキッポス)が提唱し、エピクロスも従った、いわゆる原子論。万物を究極的に構成している原子(atomon)には生命がないばかりでなく、固有の性質もない。それにもかかわらず世界にさまざまなものがあるのは、その原子の位置・並びかた・形の違いによるという。

〈八〉7 マゴイ(マゴスたち)とは本来ペルシア人に支配されたメディア人の部族名だが、すでにヘロドトスにおいても、一般にペルシアの賢人、僧を指す呼び名になっている(新約聖書の、誕生したイエスを拝しにベトゥレヘムを訪れたという「東方の博士たち」というのもマゴイである)。ゾロアストレス(ツァラトストラ)は伝説的なペルシアの宗教改革(創始)者。ギリシア・ローマ世界では、彼をトロヤ陥落の五千年前の人とか、プラトン生誕の六千年前の人とか言いならわしていたようだが、今では前一二〇〇年から一〇〇〇年頃の人と見るのが常となっている。

〃8 ホロマゼス(Horomazes)とは、アヴェスタの経典におけるアフラ・マズダ(Ahura Mazda)が、アカイ

メネス朝時代にAuramazdaと呼ばれたのを、ギリシア語化したもの。アレイマニオス(Areimanios)はAngra Mayniu のちにAhrimanと呼ばれた「悪霊」のギリシア語化。

〈八〉10 ミトラ(Mithra)はアフラ・マズダによって生まれたものであり、アフラ・マズダの協力者であって、プルタルコスがここでミトラに与えている「仲介者」という地位は、ペルシアのではなく、それを受け入れたローマで与えられたもの。

〃14 この供物のこと、またオモミという草の名については諸説があるが、確かなことは不明。ただしオモミとはアーリマンに供えられるアモムムという草の別名だとする説が有力。また草を狼の血に浸すのは、地下の神、暗黒の君への供物としては当然という説もある。

〈九〉3 動物を善なるものと悪なるものに二分する考えかたは、ペルシアに実際にあった。「水ねずみ」が何物であるかは不明。

〃7 ホロマゼス、すなわちアフラ・マズダが創造した六柱の神は、徳の六項目であって抽象的。そのおのおのは、ここでプルタルコスが紹介しているところと、前半は一致しているが、四番目以下は少し違って、「おのれを空しうして天に仕える心」「健康」「不死」となっている。

〃11 アヴェスタの経典では、アフラ・マズダは「高みの中の高み、すなわち太陽のおわす所に」座を占めているし、また、太陽と昼の光は、アフラ・マズダの顕現だと見なされていた。さらに、アフラ・マズダが星を創造したということは述べられていない。すべての星の主であり見張り役であるというセイリオス(シリウス)は、ティシュトゥリアという星のことを指している。

〃〃 ホロマゼスとアレイマニオスがそれぞれ二四柱の神々を創ったというのは何に拠っているのか不明。したがって、それらの神々を卵の中に納めたというのも典拠不明。しかしアヴェスタの中に、宇宙を卵になぞらえ、殻を天空とし、卵黄を大地としている箇所がある。また、卵というとオルペウスの宗教の「宇宙卵」というのを思い起こさせるが、この両者の卵の関係は、重要な問題ではあるが、それほど明白ではない。

九〇2 アレイマニオス(アーリマン)が最後にはアフラ・マズダによって征伐されて、人間がみな協調して幸せになる、というのはたしかにペルシアの信仰だが、「一つの国、一つの言語」というところまでペルシアのものかどうかは分からない。ただし「一つの言語」というのは、旧約聖書『創世記』一一の有名な「バベルの塔」の逆の話だが、両方とも「一つの言語」を望ましい状態としている点では同じである。

〃 9 神が休息するというのも、旧約聖書の安息日を思い出させるが、アフラ・マズダにそのような伝承は伝えられていないようである。

〃 10 カルダイア人とはバビロニア人、アッシュリア人のこと。

〃 13 彼らの言う「惑星」には、水星・火星・金星・木星・土星のほかに、太陽と月が含まれて、計七個となる。もちろんこれが週の曜日の名前になる。善い星と悪い星の別はあったようだが、どの星が善い星でどの星が悪い星かについては一致した意見がない。

九一1 アリストテレス『形而上学』九八五b二三以下にもこの対照表が記されているが、そこにあってこの

プルタルコスにないのは「男性・女性」の対照。またアリストテレスにはなくてここにあるのは「等・不等」である。

九二3 アリストテレスがあげているのは形相と質料であり、質料は形相の対立概念ではあるが、だからといってこのように「否定」と呼んでしまうのは一足飛びである。アリストテレスは、この宇宙の存在に階級を考えていて、最下位のものは形のない質料、最上位は永遠の思惟の運動で、これはあらゆる質料から自由な形相(これは他から動かされることなく他を動かす神である)。そしてこれらの中間にいろいろな割合で形相を分有している質料、とされている。

〃5 今日のプラトン研究者によれば、『ティマイオス』のこの箇所をこのように解するのは誤りである。次の『法律』からの引用(これはふつうはこの通り認められている)についてさえ、誤りを指摘する研究者もある。

九三6 オシリスが宇宙の支配者だというのはオシリス崇拝の一部をなすが、それを言い表すのに、「知性」であり「理性」であると言ったり、この宇宙の中にオシリスの「映像」がみちみちていると言ったりするのは、プルタルコスの「プラトニズム」のためである。

〃9 ティタネスはギリシア神話で、ウラノス(天)とガイア(地)が結婚して生まれた一二神(訳注五一5・六九14を参照)。その中には抽象概念を擬人化したものもあるが、概してギリシア人に征服された先住民の神に由来し、自然の力を神格化したものもある。それゆえ「没理性的」とも言われるわけである。

九四4 ここでベボンと表記されているのは、バビュ、バブウィ、ババなどと呼ばれているエジプトの禍の神

であるが、これは本来セトとは別の独立した神格であり、これがセト＝テュポンと同一視されたのは、プトレマイオス朝以後、セトが悪しき神として固定されてからのことである。

〃6 セトと鰐が結びつけられたのもプトレマイオス朝以後。ヘロドトス『歴史』二、六九（松平千秋訳の岩波文庫、上、二〇五頁）によると、エジプトには鰐を神聖視する部族と敵視する部族がある。河馬については訳注六五7を参照。

〃12 イシスがフェニキアのビュブロスから舟で出たことは第一六節（三八頁）で述べられていたし、第一八節（四〇頁）では、イシスがパピルスの舟で沼地を渡ったと記されていた。また、第三〇節（六一頁）では、河馬ではなく、「縛られた驢馬の絵を押した菓子」となっていた。

〃13 前々注であげたヘロドトス『歴史』では、エレパンティネ付近の住民は鰐を食うとされているが、ここにいうアポロノポリス（現在のエドフ）は、そのエレパンティネとテバイの中間のナイル左岸の町である。

九五4 二七頁を参照。しかし、以下につけ加えられている説明はギリシア的であって、エジプトのものではない。

九六6 七九頁および訳注七九8を参照。そこでもテュポンを太陽だとする説が紹介されていたが、しかしそこでは、ここでのように、その説を非難してはいなかった。

〃11「オシリス賛歌」と名づけることができる文献には、実にさまざまな種類、さまざまな時代のものがあって、ここでプルタルコスが引用しているのがどれであるかは特定しがたい。

九六 11 「太陽のふところに抱かれた」は、直訳的には「太陽の腕の中の」。新王国時代のいわゆる「アマルナ時代」(アメンヘテプ四世がここに都を定めた)の太陽像では、光線が腕になっていて、先端が手になっている。その太陽のふところに抱かれた神とはオシリス。

〃 13 第五五節(一〇一頁)を参照。そこではホロスが月と見なされている。

〃 14 太陽の「杖」という用語はエジプトの文献には出てこない。神シュウが両腕を伸ばして天の女神ヌトを支えている、というものだが、これは宇宙を説明したもので、ここの話のような、季節の移り変わりにかかわる神話とは違う。

九七 3 第三九節および訳注七六9を参照。

〃 5 エジプトにはこの名で知られている文献はない。ここでホロスと呼ばれているのは王のことだという説が有力である。たしかに、かなり古い時代から、王はホロスの化身だという信仰があって、王は民のために、民に先んじて犠牲を供える儀式を執り行なうのである。

〃 14 ここでは「セイリオス」はシリウス星のことではなく、「焦がす」という形容詞。それに男性冠詞(h)o をつけて「焦がすもの」の意、つまり太陽だと言っているわけ。むろんこれはこじつけにすぎないが、この種のこじつけはギリシアではかなり好まれていた。

九八 10 たしかにプラトンのこの箇所ではこういう言い回しが用いられているが、しかしこの宇宙の万物について、一つはモデルとして仮定され、つねに同一のものとしてあり、理性の対象となるもの(パラデイグマ)、もう一つはそのモデルの模写で、生成し、目に見えるもの(ミメマ)だと述べたあとで、さらに

もう一つ、「あらゆる生成の、いわば養い親のような受容者」を第三のものとして要請しているのであって、イシスの説明として述べているわけではない。むしろプラトンのこうした考えかたによってイシスのはたらきを説明しようとしたのは、プルタルコスの「プラトニズム」である。

〃11　プトレマイオス王朝以後の碑文にその実例が遺っている。

一〇〇4　ヘルメスがホロスは嫡出だとの証人になったことは第一九節(四三頁)にも語られていたが、それよりは、すぐ上でオシリスが純粋な理性と言われ、ここではヘルメスがまた理性だと言われていることの方がおそらく重要である。オシリスの理性(ロゴス)とは、神の創造の原理としての理性・言葉で、有名な『ヨハネ福音書』の「はじめにロゴスがあった」を思い起こさせる。ヘルメスの「理性」はもっと普通の理性だろう。

〃11「このホロス」といえば前節で述べられたホロスを指すほかないが、前節ではホロスは不完全だと言い、ここでは完全だと言う。それゆえ、前節のホロスは「年長のホロス」で、この節のはオシリスの子のホロスだと区別して考えるのが現行の読み方だが、するとやはり「この」ホロスという言いかたが問題になって堂々めぐりとなる。写本の誤りを想定するほかないようである。すぐ後に出てくる「コプトスのホロス」とは実はミン神のことだという説が有力で、エジプトの歴史のかなり早い時期にこの両神が同一視された結果だという。ミン神はもとコプトスを中心に信仰されていた豊穣神で、つねに勃起した男根をもった姿で描かれている。

一〇一11　以下においてプルタルコスは、プラトンが示した図式によって、ホロスやイシスの神観念の説明を試

みる。

一〇三 4 この三角形については、岩波文庫の藤澤令夫訳『プラトン　国家』下、一七五―一七六頁、および補注A四を参照。

〃 6 これは有名なピュタゴラスの定理だが、ここに述べられている数論全体がピュタゴラス派に発するものである。

〃 7 奇数を男性、偶数を女性と見なすのに基づく。

一〇四 1 今日の通念では、「最初の奇数」は一であろうが、ギリシアでは数とは多であって一ではなく、それゆえ一は奇数でないばかりか、数ですらない。

〃 3 この語源説明は例によってこじつけである。

〃 6 「文字」と訳した原語はgrammataであり、これは「文字」にはちがいないが、通常ギリシア語やラテン語のアルファベットを指す。そしてそのgrammataが二五字だと言っているところを見ても、プルタルコスはエジプト文字をアルファベット的な文字と理解していたと伺える。アピスについては訳注四五10・五六8を参照。ただし、そのアピスの生涯が二五年だったと、プルタルコスが事もなげに言っている根拠は不明。

〃 8 ホロスとミンについては訳注一〇〇11を参照。ミンの語源が「見られるもの」だというのは正しくない。

〃 13 ムトは太陽神アメンの妻だが、広く母性的なものを代表していたらしいから、多くの女神と同化して

いったイシスが、このムトをも吸収したことは大いにあり得る。アテュリとはハトホルのことであり、ハトホルとは「ホロスのすみか」であり、天空であるが、そのホロスはイシスの生んだ子だから、プラトンの洗礼を受けたギリシア人たちが、イシスとハトホルを同一視し、宇宙生成に関わった神と考えても不思議ではない。メテュエルの語意は「大洪水」「大水流」ということで、原始の水を意味し、その水から全宇宙が生まれる。したがって、プルタルコスがここで与えている意味は見当はずれではない。

一〇四6　カオス(chaos)というギリシア語は、後に「混沌」を意味するようになるが、ヘシオドスのカオスは混沌ではなく、「空間」であり、それもただの空間ではなく、大地と地下の深部(これがタルタロス。神に背いた者たちが落とされる場所)との間の空間で、暗黒にみたされている。したがってこのプルタルコスの説明は正しい(ただし、ヘシオドスのカオスは天と地の間の空間だという有力な異説もある)。

一〇五7　これはストア派の哲学者を指している。

〃13　心(ヌース)を形(エイドス)の宿る所と見るのは一応プラトン的ではあるが、現存するプラトンの著作にはそのような発言はない。プラトンの弟子筋の誰かがこう言っているのかもしれない。

〃14　ピュタゴラス、エピクロス、デモクリトスなどは女性も種子を出すと考えていたが、アリストテレスは、女性が発射するのは種子ではないと考えていた。アイスキュロス『エウメニデス』六五八以下には、母親は子を生むのではなく育てるだけで、生むのは父親だという、強引とも言えるアポロンの発言がある。

一〇七12　「この神」は男性形なのでイシスではなく、「イシスが育てて一体にした」神でしかあり得ない。ただ

し、「プラトンもアリストテレスも」その神には言及していない。

一〇八 2　本書のごくはじめの方、第二節ですでに、イシスという名を「知っている」というギリシア語の動詞から引き出そうとしていた。ここではそのイシスに「運動」という本質を認めようとして、かなり強引に「急ぐ」「運ばれる」と関連づけようとしている。

〃 4　「神」(theos) の語源(これもほほえましいぐらいこじつけである)によっても、「運動」と結びつけようとしている。

〃 7　今日ふつう採用されている『クラテュロス』のテクストのこの箇所では、ousia は essia あるいはosia (ともに古いドーリス方言の形)と言われていた、となっていて、essia は竈の女神 Hestia と、ousia は othein(「押す」という動詞)と関係づけられているのだが、プルタルコスの見た写本では、これが isia となっていたのであろう。

〃 14　これらに共通する語尾 -ia は、ギリシア語で、形容詞の語幹(ここでは kak- など)につけて抽象名詞を作る接尾辞であり、プルタルコスもそれを百も承知のうえでなおかつ、-ia を「行く」という動詞の語幹 i- に関係づけるというこじつけをやったのだろう。

一〇九 1　これまでにもプルタルコスはオシリスという名の由来を、何度か俗語源説によって試みていた(二八、六七—六八、七三、九五頁)。それらは俗語源説ではあるが、何らかの点でエジプト語の知識に基づいていた。しかしここのはまったくのこじつけである。プルタルコスのまじめさと、こじつけを百も承知のうえで人に教えようとする態度と、これは彼の内部でどう折り合っていたのだろうか。ただしこの傾

向はプルタルコスに限られるものではなく、例えばプラトンでもしばしば見られる。

〃4　ギリシアの宗教で、天上の神と地下の神の対照がつねに表面に表れていることは確かだが、ヒエロス、ホシオスという二つの形容詞の対照はそれとは別の問題である。ヒエロスと対照される場合のホシオスの意味は、ヒエロスが「あらゆる神に捧げられた」という意味であるのに対して、ホシオスは「神の掟によって許されている」「穢れのない」ということであり、ヒエロスが神を中心にして「神聖な」と言っているのに対して、ホシオスは人間について「神に認められている」「清らな」ということであり、したがって、場合によっては「聖と俗」の対照に似た関係にある。プルタルコスがここで、何を根拠にして「天上と地下」の対照としたのかは不明。

二〇1　エジプトの神トトが、ギリシアでヘルメス・トリトメギストス（「三倍偉大なるヘルメス」）と呼ばれ、いろいろな書物（主として神論、占星術、医術関係）の著者に擬せられていた。これらの著作はエジプトで、前一世紀から後四世紀にかけて徐々に集積したらしく、一括して「ヘルメス文書」と呼ばれるのだが、プルタルコスがここで「ヘルメスの書と呼ばれる書物」と言っているのが、その中のどれを指しているのか、あるいはそれどころか、はたしてその「ヘルメス文書」のことを指しているのかどうかすら、判定は意外にむずかしい。

〃6　イシスがシリウスだという見かたは、すでに四七、四八、七四頁でも述べられていた。Kyon（「身ごもる」という動詞の現在分詞、および「犬」という名詞）による語呂合わせは、八五頁ではまったく別の関連で行なわれていた。

二一6 ここでイシスと言われているのは、実は、二五頁で「サイスのアテナ」と呼ばれていた女神ネイトのことである。このネイトがアテナと同一視され、次いでイシスと同一視されたのである。エジプト人がギリシア名アテナをどう解していたかは知る由もないが、二五頁に言われていたような、「われはかつてありしもの、今あるもの、また向後あるならんもの」と宣言する女神ならば、万物の創造者として「自分から生まれた」者と呼ばれるのも当然である。

〃9 セトという名については、七九頁と九四頁および訳注七九13・九四4を参照。ベボンについても九三、九四頁を参照。スミュについてはいろいろの説明が試みられているが、確定しがたい。

二三9 セイストロン(ギリシア語)は、ラテン語の sistrum という形で広く知られたエジプト起源の祭具。そしてプルタルコスのこのギリシア語の語源の説明も、セイストロンの造りの説明も正しい。月の円環の中に四元を象徴する鈴がついているというのも、あるいは猫が多産の象徴として尊ばれているというのも、正しい。ただし、セイストロンという祭具そのものは、女神ハトホルの、ひいてはその女神と同一視されることになったイシスのもつ力ゆえに「魔よけ」的な意味をになったのであって、死と生というような、プルタルコスがこの前後で一所懸命説こうとしている二項対立とか、運動によって自然の本性たる生成力を解放するとかいうような哲理とは関係がない。

二三9 猫が二八匹子を産むという計算はともかくとして、ナイル・デルタ地方のブバスティスでバステトという猫の女神が古くから崇拝されていたことは事実であり、このバステトがハトホルに、次いでイシスに同化され、かくて猫は、多産の女神である月としてのイシスに関係づけられることになった。

一五8　かなり古くから、一種の「お守り」として前結びの帯を締める風習があったらしいが、後にこれがとくに「イシスの帯」と呼ばれるようになった。その結び目が生命の象徴であったという。一二〇頁と訳注一一九8を参照。

〃9　ハルポクラテスについては第一九節(四三頁)および第六八節(一一九頁)と訳注一一九11を参照。

一六5　ヘレニズム時代以来、プルタルコスがこの作品を書いた時代まで、思想界全体を支配していた折衷主義、あるいは(とくにストア派の哲学者たちの)普遍主義的な考えかたの表れだが、結果的に、エジプトの神々の礼賛、エジプトの宗教がギリシア人に及ぼした影響の大きさを語っていることになる。

一九1　テオドロスのこの言葉はプルタルコスの別のエッセイ『爽快な気分について』四六七B(岩波文庫の拙訳『似て非なる友について他三篇』二一八頁)にも引用されている。彼が無神論者と呼ばれた所以は、ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』二、九七―一〇三(加来彰俊訳の岩波文庫、上、一九七―二〇四頁)に詳しい。

〃6　ヘルメスとはトトであるが、ラメセス三世の祭事暦に、「ナイル氾濫の最初の月の一九日に」トト神の祭とあって、プルタルコスのこの記述は正確である。トト＝ヘルメスは、プルタルコスではつねに真実または正義との関連で語られる。真理と蜜という一見奇妙な取り合わせは、ここに言う「真理は甘きもの」という観点から習慣化したらしい。

〃8　訳注一一五8で述べたように、この帯の結び目が生命を象徴していた。それが「真実の言葉」を表わすとされるようになったのは、多少の曲折を経ている。「真実の言葉」は、本来人が死んだ時にオシリ

スが与える裁きを意味し、とくに葬儀の際に、死者がオシリスによって嘉せられたとして、「(このオシリスの)言葉は真なり」と宣告したものだという。それがどのような過程を経てかはよく分からないが、この帯を締めたイシスにもこういう宣告の力があるとされるようになった由。

〃 11 ハルポクラテスについては四三頁と訳注四三6、および一一五頁も参照。指を口に当てているポーズについて、ギリシア・ローマの著述家たちはみな、このプルタルコスと同じように、沈黙の勧めととっているが、真意については諸説あって定まらない。また豆を供える意味についても明確なことは分からない。唱えられる文句の中の運とか神とかは、畏れ謹むべきものとしての運であり神であって、前文の沈黙と勧めにつながっている。

〃 14 ギリシア語でペルセアと呼ばれる木はイシェドというものであり、イシェドの実がハート型をしているのは事実のようだが、困ったことに、この木はイシスよりは太陽神ラーの聖樹であり、次いでオシリスの死を悼む木となった。

一三〇12 テスモポリア祭は、秋、麦の種をまく頃行われるデメテル女神に捧げる祭。女たち(それもおそらく結婚した女たち)だけで行うもので、土に豊穣の気を呼び覚まそうとする。

〃 14 アカイアはデメテル女神の呼称の一つ。社を移動させるとは、日本の神輿のようなものを想像すればよいか。ただし「移動させる」(kinousin)にはknonousin(「ほこりをたてる」)という異読もあって、それはそれでいろいろな想像を強いる読みかたである。ペルセポネはデメテルの娘。冥界の神ハデスが彼女に恋をして地下にさらった。母デメテルは嘆きつつ大地を経めぐって娘を探した。ゼウスがその母の嘆

きに動かされて、ペルセポネは一年の半ばは地下で、半ばは母のもとで暮らすことになった。これはもちろん種を地中に埋めると穀物が芽吹いてくることを象徴したもの。ここにあげられている月の名は、いずれも一〇月中頃から一一月中頃までの季節を指している。

一三一5 「西の民」とはイタリアやシシリーのギリシア人を指すか。クロノスと同一視されたイタリアのサトゥルヌスの祭(穀物の種蒔きを祝う)は冬の祭である(ただしクロノス自身には、サトゥルヌスのような穀物神の痕跡はない)。またアプロディテが連想される季節も、ペルセポネ同様春であろう。したがってテオポンポスのこの証言は、半ば道理にかなっており、半ばは根拠不明である。

一三三1 西の民に対して東の民の例をあげて、このような神観が普遍的であることを示そうとしている。プリュギアは小アジア中央の西寄りの地方。パプラゴニアも同じく小アジアの、プリュギアの東北方、黒海に面する地方。

一三三7 アリストテレス『弁論術』一四〇〇b五では、同じクセノパネスの同じ趣旨のことが、女神レウコテアについてエレア人に向かって言われている。プルタルコスは全著作の中で三度クセノパネスのこの発言を記しているが、ここ以外の箇所では、『愛をめぐる対話』七六三C(岩波文庫の拙訳、六五頁)では、オシリスについてエジプト人に向かって言ったことになっている。この三箇所は、クセノパネスがエジプトを訪れたことがあるということの論拠になっている。

一三四3 ラカレスは前四世紀末、アテナイがマケドニアの支配を受けていた頃の傭兵隊長。もう一人の傭兵隊

長カリアスと主導権争いのあげく包囲され、傭兵の賃金支払いに窮して、パルテノン神殿のペイディアス作のアテナイ女神の黄金の巨像から衣装を剥いで盗んだという。これについてはパピルスの記録もあるし、パウサニアス『ギリシア案内記』一、二五、七（馬場恵二訳の岩波文庫、上、一二〇―一二一頁）、アテナイオス『食卓の賢人たち』九、四〇五Fなどにも記されている。

一三四 4 プルタルコスより一世代後のアイリアノス『ギリシア奇談集』一、二〇（松平千秋・中務哲郎訳の岩波文庫、三七―三八頁）でもこの話が語られている。

〃 5 カピトリウムの丘のユピテル神殿が焼かれたことは一度ならずだが、「内戦の時」というのだから、スラがマリウス派を攻撃した前八三年のことだろう。

〃 13 これらの聖獣・聖鳥はそれぞれプルタルコスが書いている通りだが、アテナイの聖鳥といえばふつうはふくろうを思うが、一三二頁にもあるように、パルテノン神殿の、ペイディアスが造ったアテナ像が手にしている盾には蛇が描かれていたのみならず、ヘロドトス『歴史』八、四一（松平千秋訳の岩波文庫、下、一七二―一七三頁）によると、アクロポリスの守護者として、ここに巨大な蛇が棲息していたという。アテナと蛇の関係をミュケナイ時代までさかのぼり得ると断定する学者もある。

一三五 12 エジプトの宗教の基礎に、一種のトーテミズムともいうべき、部族ごとの動物崇拝、そしてその旗印があり、部族長なり王なりがそれらの動物と一体化したのは事実だし、一方王はホロスの化身としてホロスの聖鳥である鷹の旗印を掲げたというのも事実だが、オシリスが大軍を起こして、というのは知られていない。

一三六3　この王というのが誰であるかは分からない。すでに前一世紀シシリーのディオドロスの史書(一、八九、五)にもこの話が記されているが、そこでも「他に抜きん出て賢い王」と書いてあるだけである。

〃13　羊を崇めて食べない(あるいは利用しない)ことについて、本書一六頁では「祭司たちは食べないし、毛を用いない」と述べられ、一二八―一二九頁では「有益だから」大事にされると言われている。ヘロドトス『歴史』二、四二(松平千秋訳の岩波文庫、上、一八八―一八九頁)は、テバイの人々は羊を犠牲に供するのを避けて、代わりに山羊を用いると言って、その理由と称する伝説を紹介している。同じヘロドトスは(二、四六、岩波文庫、上、一二九頁)、メンデスの人々は反対に、山羊を避けて羊を犠牲に供すると述べている。このほかにも、デルタ地帯ニトリオテ地区の人々だけが羊を犠牲として用いるという伝承もあり、こうして各著述家の記事はいちいち違っているが、確かなのは、羊がとくに尊重されていたらしいということである。

一三七1　訳注四一6を参照。

〃3　このオクシュリュンコスとキュノポリスの争いはギリシア・ローマ世界では有名だが、それにしても、ローマ人が罰したというのが、いつ誰によってであるのか定かでないのが不思議である。またこれについて、エジプト側の記録はない。

〃〃「こういう動物たち」とプルタルコスは言うが、すぐ前にあげられていたオクシュリュンコスや犬ではなく、動物全体を指している。

〃7　ここに披露されているエジプトの犠牲獣観も、六二頁にあげられていたものとは違いながら、やはり

エジプトのものではない。「……と言っている人が大勢います」というとき、その「大勢の人」とは、実はエジプトについて語っているギリシア人やローマ人であろう。しかもこの犠牲獣観は古典期のギリシアにも見られないものである。最も分からないのは「その悪しき霊をなだめ和らげる」ということで、そのために動物たちを「大切に扱い、奉仕している」というのも、前後の犠牲獣観とどうつながるのかが分からない。

二三七10「崇められている(timomenon)動物を何頭か……脅して……殺す」というのもよく分からない。「崇められている動物」が引き出されるのは大旱魃のような災害のときで、それがまず脅されて、それで効き目がなければ殺されるというのだから、この動物はその災害の原因になっていると見なされているはずで、それならなぜ「崇められている」のか分からない。少なからず無理な読み方をして、この timomenon をアテナイの法律用語ととると、「有罪と判定された」「罰を決められた」と読め、これだと意味のつじつまは合う。しかし、プルタルコスがここでアテナイの法律用語を使うべき理由がない。また、犠牲獣を、なぜ、できれば殺さずに脅すだけにして、効き目がないときに限り殺すのか、そのような犠牲の風習は他に類例がないだろう。

〃14 ヘロドトス『歴史』二、四五(松平千秋訳の岩波文庫、上、一九一―一九二頁)にもかかわらず、エジプトにも人身御供はあった。「テュポンの徒」についてはすでにディオドロス『歴史』一、八八、五に「テュポンのような肌の色をした者たちが、昔王命により、オシリスの墓前で犠牲に捧げられた」とある。しかし「犬の日」に「公開で」人身御供が行なわれたという記録はほかにはない。

一九九4　レムノス島でばったの卵をつぶす鳥のことは、プリニウス『博物誌』一一、一〇六も記しているが、冠雲雀でなく、kolonosという別の鳥である。
〃8　こうのとりが蛇の天敵であることは、多くの作品に言及されているが、プルタルコスのこの記述とほとんど同じことを述べているのはプリニウス『博物誌』一〇、六二である。以上が有益さゆえに大事にされる動物の例。以下は象徴的意味ゆえに尊ばれる例である。
〃11　ここに言う「ふんころがし」は二八頁で「黄金虫」と訳したものと同じ。「ふんころがし」は現代ではファーブルの『昆虫記』でおなじみであろう。この頁の終わりでは、その球を作るのに、後ろ向きに押す動きを太陽の運動になぞらえているが、一方ではこの虫は、雌の力をかりずに子を産むというので、「みずからを創造するもの」ととられて神聖視されていた。
〃13　いたちのこの奇怪な妊娠出産の話はいかにして発生し伝播したのか分からない。ここではその奇怪さが、「耳より入って口に出る」というわけで、言葉の象徴ととられているが、ギリシアでもローマでも、「いたちを抱いている」とは不幸不運のこと、「いたちに外套」とは「猫に小判」の類というように、いたちといえば通常、不吉あるいは無価値なものと見なされているだけに、いっそう奇怪に思える。「今なお多くの人々が信じている」と言われても、ほかに文献で追認のしようがない。
二〇〇8　この文末の「星あるいは永遠になぞらえられ」というところは、写本の記述がおかしくて読めない。一つの試みの訳にすぎない。
〃11　鰐には舌がないとヘロドトス『歴史』二、六八（松平千秋訳の岩波文庫、上、二〇四頁）も記している

が、これは誤り(アリストテレスは舌があることを知っていた。彼の『動物部分論』六六〇b二八参照)。しかしそのこと、および後出の「音をたてずに歩く」「他からは見ていると見られずに他を見る」点が、鰐は神聖だという信仰のもとになった。

一三一10 鰐が産む卵の数は、アリストテレス『動物誌』五五八a一八によると、最大限六〇である。しかしここでプルタルコスが寿命は六〇年だと言っているのや、アイリアノス『動物誌』一〇、二一が、椎骨が六〇個、歯が六〇枚、筋肉が六〇個で、毎年六〇日間冬眠する、などと並べているのを見ると、六〇という数に特別の意味を認めているのが分かり(アリストテレスは、鰐は卵を六〇日間温める、とも言っている)、これがどこまで観察によっているのかはかえって怪しくなる。

〃13 イビスが蛇を殺す功により、エジプト人から尊重されているということはヘロドトス『歴史』二、七五(松平千秋訳の岩波文庫、上、二〇七—二〇八頁)にも記されているが、ヘロドトスが述べている蛇はただの蛇ではなく、有翼の蛇という不思議なもの。イビスが自分で解毒するのを人間が見て学んだということは、キケロ『神々の本性について』二、一二六、プリニウス『博物誌』八、九七も記している。

一三二6 正三角形をしているとか、半月形があるとかいうので、エジプト人がこの鳥を尊んだというのは、あくまでもギリシア人の解釈で、そもそもイビスがもとトト神であったから尊ばれていたのである。

〃11 支配者は民の声を聞かない方が正しいという奇妙な説を支持するために、プルタルコスはクレタのゼウス像を引証しているが、このゼウス像に耳がないのが本来の姿であるのかどうかは疑わしい。

一三三2 訳注一二四13を参照。アプロディテ像の亀については、プルタルコスは『結婚訓』三二(岩波文庫の

拙訳『愛をめぐる対話他三篇』一一三—一一四頁)でも引き合いに出して、ここと同じ教訓を述べている。しかしこの亀がなぜ置かれたのかについては、プルタルコスを含めていろいろな説明が試みられているが、いずれも決定的ではない。

〃 5　妃の名も息子の名も三番目(tritos)に関係がある、ということ。ポセイドンの三つ又の戟(ほこ)については、今日なお有力な説同士が対立しているが、いずれにせよプルタルコスのここでの説明は、例によってこじつけである。

〃 8　トリトゲネイアは女神アテナの呼称の一つ。古代以来いろいろな説明が試みられているが、決定的な意味は不明のままである。プルタルコスが紹介しているピュタゴラス派の説明は、Tritogeneia の下線部に「三分の一」の意味を認めてのことだろう。

〃 9　訳注二七12を参照。

〃 10　ピュタゴラス派にあってはすべてのものが数だったから、三は正義だというのも不思議はないが、これには混乱があったようで、正義はふつう四か九である。「正義とは最初の平方数である」という考えがあって、最初の偶数(二)の平方をとれば四、最初の奇数(三)の平方をとれば九になる。しかしこのほかに、三あるいは五あるいは八が正義だと言う者が後に現われたらしい。すでにアリストテレスが『形而上学』の何箇所かで、ピュタゴラス派の、何でも数に帰したがるこの傾向を批判している。

〃 14　テトラクテュスとはふつうは最初の四つの数、すなわち一、二、三、四の和(すなわち一〇)のことをいい、通例∴̇という図形で示される。誓いというのは、ピュタゴラス派の人々が「永遠の自然の根源な

るテトラクテュスを我らに教えたまいし師のおん名により」と唱えて誓ったというもの。

一三五2　このヘラクレイトスの断片のはじめの「これによって」という所には、写本上の問題があるようだが、この断片の出典であるディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』九、一は、「知恵というのは一つしかない。どのようにして、すべてのものがすべてを通じて導かれているかを判断することを知ることだ」、というのである。もっとも、ディオゲネスのテクストでは、この直前に有名な「博識になったとて物を理解することを学ぶわけではない。さもなければヘシオドスやピュタゴラスや、さらにクセノパネスやヘカタイオスは、彼らの博識からもっと学んだはずだ」という言葉があって、彼の傲慢さの証拠にされている。

〃7　以下第七八節の終わりまでにおいて、イシスはプラトン哲学における素材(hyle)と見なされ、それによって根源的な創造者たるオシリスが宇宙を創造する、という観点からの説明となる。これによってオシリスは、エジプト人の本来のオシリスからは離れてしまうが、きわめて崇高なものとなる。そして、ローマ時代には、一方で死者はオシリスになると信じられるようになっていたから、この崇高なオシリス観は死に直面する人間を勇気づけたにちがいない。

一三六4　プラトン『饗宴』では、ディオティマがソクラテスに愛の究極的な奥義を語り聞かせるくだり。「アリストテレスも」という方は分からない。現存するアリストテレスのテクストには該当する箇所がない。

〃11　これはまさにこの通りと言うほかない正しいこと。訳注一〇九1を参照。

一三九1　エジプト人の清潔さと健康はギリシア世界で有名だったようで、ヘロドトス『歴史』二、七七(松平

千秋訳の岩波文庫、上、二〇八―二〇九頁)、ディオドロス『歴史』一、八二、一以下にも記されている。ヘロドトスは、エジプト人はリビュア人についで世界で最も健康な民族だと述べている。

〃9　儀式や日常生活において香を焚く習慣があったことは事実であり、その香はほとんど脂であったのも事実だが、ここで「脂」と訳した原語は retine であって、脂全般を指す語である。しかし次の「正午には」では「没薬」と、特定の名があげられているので、朝にもやはり特定の脂が使われたはずである。たぶん「乳香」(libanotos)だろうと推定する学者もいる。

〃14　アクロンは臨床経験の豊富な医者ということで評判だったようで、シシリー島アクラガス(アグリゲントゥム)の人。アテナイの疫病とは、トゥキュデイデスの記述で有名な、ペロポンネソス戦争第二年目(前四三〇年)の夏、アテナイを襲ったもの。

一四〇2　現存するアリストテレスのテクストにはこのような言及はない。

〃8　上に述べられた香料とちがって、キュピは調合して作られる。マネトには『キュピの調整法』という著作があったというから、ここのプルタルコスの記述はそれによったのかもしれない。その調整法はいろいろあったらしい。キュペロスはかやつり草の一種で、ミイラ調製の際に腹腔にいれる香料の一つでもある。アスパラトスは、文献にしばしばみられるわりにはよく分かっていない植物。プリニウス『博物誌』一二、一一〇などを参照。セセリス(またはセセリ)はテオプラストス『植物誌』九、一五、五に薬用としてあげられている。スキノスはヘロドトス『歴史』四、一七七(松平千秋訳の岩波文庫、中、一〇一頁)が、ロトスの実の大きさを説明するのに、ほぼスキノスの実と同じぐらいという言い方をし

ているので、彼にとってはロトスよりはなじみのある木だったのだろう。テオプラストス『植物誌』九、一、二によると、没薬に似た脂がとれる由。瀝青とはアスファルト(asphalton)で、入れるに事欠いて妙なもの(しかもこれだけ植物ではない)である(もしこれが asphaltion ならばクローヴァーの一種で、その方が分かりやすいが、そう読むべき文献学的根拠はない)。ラパトンは英語でいう Rhubarb の仲間で、漢方薬の大黄もこの仲間。ねずの木と訳したのはアルケウティスだが、よく分からない。カルダモンはインド(あるいはシリア)から輸入される芳香植物だとテオプラストス『植物誌』九、七、二は言う。カラモスは葦の仲間ともいい菖蒲の仲間ともいうが、この名で呼ばれる草がいろいろあって、それに応じて用途もさまざまのようである。しかしとくに香ゆえに珍重されるのはインド産の菖蒲の仲間だとテオプラストス『植物誌』九、七、一は言う。プリニウス『博物誌』一二、一〇四—一〇五も参照。

〃12 つまりこういうものの調合は、薬剤調製であると同時に宗教(魔術)の儀式でもあったということ。

〃14 訳注八一10を参照。

解説

イシスとオシリスはエジプトの神である。それも、エジプトの神々の中で最も重要と言ってもいいほど、主要な神々である。もちろんその起源ははるかに古い。しかしこの神々の物語をまとまった形で紹介しているものとしては、実はこのプルタルコスの『イシスとオシリス』が最古の文献であるばかりでなく、唯一の信頼できる典拠でもある。もっとも、いかに最古とはいえ、プルタルコスは一世紀から二世紀初頭のギリシア人であり、したがって、少なくともいわゆる「ピラミッド文書」（エジプトの古王国時代の末期にはすでに書き下ろされていた、ということは、前二二世紀以前に成立していたと推定される）に最も古い記録が遺されているこのエジプトの神話を、ずっと後世の異邦人であるプルタルコスが、どこまで本来の姿で伝えているかということが当然問題になる。しかし、いちいちの細部にわたっては何かと注意しなければならないことがあることは容易に想像できるにせよ、大筋においては、プルタルコスの記述

はエジプトの古い伝承をかなりよく伝えていると推定する説が有力である。こういう次第で、この作品はまず、オシリス神話を伝える唯一の信頼できる文献として重要視されるのである。神話そのものは、本篇の第一二―一九節(三〇―四三頁)で紹介されているが、ここでごく簡単にかいつまんでおくと、

オシリスは万物を生んだ男神で、王としてエジプトの支配者ともなった。王としては、野蛮で獣のような生き方をしていた人民を教育もし、文明を与えもした。ところが兄弟のセト(プルタルコスはこれをギリシア神話のテュポンと同一視し、つねにこの名で呼んでいる)に、生きながらひつぎに閉じ込められ、ナイル河に流された。オシリスの妹であり妃でもあるイシスは、そのひつぎがフェニキアのビビュロスに漂着しているのを知るや、それを引き取ってナイル河口のブトに運んだ。テュポンがそれに気づき、今度はオシリスの遺骸を一四に切断してばらまいた。イシスはその遺骸の断片を探して放浪し、息子のホルス(プルタルコスではホロス)の協力を得てオシリスをよみがえらせ、テュポンに復讐した。かくてオシリスは死者たちを支配する神ともなったが、死んでまたよみがえる神としても尊崇を集めた。

次にプルタルコスはこの神話の解釈を試みていて、それがこの作品の主要部をなすのだが(「目次」を参照)、そこには、エジプトの神としてのオシリスとイシスの神性の解明ばかりでなく、その解明にあたってプルタルコスが必然的にとったギリシア人の見方、さらにはっきり言えば、彼のいわゆる「プラトニズム」——そこにはプラトンの著作そのものからの借用と新プラトン主義的な思想がないまぜになっている——というようなものを見ることができる(プルタルコスの「プラトン主義」的解釈ゆえに、エジプト人の目から見れば本来のイシス・オシリス神話を歪めたとおぼしい点については、ここでまとめて紹介するよりは、その都度言う方がむしろ便利だろうと思うので、すべて訳注に委ねることにした)。

しかしそれにしてもプルタルコスは、なぜギリシアのではなく異民族の、それもアッシリアでもなくバビロニアでもなく、ことさらにエジプトの神々にこれほど熱心に関わりあったのかは、やはり問題になるかもしれない。ただし、この「なぜ」に対する答えは比較的容易に見つかる。まず下地というか、当時の一般的風潮というようなものがある。プルタルコスが生きていたのは一世紀から二世紀初頭のローマ帝国(の、その属領の一つであるギリシアの田舎)だっ

た。そしてこの時代に、ローマ帝国にはいろいろな東方の神々が押し寄せている。例えばキュベレ、ミトラ、アドニス、マズダなど。そしてローマでは、これらの神々を排斥するどころか、むしろ熱狂的に迎えた形跡がある。イシスとオシリスもそういう東方の神々の一として歓迎されていたのである。

しかしギリシア人を、他の東方の宗教以上にエジプトの宗教に結びつけた最大の要因は、他にいろいろ事情はあったにせよ、やはりアレクサンドレイアという都市の建設と隆盛だったろう。前五世紀にはヘロドトス『歴史』二、三七―六五節（松平千秋訳の岩波文庫、上、一八五―二〇三頁）がすでに、エジプトの神々と宗教について述べているが、そこではまだ未知の国、珍しいものを読者に紹介するのが眼目になっていると思える。しかしナイル河口の一角にアレクサンドロス大王というギリシア人が建設した都市は、その後やはりギリシア人であるプトレマイオス一族がそこに王朝を開いて、有名な図書館をはじめとする文化の中心地たらしめ、それにつれてギリシア人でエジプトに移住する者もおびただしくなったにちがいなく、これがギリシアとエジプトの知的交流あるいは混交を盛大にさせたことは容易に想像できる。

そのアレクサンドレイアにプルタルコスは旅したことがあって（拙訳の岩波文庫『食卓歓談

集』一四九頁参照）、それが彼にエジプトをいっそう親しいものにさせた、ということも考えられる。ただこの旅が、たぶん若い頃のことだったろうと推定はできても、何の目的でどれぐらいの期間かの地に滞在していたのかは不明なので、あまり想像をたくましくすることは避けるべきかもしれない。しかしさらに、彼が若いころアテナイで教えを受け、生涯尊敬しつづけた師アンモニオスが、プラトンの設立したアカデメイアの学頭だったとか、そうではなかったとか言われながらも、どうやら終始アテナイで教えていたらしいことは確かなのだが、実は彼はエジプト人だったのだという説が、四世紀のエウナピオスという人の『ソフィスト列伝』という書物に述べられていて、もしこれが正しいとすると、プルタルコスはアンモニオスを通じてプラトン哲学を教えられると同時に、エジプトのことどももいろいろ紹介されていたはずだと想像することができる。ただし、アンモニオス・エジプト人説はエウナピオス一人が述べていることなので、これは想像の域を出ることはできない。しかし学者の中には、プルタルコスがアレクサンドレイアに旅したのは、アンモニオスの薦めによって留学するためだった、とまで言う人もある。

それはともかくとして、プルタルコスは晩年にデルポイのアポロン神殿の神官を務めている

が、そのデルポイでもイシス・オシリスの崇拝が行われていたことは碑文からも知れるし、考古学的遺物からも知れる。とすればプルタルコスが、エジプト、わけてもイシスとオシリスという神々に親しんでいたことは当然だということになる。

プルタルコスの記述・論述は例のごとくあまり整然とはしていないが、これだけの長編には何か目次のようなものがあった方が便利だろうと思われるので、本訳では巻頭に目次代わりに、各節の内容を見出しとしてつけた。一つの目安として役に立つだろうと思う。

また、プルタルコスは、イシスとオシリスを除くすべてのエジプトの神々をギリシアのいずれかの神に見立てて、その名で呼んでいる(イシスとオシリスにしても、一応これはエジプトの名だということになってはいるが、本当はそれぞれアセトとウシルだろう)。本文中、および訳注の中でも、必要に応じて説明はしてあるが、やはり一覧表があった方が便利だろうと思うのでそれを次に掲げる。

クロノス＝ゲブ　ゼウス＝アメン　ディクテュス＝タムズ　テュポン＝セト　ネプテュス＝ネブトフト　ハルポクラテス＝ホル・パ・ケレド　ヘリオス＝ラー　ヘ

ルメス＝トト　ホロス＝ホルス　レア＝ヌト

プルタルコスのこの作品およびこの作品が提起する問題について、比較的最近の参考書を三点紹介しておく。うち一点は凡例であげたFroidefond のBudé版のIntroduction およびNotes supplementaires だが、ほかの二点は、

J. Gwyn Griffith, Plutarch's De Iside et Osiride, ed. with an Introduction, Translation and Commentary (Cardiff, 1970)

J. Hani, La religion égyptienne dans la pensée de Plutarque (Paris, 1976)

また、訳者が随時参照したBudé版(Paris, 1988. 凡例参照)の解説は一八〇頁にも及び、最近の研究の成果が十分に採用されている。エジプトの宗教や神々についての入門書としては、次に上げる二点が親切にできているし、手に入りやすくもある。

三笠宮崇仁『古代エジプトの神々』二三二頁(日本放送出版会　一九八八)

ロザリー・デイヴィッド著・近藤二郎訳『古代エジプト人―その神々と生活』三一三頁(筑摩書房　一九八六)

これらの本には詳しい参考書目がつけられているので、それによってさらに読み進むことができる。

＊

凡例にも断わったように、本訳には多数の図版が挿入されて読者の便を図っている。これはすべて東海大学の鈴木八司氏が、多忙の間を縫って、選び、配置して下さったものである。あらためてお礼を申し上げたい。また訳者は、上記 Budé 版を、訳稿を編集部の塩尻親雄氏に届けた直後に入手した。そして、この新版を参照せずに拙訳を上梓するのはよくないと考えて訳稿を返却していただいた。ところがその後訳者は、勤めの方が多忙を極め、この新版の「参照」がひどくおくれてしまった。こうして岩波書店、とくに塩尻氏に御迷惑をかけたことをお詫びし、同時に同氏が、私に対して親切に苦心を重ねて下さったことに、厚くお礼を申し述べる。

＊

私はこの拙い訳を故斎藤忍髄氏に捧げることにする。斎藤氏はかねがねぜひ本書を訳したいとの強い希望をもっておられて、したがって、本来ならば斎藤氏が本書の訳者となられるはず

だったからである。しかるに斎藤氏が、田中美知太郎先生と相前後して、突然に逝去されたために、私が代役を務めることになったのである。しかし訳了した今もなお、無事に代役を務めおおせたと、胸を張って断言することはできないが、私もいずれハデスの国に行く、その時はこの拙訳を手土産に斎藤氏を訪問しようと思っている。

一九九五年一〇月

訳　者

エジプト神(しん) イシスとオシリスの伝説(でんせつ)について
プルタルコス著

定価はカバーに表示してあります

1996年2月16日　第1刷発行
1996年4月10日　第2刷発行

訳　者　柳沼重剛(やぎぬましげたけ)

発行者　安江良介

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋2-5-5

電　話　案内 03-5210-4000　営業部 03-5210-4111
文庫編集部 03-5210-4051

印刷・理想社　カバー・精興社　製本・桂川製本

ISBN4-00-336645-X　Printed in Japan

読書子に寄す

——岩波文庫発刊に際して——

岩波茂雄

真理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む。かつては民を愚昧ならしめるために学芸が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあった。今や知識と美とを特権階級の独占より奪い返すことはつねに進取的なる民衆の切実なる要求である。岩波文庫はこの要求に応じそれに励まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少数者の書斎と研究室とより解放して街頭にくまなく立たしめ民衆に伍せしめるであろう。近時大量生産予約出版の流行を見る。その広告宣伝の狂態はしばらくおくも、後代にのこすと誇称する全集がその編集に万全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻訳企図に敬虔の態度を欠かざりしか。さらに分売を許さず読者を繋縛して数十冊を強うるがごとき、はたしてその揚言する学芸解放のゆえんなりや。吾人は天下の名士の声に和してこれを推挙するに躊躇するものである。このときにあたって、岩波書店は自己の責務のいよいよ重大なるを思い、従来の方針の徹底を期するため、すでに十数年以前より志して来た計画を慎重審議この際断然実行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西にわたって文芸・哲学・社会科学・自然科学等種類のいかんを問わず、いやしくも万人の必読すべき真に古典的価値ある書をきわめて簡易なる形式において逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は予約出版の方法を排したるがゆえに、読者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選択することができる。携帯に便にして価格の低きを最主とするがゆえに、外観を顧みざるも内容に至っては厳選最も力を尽くし、従来の岩波出版物の特色をますます発揮せしめようとする。この計画たるや世間の一時の投機的なるものと異なり、永遠の事業として吾人は微力を傾倒し、あらゆる犠牲を忍んで今後永久に継続発展せしめ、もって文庫の使命を遺憾なく果たさしめることを期する。芸術を愛し知識を求むる士の自ら進んでこの挙に参加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上経済的には最も困難多きこの事業にあえて当たらんとする吾人の志を諒として、その達成のため世の読書子とのうるわしき共同を期待する。

昭和二年七月

《東洋文学》

- 陶淵明全集 全二冊 — 松枝茂夫・和田武司 訳注
- ☆杜甫詩選 — 黒川洋一 編
- 蘇東坡詩選 — 小川環樹・山本和義 選訳
- 李賀詩選 — 黒川洋一 編
- 唐詩選 全三冊 — 前野直彬 注解
- 中国名詩選 全三冊 — 松枝茂夫 編
- 唐宋伝奇集 全二冊 — 今村与志雄 訳
- 完訳三国志 全八冊 — 小川環樹・金田純一郎 訳
- 紅楼夢 全十二冊 — 曹雪芹・高蘭墅 松枝茂夫 訳
- 西遊記 全十冊(九以下未刊) — 小野忍・中野美代子 訳
- 陶庵夢憶 — 張岱 松枝茂夫 訳
- 菜根譚 — 今井宇三郎 訳注
- 阿Q正伝・狂人日記 他十二篇 — 魯迅 竹内好 訳
- 故事新編 — 魯迅 竹内好 訳
- 魯迅評論集 — 竹内好 編訳
- 歴史小品 — 郭沫若 平岡武夫 訳
- 子夜(真夜中) 全二冊 — 茅盾 小野・高田 訳
- 駱駝祥子(ロートシアンツ)—らくだのシアンツ — 老舎 立間祥介 訳
- 中国民話集 — 飯倉照平 編訳
- リグ・ヴェーダ讃歌 — 辻直四郎 訳
- マハーバーラタ ナラ王物語 — 鎧淳 訳
- バガヴァッド・ギーター — 上村勝彦 訳
- 朝鮮童謡選 — 金素雲 訳編
- 朝鮮民謡選 — 金素雲 訳編
- アイヌ神謡集 — 知里幸恵 編訳
- アイヌ民譚集 — 知里真志保 編訳

《ギリシア・ラテン文学》

- ホメロス イリアス 全二冊 — 松平千秋 訳
- ホメロス オデュッセイア 全二冊 — 松平千秋 訳
- イソップ寓話集 — 山本光雄 訳
- アンティゴネー — ソポクレース 呉茂一 訳
- ソポクレス オイディプス王 — 藤沢令夫 訳
- ヘシオドス 神統記 — 廣川洋一 訳
- ヘシオドス 仕事と日 — 松平千秋 訳
- アリストパネース 平和 — 高津春繁 訳
- アリストパネース 女の平和 — 高津春繁 訳
- ☆アポロドーロス ギリシア神話 — 高津春繁 訳
- ダフニスとクロエー — ロンゴス 松平千秋 訳
- オウィディウス 変身物語 全二冊 — 中村善也 訳
- ギリシア・ローマ抒情詩選 —花冠— — 呉茂一 訳
- ギリシア・ローマ神話 — ブルフィンチ 野上弥生子 訳
- ギリシア・ローマ古典文学案内 — 高津春繁・斎藤忍随

《イギリス文学》

- 完訳カンタベリー物語 全三冊 — チョーサー 桝井迪夫 訳
- ☆ユートピア — トマス・モア 平井正穂 訳
- ベーコン随想集 — 渡辺義雄 訳
- ロミオとジューリエット — シェイクスピア 平井正穂 訳

☆印の書目には、文庫版のほかに活字の大きいワイド版〔B6判、並製・カバー〕もあります

☆印の書目には、文庫版のほかに活字の大きいワイド版〔B6判、並製・カバー〕もあります

- ハムレット　シェイクスピア　市河・松浦訳
- 十二夜　シェイクスピア　小津次郎訳
- お気に召すまま　シェイクスピア　阿部知二訳
- ジュリアス・シーザー　シェイクスピア　中野好夫訳
- ヘンリー四世 全二冊　シェイクスピア　中野好夫訳
- ☆ヴェニスの商人　シェイクスピア　中野好夫訳
- オセロウ　シェイクスピア　菅泰男訳
- リア王　シェイクスピア　斎藤勇訳
- ソネット集　シェイクスピア　高松雄一訳
- 対訳ジョン・ダン詩集 —イギリス詩人選(2)　湯浅信之編
- 失楽園 全二冊　ミルトン　平井正穂訳
- ロビンソン・クルーソー 全二冊　デフォー　平井正穂訳
- モル・フランダーズ 全二冊　デフォー　伊澤龍雄訳
- 桶物語・書物戦争 他一篇　スウィフト　深町弘三訳
- ☆ガリヴァー旅行記　スウィフト　平井正穂訳
- ワーズワース詩集　田部重治選訳

- 高慢と偏見 全二冊　ジェーン・オースティン　富田彬訳
- 縛を解かれたプロミーシュース　シェリー　石川重俊訳
- ディケンズ短篇集　小池滋　石塚裕子訳
- ジェイン・エア 全二冊　シャーロット・ブロンテ　遠藤寿子訳
- 嵐が丘 全二冊　エミリ・ブロンテ　阿部知二訳
- サイラス・マーナー　G・エリオット　土井治訳
- アルプス登攀記 全二冊　ウィンパー　浦松佐美太郎訳
- テス 全二冊　ハーディ　井上・石田訳
- ラ・プラタの博物学者　ハドソン　岩田良吉訳
- 宝島　スティーヴンスン　阿部知二訳
- ジーキル博士とハイド氏　スティーヴンスン　海保眞夫訳
- 心 —日本の内面生活の暗示と影響　ラフカディオ・ハーン　平井呈一訳
- 怪談 —不思議なことの物語と研究　ラフカディオ・ハーン　平井呈一訳
- ドリアン・グレイの画像　ワイルド　西村孝次訳
- サロメ　ワイルド　福田恆存訳
- ヘンリ・ライクロフトの私記　ギッシング　平井正穂訳

- 南イタリア周遊記　ギッシング　小池滋訳
- 闇の奥　コンラッド　中野好夫訳
- キプリング短篇集　橋本槙矩編訳
- タイム・マシン 他九篇　H・G・ウエルズ　橋本槙矩訳
- 透明人間　H・G・ウエルズ　橋本槙矩訳
- モロー博士の島 他九篇　H・G・ウエルズ　橋本・鈴木訳
- サキ傑作集　河田智雄訳
- 月と六ペンス　モーム　阿部知二訳
- ローソン短篇集　伊澤龍雄編訳
- 果てしなき旅 全二冊　E・M・フォースター　高橋和久訳
- オーウェル評論集　小野寺健編訳
- パリ・ロンドン放浪記　ジョージ・オーウェル　小野寺健訳
- カタロニア讃歌　ジョージ・オーウェル　都築忠七訳
- イギリス名詩選　平井正穂編
- 20世紀イギリス短篇選 全二冊　小野寺健編訳

《アメリカ文学》

- フランクリン自伝　松本慎一・西川正身訳
- ギリシア・ローマ神話　ブルフィンチ　野上弥生子訳
- ☆中世騎士物語　ブルフィンチ　野上弥生子訳
- 完訳 緋文字　ホーソーン　八木敏雄訳
- ホーソーン短篇小説集　坂下昇編訳
- 黒猫・モルグ街の殺人事件 他五篇　ポオ　中野好夫訳
- 森の生活（ウォールデン）全二冊　H・D・ソロー　飯田実訳
- 白鯨 全三冊　メルヴィル　阿部知二訳
- ハックルベリー・フィンの冒険 全二冊　マーク・トウェイン　西田実訳
- 王子と乞食　マーク・トウェイン　村岡花子訳
- 不思議な少年　マーク・トウェイン　中野好夫訳
- 人間とは何か　マーク・トウェイン　中野好夫訳
- いのちの半ばに　ビアス　西川正身訳
- オー・ヘンリー傑作選　大津栄一郎訳
- どん底の人びと —ロンドン一九〇二—　ジャック・ロンドン　行方昭夫訳
- フィッツジェラルド短篇集　佐伯泰樹編訳
- 日はまた昇る　ヘミングウェイ　谷口陸男訳
- 武器よさらば 全二冊　ヘミングウェイ　谷口陸男訳
- ヘミングウェイ短篇集 全二冊　谷口陸男編訳
- タバコ・ロード　E・コールドウェル　杉木喬訳
- 怒りのぶどう 全三冊　スタインベック　大橋健三郎訳
- アメリカ名詩選　亀井俊介・川本皓嗣編

《南北欧文学その他》

- 神曲 全三冊　ダンテ　山川丙三郎訳
- 抜目のない未亡人　ゴルドーニ　平川祐弘訳
- カヴァレリーア・ルスティカーナ 他十一篇　G・ヴェルガ　河島英昭訳
- 無関心な人びと 全二冊　モラーヴィア　河島英昭訳
- むずかしい愛　カルヴィーノ　和田忠彦訳
- ドン・キホーテ 正篇全三冊　セルバンテス　永田・高橋訳
- 血と砂　ブラスコ・イバーニェス　永田寛定訳
- コルタサル短篇集 悪魔の涎・追い求める男 他八篇　木村榮一訳
- ペドロ・パラモ　ファン・ルルフォ　杉山・増田訳
- フエンテス短篇集 アウラ・純な魂 他四篇　木村榮一訳
- 伝奇集　J・L・ボルヘス　鼓直訳
- 完訳アンデルセン童話集 全七冊　大畑末吉訳
- 絵のない絵本　アンデルセン　大畑末吉訳
- 即興詩人 全二冊　アンデルセン　大畑末吉訳
- キリスト伝説集　ラーゲルレーブ　イシガオサム訳
- クオ・ワディス 全三冊　シェンキェーヴィチ　木村彰一訳
- 絞首台からのレポート　ユリウス・フチーク　栗栖継訳
- オルトゥタイ ハンガリー民話集　徳永・石本・岩崎・粂栄訳
- 完訳千一夜物語 全十三冊　豊島・渡辺・佐藤・岡部訳
- ☆ルバイヤート　オマル・ハイヤーム　小川亮作訳

☆印の書目には、文庫版のほかに活字の大きいワイド版〔B6判、並製・カバー〕もあります

《ドイツ文学》

- ニーベルンゲンの歌 全二冊　相良守峯訳
- 若きウェルテルの悩み　ゲーテ　竹山道雄訳
- ファウスト 全二冊　ゲーテ　相良守峯訳
- イタリア紀行 全三冊　ゲーテ　相良守峯訳
- ほらふき男爵の冒険　ビュルガー編　新井皓士訳
- 水妖記（ウンディーネ）　フーケー　柴田治三郎訳
- 影をなくした男　シャミッソー　池内紀訳
- 完訳グリム童話集 全五冊　金田鬼一訳
- ウィーンの辻音楽師 他一篇　グリルパルツァー　福田宏年訳
- 水晶 他三篇　シュティフター　手塚・藤村訳
- 黒い蜘蛛　ゴットヘルフ　山崎章甫訳
- みずうみ 他四篇　シュトルム　関泰祐訳
- マルテの手記　リルケ　望月市恵訳
- ブッデンブローク家の人びと 全三冊　トーマス・マン　望月市恵訳
- トニオ・クレエゲル　トオマス・マン　実吉捷郎訳
- ヴェニスに死す　トオマス・マン　実吉捷郎訳
- トオマス・マン短篇集　実吉捷郎訳
- 魔の山 全二冊　トーマス・マン　関・望月訳
- ワイマルのロッテ 全二冊　トーマス・マン　望月市恵訳
- 車輪の下　ヘルマン・ヘッセ　実吉捷郎訳
- 青春はうるわし　ヘルマン・ヘッセ　関泰祐訳
- デミアン　ヘルマン・ヘッセ　実吉捷郎訳
- マリー・アントワネット 全二冊　シュテファン・ツワイク　高橋・秋山訳
- 変身 他一篇　カフカ　山下肇訳
- 審判　カフカ　辻瑆訳
- カフカ短篇集　池内紀編訳
- 蝶の生活　シュナック　岡田朝雄訳
- 暴力批判論 他十篇 —ベンヤミンの仕事1　ヴァルター・ベンヤミン　野村修編訳
- ボードレール 他五篇 —ベンヤミンの仕事2　ヴァルター・ベンヤミン　野村修編訳
- 三文オペラ　ブレヒト　千田是也訳
- 短篇集 死神とのインタヴュー　ノサック　神品芳夫訳
- 果てしなき逃走　ヨーゼフ・ロート　平田達治訳
- ウィーン世紀末文学選　池内紀編訳
- ☆ドイツ名詩選　生野幸吉・檜山哲彦編
- 増補ドイツ文学案内　手塚富雄・神品芳夫

《フランス文学》

- トリスタン・イズー物語　ベディエ編　佐藤輝夫訳
- ラ・ロシュフコー箴言集　二宮フサ訳
- ラ・フォンテーヌ寓話 全二冊　今野一雄訳
- ドン・ジュアン　モリエール　鈴木力衛訳
- 守銭奴　モリエール　鈴木力衛訳
- フェードル アンドロマック　ラシーヌ　渡辺守章訳
- 完訳ペロー童話集　新倉朗子訳
- マノン・レスコー　アベ・プレヴォ　河盛好蔵訳
- 孤独な散歩者の夢想　ルソー　今野一雄訳
- ルソー告白 全三冊　桑原武夫訳
- フィガロの結婚　ボオマルシェエ　辰野隆訳
- 美味礼讃 全二冊　ブリア-サヴァラン　関根・戸部訳
- 危険な関係 全二冊　ラクロ　伊吹武彦訳
- 赤と黒 全二冊　スタンダール　桑原・生島訳

☆印の書目には、文庫版のほかに活字の大きいワイド版〔B6判、並製・カバー〕もあります

書名	著者	訳者
パルムの僧院 全二冊	スタンダール	生島遼一訳
恋愛論 全二冊	スタンダール	前川堅市訳
「絶対」の探求	バルザック	水野亮訳
谷間のゆり	バルザック	宮崎嶺雄訳
知られざる傑作 他五篇	バルザック	水野亮訳
レ・ミゼラブル 全四冊	ユーゴー	豊島与志雄訳
死刑囚最後の日	ユーゴー	豊島与志雄訳
モンテ・クリスト伯 全七冊	デュマ	山内義雄訳
三銃士 全二冊	デュマ	生島遼一訳
カルメン	メリメ	杉捷夫訳
愛の妖精（プチット・ファデット）	ジョルジュ・サンド	宮崎嶺雄訳
戯れに恋はすまじ	ミュッセ	進藤誠一訳
ボオドレール悪の華		鈴木信太郎訳
ボヴァリー夫人 全二冊	フローベール	伊吹武彦訳
感情教育 全二冊	フローベール	生島遼一訳
椿姫	デュマ・フィス	吉村正一郎訳
風車小屋だより	ドーデー	桜田佐訳
シルヴェストル・ボナールの罪	アナトール・フランス	伊吹武彦訳
少年少女	アナトール・フランス	三好達治訳
女の一生	モーパッサン	杉捷夫訳
脂肪の塊	モーパッサン	水野亮訳
地獄の季節	ランボオ	小林秀雄訳
にんじん	ルナアル	岸田国士訳
ジャン・クリストフ 全四冊	ロマン・ローラン	豊島与志雄訳
ベートーヴェンの生涯	ロマン・ロラン	片山敏彦訳
ミケランジェロの生涯	ロマン・ロラン	高田博厚訳
シラノ・ド・ベルジュラック	ロスタン	辰野・鈴木訳
狭き門	アンドレ・ジイド	川口篤訳
朝のコント	フィリップ	淀野隆三訳
シェリ	コレット	工藤庸子訳
シェリの最後	コレット	工藤庸子訳
海の沈黙・星への歩み	ヴェルコール	河野・加藤訳
恐るべき子供たち	コクトー	鈴木力衛訳
シュルレアリスム宣言・溶ける魚	アンドレ・ブルトン	巖谷國士訳
とどめの一撃	ユルスナール	岩崎力訳
フランス民話集		新倉朗子編訳
フランス短篇傑作選		山田稔編訳
増補フランス文学案内	渡辺一夫 鈴木力衛	

《ロシア文学》

書名	著者	訳者
完訳クルイロフ寓話集		内海周平訳
スペードの女王・ベールキン物語	プーシキン	神西清訳
狂人日記 他二篇	ゴーゴリ	横田瑞穂訳
外套・鼻	ゴーゴリ	平井肇訳
ツルゲーネフ散文詩		神西清 池田健太郎訳
初恋	ツルゲーネフ	米川正夫訳
二重人格	ドストエフスキー	小沼文彦訳
罪と罰 全三冊	ドストエーフスキイ	中村白葉訳
白痴 全二冊	ドストエーフスキイ	米川正夫訳
カラマーゾフの兄弟 全四冊	ドストエーフスキイ	米川正夫訳
戦争と平和 全四冊	トルストイ	米川正夫訳
アンナ・カレーニナ 全三冊	トルストイ	中村融訳

民話集 人はなんで生きるか 他四篇　トルストイ　中村白葉訳

民話集 イワンのばか 他八篇　トルストイ　中村白葉訳

イワン・イリッチの死　トルストイ　米川正夫訳

光あるうちに光の中を歩め　トルストイ　米川正夫訳

復活 全二冊　トルストイ　中村白葉訳

クロイツェル・ソナタ　トルストイ　米川正夫訳

人生論　トルストイ　中村融訳

可愛い女 犬を連れた奥さん 他一篇　チェーホフ　神西清訳

桜の園　チェーホフ　湯浅芳子訳

追憶 全二冊　ゴーリキイ　湯浅芳子訳

文学と革命 全二冊　トロツキイ　桑野隆訳

プラトーノフ作品集　原卓也訳

ロシヤ文学案内　金子幸彦

岩波文庫の最新刊

サド／植田祐次訳
短篇集 恋の罪

悪徳と美徳との鮮明な対立を示すことで人間の両項性を描き出した悲壮小説集『恋の罪』より四篇を収録。
〔赤五九七-一〕 定価七二〇円

ペトラルカ／近藤恒一訳
わが秘密

人間の不幸、罪、救いを論じた散文の最高傑作。徹底した自己分析がおこなわれ、ペトラルカ文学の秘密を解き明かす鍵がここにある。
〔赤七一二-二〕 定価六七〇円

山路愛山
豊臣秀吉(下)

秀吉の出現が必然的に要請される社会状況が克明に書き込まれた史伝の傑作。引用史料一覧を付す。(全二冊、解説＝朝尾直弘)。
〔青一二〇-六〕 定価七七〇円

ウィルキー・コリンズ／中島賢二訳
白衣の女(上)(中)(下)

すべては白ずくめの女との出合いから始まった。疑惑の結婚、遺産問題、国際的陰謀、そして謎めいた死。英国探偵小説第一の古典。
〔赤二八四-一～三〕上＝定価六七〇円 中・下＝定価各七二〇円

……今月の重版再開……

山住正己編
福沢諭吉教育論集
定価六二〇円
〔青一〇二-四〕

近藤恒一編訳
ペトラルカ **ルネサンス書簡集**
定価六二〇円
〔赤七一二-一〕

山本光雄訳
アリストテレス政治学
定価八二〇円
〔青六〇四-五〕

1996. 3.

エジプト神イシスとオシリスの伝説について　プルタルコス著　柳沼重剛訳

青　六六四－五

岩波文庫

520

ISBN4-00-336645-X

C0110 P520E

定価520円（本体505円）